
ネギま！ ～外側に立つモノ～

前々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～外側に立つモノ～

【Nコード】

N1482M

【作者名】

前々

【あらすじ】

・魔法先生ネギま！のオリジナル主人公（以下“オリ主”）モノです。

・この作品にはオリ主と原作キャラとの友情以上、恋人未満。果ては恋仲といった関係ができていますので、そういったモノが苦手、嫌悪感を抱くといった人は精神衛生上見ない方がよろしいかと思われます。

・また、性的な表現が過激ではないですが、あつたりしますの、それらが苦手、あるいは駄目、といった方はご遠慮ください。

・作者のネタ帳は常にゼロなので、更新は不定期です。

・そういった諸々が許せるといった寛大な方はどうぞお付き合いくださいませ。

キャラクター設定 Ver.03.5（前書き）

・前に感想でキャラクターの設定について、要望があったので簡単ですが、書いてみました。

・見なくても楽しんでいただけたとは思いますが、面倒な方は飛ばしてください。

後で改変する可能性あり、なので参考程度に見ただけだと幸いです。

キャラクター設定 Ver.03.5

ネギま！ ～外側に立つモノ～（設定） 03.5

■キャラクター紹介

□穂守 ほがみ 桂介 けいすけ

・本編の主人公。ある日自宅でペン回しの特訓をしていると、時空の歪みに飲み込まれ異世界に来てしまった。帰る方法がないので迷子になっている。本当の事を言うのは恥ずかしいので「悪の大魔王と壮絶な死闘を繰り広げた後、大魔王の最後の悪あがきに巻き込まれてこの世界に来了」とエヴァや学園長には言っている。後悔はしていないようだ。

・虚空から武器やちくわやダンボールや桂介の???をしまったり出したりできる。前に生モノを入れたまま忘れて放置していたが、思い出して出してみたらエグイ事になっていたので、それ以来食べ物には保存食とちくわだけになった。なんでこの能力が使えるのか自分でも分かってないらしい。

・変幻自在の魔剣：というか、よく分からない塊かたまりを持っており、それを適当に振り回して使う。釣り竿とかチェーンソーにもなるらしい。最近生きている事が発覚した。

・作者同様エロい事が好き。特に見えそうで見えないのが好物。

・“魔法淑女りりかるナノハ”というゲームにハマっており、“金髪的女性剣士”が嫁らしい。でも毎回復を脱がそうと、自分からダ

メージを受けに行くので、よく負ける。

> 桂介 「最近気づいたんだが……メガネって実はとってもイイモノなのではないだろうか？」

□ エヴァ

・寒い地方で出会った幼女。ある日出会った青年こと主人公に気まぐれに餌をやったら懐かれたらしい。以降、勝手に家に居つかれた。一応周囲には兄妹と言っている。ポニーテールやツインテールにすると大変可愛らしい。

・氷を何処からともなく出す事が出来る不思議な手品が得意。怒らせると氷漬けにされる。だが彼女をからかうのは楽しいので、桂介はやめるつもりはないようだ。

・最近、桂介から“誤魔化しの札”を貰って街に繰り出しているらしい。そして街で食べ歩きをしているのだが、結果体重が増えたようだ。

・騒がしくなった我が家の行く末を憂いているとか、いないとか…。

> エヴァ 「今日は…最近できたというつけ麺の美味しい店とやらに行くか。桂介？ 出かけるぞ。ついてこい!!」

□ 茶々丸さん

・エヴァの従者でメイドさんで美人さん。最近メイド服を着ていると、桂介に「ガーターベルトを履いてくれっ!!」と言われるので最近ではガーターベルトをよく履いている。

・最近、桂介と二人きりになると、彼（桂介）の動悸が激しくなるので、何かしたるうか？と疑問になっている。だが、今度は桂介を見てると自分の胸部が異音を発したり、頭から煙が出てくる時がある。桂介の持病？が移ったのではないかと危惧している。

> 茶々丸 「桂介さんのお部屋をお掃除します。……いかがわしい本を発見。『メカツ娘特集。いつだってメイドロボ創刊号』ですか……今日の所は見逃しましょうか」

□ 長瀬さん

・ある日、公園で出会った忍者みたいなエヴァのクラスメイト。けしからん身体をしているので、エヴァの為に今度会ったら爪の垢を貰おうと桂介は考えている。

・仕事先で桂介とたまに組むようになった。“くのいち忍法”っての使える？と聞いたなら手裏剣で串刺しにされた。

> 楓 「本当でござる。森の奥から男の声が聞こえて…『寂しい…寂しい…』って泣いているでござるよー!」

□ 爺さん（学園長）

・ 麻帆良で一番エライ人らしい。けっこう気さくな爺さん。遊んだり、白熱する会議を行ったり、ちくわを食べたり、エロ本を貸し借りしてる仲。たまにお仕事もくれる。

・ 自慢の孫がいるらしく桂介によく自慢してくるが、一度も写真を見せてくれないので、彼（桂介）はとも気になっている。しかし、どうせ頭が長いお孫さんなんだから、と彼（桂介）はタ力を括くっている。

・ 最近格闘ゲームにハマっており、特に“魔法淑女りりかるナノハ”というゲームで桂介と腕を競いあっている。持ちキャラは“黒い翼の女性”。

> 近右衛門 プルルル——ガチャツ「お、桂介くんかの？新作のゲーム買ったんでのう、遊びに来んか？」

□ ネギくん

・最近よく見かける子供。エヴァ達の担任らしい。

・紅茶を淹れるのが上手なので、よく桂介はネギくんからご馳走になっっている。

・カマンベールという名のオコジヨを飼っているらしい。

・最近エヴァに弟子入りしたので、家によく遊びにくるようになった。

>ネギ 「カモく〜ん…。アレ？ どこ行っただろう…。って、桂介さん！ なんでカモくんを火で炙ってるんですか!？」

□さく…刹那ちゃん

・夜のバイトでたまに一緒になる。常時刀を持った危ない娘。でも最近丸くなった。

・ストーキングが趣味らしい。このかちゃんと一緒にいると、よく見かける。でも最近はストーキングしないで一緒にいる事が増えた。

・こう見えて頭が悪い娘だったりする。

>刹那 「桂介さん、私に稽古をつけて——」「一本取る事に一枚脱ぐならいいよ」——ええっ!？」

□ しずなさん

・麻帆良で偶然知り合った大切な人。交換日記をしている。

・通販が趣味。最近はアダルトな下着を、好きな人に喜んでもらう為によく購入している。

・最近、妄想が激しくなっており、外でも平気で意識が飛んでたりする。最後には真っ赤になってクネクネする姿がよく見られる。

・デートをしても毎回緊張のしすぎで倒れてしまうので、まともに二人で出かけた事がない。鼻血がよく出るので鉄分をしっかりと摂りましょう。

> しずな 「やっぱり子供は男の子と女の子一人ずつで、白い犬を飼って、家は窓から海が見えるような……えへへ」

□ タカミチ

・数少ない男の知り合い。よく飯を奢ってもらう。お仕事が色々大変らしい。

・一時期情緒不安定だったが、よく笑うようになった。しかし、時々笑顔が人形のようにするのが気になる。

・最近、ネギくんと一緒にホテル街を歩いていたという噂が流れ、困っている。

>タカミチ 「またタバコの値上げかあ……最近ついてないなあ……」

□デコっ娘^こ（夕映）

・デコが広い以外印象が少ないので、桂介はたまに彼女の事を忘れる。でも、後で思い出すのであんまり気にしていない。

・桂介と二人きりの時では幼なじみみたいな関係（擬似^{ぎじ}）になる。

>夕映 「ふむふむ……幼なじみの10の心得”……。その3、相手の人が他の異性に色目を使っている時は拳^{こぶし}で止めよう。……えっ、拳！？」

□このかちゃん

・茶飲み友達。日本茶から始まり、中国茶やハーブティー、紅茶やコーヒー。ジュースに至るまで様々に取り揃えている。最近はカクテルについても勉強しているらしい。

・とても素直な良い娘なので、エヴァに見習ってほしいと桂介は思っている。

・お兄いと読ぶと桂介のテンションが上がるので見てて楽しいようだ。しかし、ある日を境に子犬のような目をして怯えるようになった。…これはコレで有りだと、結局呼ぶようにしている。

>木乃香 「新しい下着欲しいな。……お兄い連れて行ったら面白くなる気がするわ。せつちゃん。桂介さんとお買い物行く」

□アスナ

・何かいつも怒っている……気がする娘。でもたまに全裸で街中を走っていたりするので、侮れない。

・目の色が左右で違うのでカッコいい。桂介も真似しようとして、絵の具を目に垂らそうとしたらしい。

・桂介の事は、エヴァの兄でバカっぽい人だと思っている。桂介は、

アスナの事はバカだと思っている。

「何か最近、高畑先生の不穏な噂を聞くわね……。もし誰かが故意に流してるんなら、ソイツを八つ裂きにするわ！」

□ あるベーるかもみーる（カンペ有り）

・ケモノ。

「いや…あの……もうちょっと…何かあるんじゃないですかねえ…」

□ 図書館島の主こと、ローブの紳士

・変態（。リコン）

・変態（小さいのが好き）

・変態（定期購読書は“YESロリゝタNOタッチ”）

「さあさあ、そこにいるアナタもこの本を読んでみませんか？ 未

知なる果実の甘さを体験できますよ?。」

□ チャチャゼロさま

・エヴァ家の守り神。貢ぎ物をする则助けてくれる。

・普段は動けないので、桂介に命令してよくウロウロしている。

「アー……退屈ダナ。オ、イ、酒持ッテ来テクレ。居候。」

キャラクター設定 Ver.03.5（後書き）

はい。二度目の更新です。

相変わらず、性格や設定が一部違う気もするでしょうが、（というかほとんど違います…）あまり気にしないでください。

まだ誰かいたような気もしますが、作者が覚えていないので多分いないでしょう。

それでは、また本編で会いましょう。

第一話 少女とメイドと + α

新しいチャストリングを買った。

マイブームなのだ。

コイツは俺を狂わせる。

…… たまらない。

解けそうに思えて実のところまったく解けていない。

この感覚がたまらない。

そして、これが解けた時の達成感。

謎を解読した、開放感。

思わず（汗で）濡れてしまいそうだ……。

「ふふ…ふふふふ……」

「なあ？　なんで、アイツは“アレ”を始めるとあんな風になるんだ？」

「発汗量、鼓動。その他の値から、極度の興奮状態にあると察知します」

ふふ…もう少しで、オマエの全てを丸裸にしてやるぜ……。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第一話　幼女とメイドと＋α

「ソレはそんなに面白いモノなのか？」

目の前に座っている金髪の幼女。もとい、この家の主さまが、机の上にある解かれた愛しい“ソレ”を見て、尋ねてきた。

「ああ。たまらないな。コイツと一緒にいる時、俺は他の全てが目に入らなくなる」

「実際のところ、知恵の輪に挑戦中の桂さんには、私達の声や接触などの一連の行動に、まったく気づかれていないようでした」

「どれだけ集中しているんだ……」

そういつてエヴァは、バラバラになったチャストリング。ようするに知恵の輪だな。を手に取った。

「というか、これは解いて元に戻すまでが一通りの楽しみ方なのだろう？　なぜ、オマエはいつも戻さずにバラバラのままにしておくんだ？」

「いや、それは――」

エヴァの一言で、俺の身体がビクリと動きを止める。視線が何故か勝手に明後日の方向を向いてしまうぜ。

「マスター。桂^{けい}さんは、解く事は出来るそうですが、戻す事ができないそうです」

「……なに？」

「……」

「ですから、桂さんはこの知恵の輪というモノを解くという行為までは問題なく行えるそうですが、そこから先の戻す行為になると、一切が分からなくなってしまうそうです」

「……」

「……」

ああ、茶々丸さん（緑髪をした、この家の美人（ココ重要）メイドさん）に、全て話されてしまった。

エヴァには知られなくなかったのに……。

「アッハッハッハッ！！　じゃあ、なにか？　オマエは解くのに頭を使わずにいつも適当に運だけで、解いていた、と？」

大口開けて笑うエヴァに、俺は二の句が告げない。

コイツはこういう反応をするだろうから、教えたくはなかったのに……。

「アッハッハッハ！！　これは傑作だ。あれだけ、知恵の輪について熱く語っておいて、まさか、まさか戻せないとは……ククッ……」

畜生。別に理解していない訳ではないのだ。

何故か戻せないだけなのに……。

エヴァは、まだ笑っている。涙すら浮かべて。

そんなに笑うこたあ、ないだろうよ！

「——くくつ。あー笑った、笑った。どれ、貸してみる。こんなモノ私がすぐさま元に戻してやろう」

エヴァはそう言って、俺のチャストリングを手を取った。

二つに分かれた、基本的な形とされる環の形のチャストリングだ。

「いいか？ こういうのは、開いている合わせ目の位置が重要なんだ。こうやってだな……」

エヴァが、カチャカチャと俺のチャストリングを弄る。

はんつ！ そんな簡単に出来ると思うなよ。基本系である環の形状とはいえ、そんじょそこの素人が簡単に解けるわけがないんだぜ？

———と思つたのも束の間。

エヴァは俺の目の前で、あっさりとリングを元の形、買った当初の形へと戻していた。

「ふふつ……どうだ？ まあ、キサマがどうしてもというなら、教えてやらんでもないが？」

「……うう」

「ん？ どうした？」

「ちくしょー！ 未だにオネシヨしてるような少女に勝ち誇られたー！ー！ー！」

「バカな事を大声で喋るなっ！！ だいたい、オネシヨなどしたことないわ！ー！！」

くそう、見てろ。俺だって、やれば出来る子だって事を見せてやる。俺が新たな決意を見せていると、エヴァの隣にいた美女から声が掛かった。

「それでは、そろそろ夕食の支度に入ります。桂^{けい}さんは何が食べたんですか？」

「エプロン姿の茶々丸さんを是非^{せひ}！ー！」

「私の家族に何をするつもりだ、キサマー！ー！ー！」

ふむ、もう晩飯の時間か。

まあ、今日はこのくらいにしておいてやろっ。

それと、趣味は自分の部屋で楽しむようにしよう。うん。わざわざ

居間でやる必要はないからな、うん。

あ、ちなみに夕食はハンバーグでした。

超美味しかった。

第一話 幼女とメイドと + α (後書き)

え、こういった執筆云々は暇つぶしにちよこちよこと書いていたのですが、投稿は何しろ初めてなので多分に見苦しい出来かと思われませんが、温かい目で見てください。

と言っても、実際右も左も分からないドシロートなので皆さんの心証がこれ以上悪くならないように直せる所は直したいので、何かありましたらコメントでもくれるとありがたいです。

第二話 6月の忍者とアンニユイ（意味は分かっていない）な気分

俺の名前は桂介^{けいすけ}。

決して、万が一にも、“かつらすけ”などという名前ではない。

エヴァという幼女の家になつていて、いわゆる居候というやつだな。

俺と彼女が出会ったのは、まだ寒いある地方での出来事だった。

出会いは突然だったが、今なら分かる。

これが、運命というモノなのだ、と――。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第二話 6月の忍者とアンニユイな気分

「……暇だ」

真昼間に、暇を持て余した俺は、麻帆良学園女子中等部の近くにある公園のベンチで空を仰いでいた。

まったく、退屈こそもっとも忌むべきものといった人の気持ちが分かるというモノだ。

途中の自販機で売っていた『百分百絞り汁・6月の香り』を飲みながら、公園をぼうつと見ている。

何が百分百の絞り汁なのか分からないが、甘くて美味しい（が、ちとカビ臭い）そのジュースを飲んでいると、公園の一角。木の上で何処かを見ている少女？いや、どちらかといえば女性か。を見つけた。

女性は、中等部の制服を着ている。

（コレって、いわゆるコスプレ——）

何か見てはいけないモノを見た気分だ……。

俺は、目を逸らし、また空を見上げた。

天気はこれでもか！といわんばかりに真っ青なので、太陽光が若干眩しい。

俺は、やはり顔を公園に向けると、なんと先ほどの女性と目があつた。

しまった、と思うが、もう遅い。

長身の女性は、トコトコとこちらにやってくると挨拶をしてきた。

「こんにちはでござる」

「はあ……こんちは」

「ござる？と若干思ったが、スルーする。

キャラ作りは大変だからな。

「ここらは女子中等部のエリアでござるが、お兄さんは学園の関係者か何かでござるか？」

なるほど。確かに女子中等部に教師でもない男がいればそれは不審者か何かだろう。

いくら俺が良い男でも、女子中等部においては違和感が生まれるというモノ。ここは丁寧にご説明するべきだ。

「ああ、まあ学園長の爺さんとはちょっとした知り合いでね。ちよくちよく、こちらで仕事させてもらってるんだわ」

嘘は言っていない。

学園長とは友人だし、たまに仕事も貰っている。

まあ、仕事つてのは、爺さんの囲碁の相手とか、お子様に聞かせられないお話（性癖とか嗜好とか萌え要素とか）だったりするんだがな。

「そうでござったか。いやはや、疑って申し訳ないでござるよ」

「気にしないでくれ。まあ、あまり学園にも来ないんでな。知らないのも仕方ないからな」

まあ、こちらの方まで出てくるのは滅多にないのだ。

それにいつもだったら、“ステルス迷彩4号”という名前のダンボールで何処ぞの傭兵のように潜入しているからな。

知らないのも当然といえるだろう。

「ところで、キミは中等部の生徒なのかな？」

今度は俺が質問をする。

俺としても、警備員とまではいかないが、あきらかに中等部には似つかわしくないプロポーションで中等部の制服を着ているこの女性

は、若干怪しいだろう。放っておくわけにもいくまい。

「にんにん。そうでござるが……み、見えないでござるか？」

「ああ、いやいや。妹と同じ制服を着てるんでもしかしたらと思つてね」

「妹さんでござるか？」

「ああ。エヴァンジェリンつつって金髪で小生意気な目つきした娘なんだけど、知らないかな？」

「エヴァどのなら、拙者と同じクラスでござるよ」

「おお、クラスメイトさんか。ウチの妹がお世話になっています」

「これはこれは、ご丁寧に。こちらこそでござる」

変な言葉遣いだが、良い人のようだ。

うん。最近の中学生は発育が良いものだ。大学生といっても通用しそうではないか。

エヴァも、この娘の十分の一でも成長していれば……いや、それは酷というものだな。

「おっと、拙者、そろそろ部活の集合があるでござるよ。こちらで

失礼するでござる」

「ああ、引き止めて悪かったな。えっと――」

「拙者は、ながせ長瀬 かえで楓というでござる」

「俺は、ほがみ穂守 けいすけ桂介。苗字がエヴァと違うけど、まあ、複雑な家庭環境って事でスルーしてくれ。んじゃ、またね。長瀬さん」

「複雑なんでござるな。ういっい、了解したでござる。それでは、またでござる。穂守どの」

そういつて、長瀬さんは、ものすごい速さで消えるように去っていった。

まるでその姿は忍者のようでもあった。

「うーん……まさか、な……」

まあ、あれだけ発育がいいのだ。

運動神経も良くても不思議ではないさ。そう考えながら、俺も公園を後にした。

家に帰ろうとしている途中、茶々丸さんと出会った。

センチメンタリズムな私には、運命を感じられずにはいられなかったが、同じ家なので別段不思議でもなかった。

「あ、桂さん」

「茶々丸さん。奇遇だね。今帰り？」

「はい。マスターの薬を取りに言っていたので少し時間が掛かってしまいました」

最近、エヴァが風邪と花粉を両方こじらせて家でよく寝ているのだ。おかげであんま構ってくれないのが少し寂しかったりする。

「そか、エヴァも困り者だな。茶々丸さんに心配をかけるなんて」

「いえ、私は――」

「よし！　せつかくだから帰ったら俺が今日の晩ご飯作るよ！」

「え？　あの――」

「任せてくれ！　いつも俺達の世話をしてくれる茶々丸さんに恩返しをしたいんだ！」

「ありがとうございます。ですが――」

「よし！　そうと決まったら早く帰ろう！」

そう言つて俺は茶々丸さんの手を掴んで、急いで帰つた。

茶々丸さんの手は少し硬い気がしたが、俺が年甲斐もなくなるとききしていたせいだろう。

女の子の手が硬いと勘違いするなんて……なあ？　ありえないぜ。

ちなみに家に帰ると、何故かエヴァの風邪は治つていた。

隣に最近に担任になつたという礼儀正しい小坊主こぼうずが見舞いに来ていたが、彼の影響だろうか？

ふっ……それなら兄として応援してやらなければな。

夕食は俺のフルコースをご用意した。

お礼に担任の子坊主先生こぼうずも招待したが、俺の料理に驚いていたようだ。

ふっ……まさかちくわが刺身で出てくるなんて思いもよらなかった
だろう？

「…何故、料理の9割がちくわで構成されているんだ？ まあ、こ
の“ちくわ麺”とやらは、なかなかだが」

「マスター。まだ“ちくわの唐揚げ”が残ってますよ？」

「あ、おいしいですね。この“ちくわの姿煮”」

俺の“ちくわ百選”料理は大変好評のようでした。

第二話 6月の忍者とアンニユイ（意味は分かっていない）な気分（後書き）

作者も練物が好きです。特に中にイモが入ってるのが好きです。

一回は“屋台のおでん”を経験してみたいもんです。

第三話 サクちゃんと伝説のダンボールを持った俺

今日は夜のお仕事だ。

ちなみにエロい事じゃないぜ？

まったく……何を想像したんだか？

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第三話　サクちゃんと伝説のダンボールを持った俺

学園の外側に、森に覆われた一画がある。

ここ麻帆良学園は、ちょっとした要所のような場所なので、お呼びでないお客さんが深夜に勝手に訪問に來たりする。

そんな場違いなお客さんを迎えるのが、この森に覆われた一画なのである。

他にも同じような場所がチラホラとある。

しかし、モノ好きな輩はいるものだ。

ココはただ、デカいだけの学園なのになあ？

まあ、そんな訳で、俺はココの学園長こと、爺さんとの契約でこの防衛のお仕事を受けているという訳だ。

決して額が良かったから、という訳じゃないぜ？

ま、そんな事より、さっそくおいでなすつた。

俺はダンボールからその身を晒す。

「待たせたな——」

気分は伝説の傭兵だ。

「……なんで、そんな所から出てくるんですか」

サイドに髪を結わえた少女に突っ込まれた。

あ、ちなみにこの娘は同業者で、ウチの妹のクラスメイトでもある。

「ダンボールはな、何と言うか……そう。アレだ」

「アレ、ですか？」

「そう、なんて言うか、あの中はな……とても落ち着くんだ」

「……はあ」

「いるべき所にいるというか、人は皆ここにいるべきなんだ……という、安らぎのようなモノを感じるんだ」

「……」

「……被ってみたいと思っただろう？」

「思ってますん!!」

サイドテール少女、名前は……さく……さく……サク何とかち

やんだ。

サク何とかちゃん、略してサクちゃんは、抜き身の野太刀を構えると、前方に展開した鬼や何やらの集団に向かっていく。

あの鬼ら、妖怪集団が毎回深夜にやってくるお客さんという訳だ。

「おおー。さすがサクちゃん」

「誰ですか、ソレは!？」

サクちゃんは、ツツコミを入れながらバツバツと敵さんを倒していく。

おかげで敵さんがバツバツと消えていった。

そう、バツバツと消えていったのだ……。

……やべえ、俺知らない子みたいになってきた。

遅れて俺も虚空から武器を取り出す。

決して主人公なのに、出番がなくなると焦ったわけではない。

俺が出したのは、片刃の長剣だ。

他所^{ヨソ}の世界で、ちょっとした魔剣と呼ばれていたが、今では俺の愛剣だ。

コイツは俺の意思で姿形を容易に変化させる事が出来るという優れたモノだ。

今回は刀の形。要するに居合い刀だ。

「せゝ……っの！」

納刀状態から、鬼達に向けて一気に振りぬく。

剣から衝撃波のようなモノが出て、数体の鬼を巻き込んでいった。

「ふ……また、つまらぬモノを斬ってしまった」

一回言ってみたかったんだよね。

「馬鹿言っでないで、早く次にいつてください！」

味方の一言に一刀両断にされながら、俺はしぶしぶ残りの敵へと向かった。

「破アツ!!」

サクちゃんの渾身の一撃が最後の一体を、頭から力チ割る。

煙と共に鬼は消え、後には静寂となった森だけになった。

「ご苦労さん、サクちゃん」

「お疲れ様です。……というか、私の名前を忘れてるのではないでしょうね？」

咲ちゃんこと、刹那嬢はそういつて釘を刺してくる。

名前を忘れているなんて、そんな馬鹿な事ある訳ないだろう。

「んじゃ、報告は俺がしとくわ。さ……刹那ちゃんは先に上がりなよ」

「……分かりました。お願いします」

さく……刹那ちゃんは、最後まで納得がいていないような顔でこちらを見ながら去っていった。

俺は、彼女とは反対方向に歩きながら、懐に入っていた携帯で爺さんに連絡だ。

「……あ、もしもし？爺さん？」

「合言葉は？」

「ジャンプの三大テーマは？」

「友情、努力、勝利！ワシらのテーマは？」

「おっぱい、メイド、ハーレム！」

「おお、桂くんじゃったか。それで、何か用じゃったかのう？」

「ああ、こっちの方は終わったぜ。報酬はいつもの講座に入れておいてくれ」

「ほっほっほ。了解したわい。ご苦労じゃったのう」

「あいよ。んじゃ、またあったらよろしく」

「うむ、期待しておるのう」

爺さんの通話を終える。

これで、入った金でDSP4000を買っぜ！

後日。

「ん？ キサマそのゲーム機はどうしたのだ？」

「ん？ コレ？ 爺さんの依頼料で買った」

自宅で新しく買ったゲームでピコピコしてたら妹が興味があるのか、

チラチラとゲーム機を見ながら近づいてきた。

「依頼？ ああ、深夜の警備か。よく引き受ける気になったな」

「まあね。俺と爺さんの仲だし」

「（どんな仲なんだ？）そ、そうか……。ちなみにいくら貰ったんだ？」

「気になるのか？ まあけっこう危険な仕事だからな。エヴァが心配してくれるのは嬉しいぞ。お礼にその髪をポニーテールに結つてやるぞ」

「いや、別に心配はしてない……って、私の髪をポニーテールにしようとするのはやめろー！」

「えゝ……」

「えゝ、じゃない！ まったく……。それで、結局いくら貰ったんだ？」

「聞いて驚け。なんと——3万円だッー！」

「……は？」

「いやあ、短時間で3万も稼げるんだから、イイ爺さんだよな」

「……騙されてるぞ、お前」

「へ……？」

その後、学園長室で学園長が口にちくわを咥えて奇怪な姿で吊るさ
れているのが発見されるのだが。

……それはまた別のお話。

第三話 サクちゃんと伝説のダンボールを持った俺（後書き）

作者はメ。ルギアが好きです。

2のイージーモードで36回ゲームオーバーになりましたが、それでも大好きです。

第四話 君が折れるまで！俺は！頼むのをやめない！！

今俺は、エヴァと交渉をしている最中だ。

交渉とは、とても難しいモノだ。

何せ、相手は自分よりも上位の立場なのだ。

それは人質をとっていたり、物事を握る権限を持っていたり、様々である。

そんな自分よりも、上位の相手の持つ有利である“何か”を相手から引き離す、またはこちらに譲渡させる為に、相手を常に自分のコントロール下に置き終始物事を進めなければいけないのだ。

コチラが焦れて怒り、相手に不快感を表すなど当然あってはならない。言語道断だ。

これだけでも大変な事から、交渉というモノがどれだけ困難な事なのか理解していただけたかと思う。

——そう、たとえどんなに腹立たしい事があっても決して怒ったりしてはいけないのだ。

「だから……」

「だから何だというのだ？ このヘツポ」

「上等だよ、この万年洗濯板がツ！」

「ケンカ売ってるのか!？」

ああ……今日も暑いなあ。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第四話　君が折れるまで！俺は！頼むのをやめない！！

事の発端はこうである。

季節は夏。

←

俺暑い。

←

居候である俺の部屋は屋根裏部屋。

←

当然、クーラーという便利なモノはない。

←

家主に付けてくれるように頼みこむ。

←

怒られた。↑今ここ。

知ってはいたが、再確認。

エヴァは、ドケチである。

「本当に礼儀を知らんヤツだな……」

礼儀？ そんなモン猫に、にぼし付けて一緒に食わしてやるわ。

「いいだろー。暑いんだしクーラー付けてくれよー」

「何故キサマはいつの間にか居据わっておいて、そんなふてぶてしい態度が取れるんだ？　だいたい、今まではうやむやにしていたが、家主の許可なく家にいるという事は不法侵入なんだぞ！」

「は？　何言ってるの？　俺が自分の家にいるのにおかしい訳ないだろ？　頭、湧いたか？」

「湧いてるのはキサマだろうがー！ーッ！！」

大変失礼な妹である。

まあ、それはさておき。

話は戻る。

「――で、そんなに屋根裏は暑いのか？」

「当たり前だろう。何せ窓は一つ、しかも片面だけで風が通る事がないんだ。結果的に部屋の空気は淀むし、窓にはサッシもないんだ。虫が入り放題になるから夜はあまり開ける訳にもいかん」

「まあ、確かに部屋は暑いだろうが、扇風機くらいは置いてあるだろう。それで我慢したらどうなんだ？」

「コンセントもないのにどうやって家電製品を動かすんだよ」

「……もう、うちわでもいいだろ？」

「それなら下敷き使ったるわー！ツ！！」

コテージ風の我が家には、屋根裏以前にコンセント自体があまり設置してなかったりする。

「だから、クーラーこと、“冷子ちゃん1号”を買ってくれー！！ このままでは夏が終わる頃に屋根裏で干からびた俺が出来上がるぞ！」

「何が冷子ちゃんだ！ キサマなら水でもかければ生き返るわ！！」

「生き返るがミイラはイヤだ！！」

「生き返るのか！？」

なんとなく生き返りそうな気はする。

根拠ないけど。

「つけてくれよー！。付けてくれないと、今日から泣く泣くエヴァの部屋で寝る事に……」

「部屋にまでくるつもりか！？ しかも、“泣く泣く”とはどういう事だ！！」

「嫌だから“泣く泣く”と言ってるんだろぅがッ!!」

「本気でケンカを売っているのか貴様は!？」

おお！ エヴァの手から爪が伸びた。

コイツがこういうビックリ手品を素でやりだすとマジで危険信号なんだよな。

「待て待て、よく考えろ。お前だとて、いくら兄妹とはいえ男を部屋に入れるのは抵抗があるだろぅ。ソレと同じだ」

「だから兄妹ですらないだろぅに……。まあ、普通は異性うんぬんよりも他人が自分の部屋に入ってくるのはイヤだろぅな」

「だろ？ 俺とてエヴァを屋根裏に入れるのは（秘蔵のH本や萌え本がバレないかドキドキするので）抵抗がある。という訳でエヴァが嫌がるという意味で、“泣く泣く”と言っただ」

「む、そうか。……ふむ」

よし、エヴァが思考モードに入った。この内に色々とメリットのある事ない事吹きこんで買わせてやるぜ。

「それにアレだよ？ クーラーがあれば、部屋が冷たくなって俺も寝相が良くなってあまり寝返りしなくなるし——」

「確かにお前のいる天井からやたらギシギシ音が聞こえるからな」

「部屋が冷たいから地球にも優しい。温暖化する地球を涼しくしようぜ」

「無理に決まってるだろう」

「今朝のチラシ見たら、近くの家電屋で今なら部屋の空気を清浄にしたり、マイナスイオン出したり、プラズマが出たりとスゴイ機能ついたヤツがこの値段で売ってるんだぜ」

「ふむ、確かに手頃な値段ではあるな。私の部屋のも買い替えるか」

「俺が超喜んで、エヴァへの株急上昇だし」

「フム、まあキサマに誰の立場が上かを思い知らせるのにはちょうどいいか」

「（「コソコソ」茶々丸さん。喜んでくれる？」「？ よく分かりませんが、ハイ」）——茶々丸さんも喜んでくれるし」

「そうか、茶々丸にも色々と世話になってるしな」

「これで買わなければ女が廃^{すた}るってもんだろ？」

「まあ、そうだな。——仕方ない買ってやるう」

「よっしゃー！——ッ！！ 流石だ、エヴァ。愛してる！！！」

「キサマの“愛してる”は、とても軽く聞こえる……」

という訳で、エヴァにクーラーを買わせる事に成功した。

俺は一仕事終えた心地よい疲れに身を浸しながら、茶々丸さんの淹れてくれたお茶を楽しんだ。

後日、クーラーを設置していたら、額の裏から秘蔵のH本。

【いらつしゃいませご主人さま♪ ツンデレメイドのガーターベルト特集号♪「身も心もご奉仕してあ、あげなくもないわよ？」】

が発見され、その事でエヴァのびっくり手品で氷漬けにされるのだが……それもまた、ある夏の日のお話。

第四話 君が折れるまで！俺は！頼むのをやめない！！（後書き）

エヴァの家どころは、よく分からないので適当です。

コテージだから、コンセントが少ないだろうと、勝手に妄想しただけです。

まあ、コンセントくらいは普通にあるとは思いますがどね…。

第五話 俺だって、その手品をやってみたいんだ

おかしな夢を見た。

夢の中では俺とエヴァ、茶々丸といったいつもの面々と、エヴァのクラスメイトだろうか？

何処かで見たような年頃の少女たちが複数人。

そして、己の身長よりも大きな杖を持った、10歳くらいの赤い髪をした小坊主がいた。

小坊主も何処かで見た覚えがある——何処だったかな？

それらが一樣に、何かに向かって闘いを繰り広げていた。

いや、これは“戦い”だったのかもしれない。

なんせ、俺達が使っていた“力”。それは、刀や手裏剣。そして——杖。

それらが生み出す“魔法”とか“気”だったのだからな。

「な？ おかしな話だろ？ 魔法なんて非科学的なもんがあるわけ

ないのにな」

「そ、そうじゃのう……（あれえ？ 彼は魔法関係者じゃなかったかのう？）」

ん？ どうした爺さん？ 顔が青くなってるぜ。

ネギま！ 〽外側に立つモノ〽

第五話 俺だつて、その手品をやってみたいんだ

俺が今日も今日とて、家でゴロゴロしている駄^{いまつと}幼女と一緒に過ごしている、茶々丸さんが台所から何かを持ってきた。

「マスター、桂さん。おやつに洋梨のゼリーはいかがですか？」

「ほう、悪くないな……いただくっ」

「わーい。いただきます」

ゼリーのプルプルした柔らかさと洋梨のシャクシャクとした感触が
とても美味い。

「む、もう少し冷やすか」

エヴァがそう言って手をかざすと、彼女の皿を覆う空気が一瞬白く
染まる。

そして数秒と経たない内に、彼女のゼリーはまるでシャーベットの
ように固まっていた。

「……少しやり過ぎたか」

そう言いながらも満足そうに、ゼリーをシャクシャクしているエヴァ。
ア。

それを見て、自然に言葉が漏れていた。

「いいなあ……」

「ん？ 何の話だ？」

「いや、ソレ」

「……？ —— ああ、なんだ。オマエのも冷やしたいのか？」

「いや、ソレは別にいいんだが……」

「……？ じゃあ、なんだ？」

「だから、ソレだよ」

「だから、ドレだ？」

「ソレだよ！ ソレ、ソーレッ！！」

「だから、ドレなんだッ！？」

まったく、言っても分からない現代っ子はこれだから。

「だから、さっきのびっくり“手品”だよ」

「手品って——（コイツ、まだ魔法を信じてなかったのか？）」

「エヴァごときに出来る手品なんだ。俺が出来なきゃ恥ずかしいだろ」

「ほほう？ 私“ごとき”ときたか……（怒）。そこまで言うなら

ば教えてやらんでもないが――」

「おお、教えてくれんのか？」

「しかし、これはかなり高等な技術がいるモノでな。私でも覚えるまでに散々苦労したのだ。はたして貴様ごときが扱えるモノかな？」

「上等だって。エヴァ程度が出来る手品なら楽勝に決まってる」

「ふ、ふふふ……いいだろう。そこまで言うなら教えてやる。ついでこい」

「あ、待つて。まだゼリー食ってない」

こうして、俺のビックリ手品修行の日々が始まった。

一日目。

「ほれ、コレを持ってみる」

「なんだ？ エヴァの、秘蔵の変身魔法少女コレクションの変身ステッキか？」

「そんなコレクションなぞ無いわ！！　いいから、コレを振りながら“プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》”と言え」

「ちゃんと手本見せてくれよい」

「まったく……仕方ないな。プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》！」

「うわあ……恥ずかしい娘がいる」

「手本を見せてやったのに、その態度はナンだー！ー！？」

二日目

「プラクテ・ビギ・ナル。………アールデスカット R 死切ー！ーッ！！」

「何故、初歩の火を出すだけの呪文で、けんげき剣戟が発生してるんだ？」

「やっべ、楽しくなってきた♪　蛙アー流出素家ルデスカツ都トー！ーッ！！」

「人の別荘を、得体の知れない技で壊すんじゃないッ！！」

三回目

「プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》」

「やっと、まともな火が出てくるようになったか……」

「プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》」

「……ん？ おい、もういいぞ」

「プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》」

「おい、ちょ……」

「プラクテ・ビギ・ナル。火よ灯れ《アールデスカット》」

「馬鹿ーッ！！ 火力上げ過ぎて家が火事になってるじゃないかー
——（泣）——」

こうして、俺は火のビックリ手品（初歩）が扱えるようになったの
でした。

後日、学園長室にて

「なあなあ、見てくれよ爺さん。俺の手品」

「ほっほ、手品か。どんな事をするのじゃ？」

「何もない所から火が出るんだぜ！」

「……………火？」

「プラクテ・ビギ・ナル！ 火よ灯れ《アールデスカット》——
ーッ——！」

「ぎゃあああああああああああああああああ！？」

爺さんに、ものっそい怒られた。

第五話 俺だって、その手品をやってみたいんだ（後書き）

主人公は異世界からの迷子で魔剣使い？ですが、魔法は信じていません。

ちなみに、平日はエヴァの家でゴロゴロしています。
ついでに、休日はエヴァの家でニヤニヤしています。

それでは、また次回お会いしましょう。

第六話 おりっぺもひこちーも、皆へみんなに見られながらじゃ公へおおやは

世間では七夕という行事が今日あるらしい。

何でも、織姫こと、“おりっぺ”と彦星こと“ひこちー”とやらが一年に一回だけ出会って、にやんにやんするらしい。

あと、星に願い事をするとか16年後くらいに叶うらしい。

大変、不可思議な行事だが、せつかくのイベントなのだ。俺も参加せねばなるまい。

まずは……おりっぺとひこちーのにやんにやんを覗く為に望遠鏡がいるな。

エヴァは持つてるだろうか？

ネギま！　　ゝ外側に立つモノゝ

第六話 おりっぺもひこちーも、皆に見られながらじゃ公みんなにイチヤおおやけできないだろうな……

エヴァを探していると、居間でエヴァと茶々丸さんが二人でスイカを食べているのを見かけた。

「あ、桂介さん。桂介さんもスイカを食べますか？」

「食べる」

茶々丸さんが俺に気づいてくれると、俺にもスイカを食べるかどうかを尋ねてきた。

ありがたく頂くとして、俺はエヴァの隣に座って大人しく待つ事にする。

「部屋で何かゴソゴソと、何をしていた…って、なにをしている？」

「シャクシャク…ん？ エヴァのスイカを食つとるんだが？」

エヴァは最初にスイカの種を全部取ってから食べる派らしいので、種がなくなつて食べやすくなつたスイカをいただく。

スイカの甘みが口の中に広がってとても美味しい。

「キサマーーーーッ!!（怒&泣） 私がせつかく食べようと、頑張って、頑張って、頑張って、ようやく種を取りだしたというのにーーーーッ!!」

「ヒヤアッハッハッハッハッハ!! コイツはうめえ! 最高だあ!!」

「クロス!」

エヴァの目が黒くなっているような気がするが、俺は決してスイカを離さない。

というか、思ったよりもスイカが美味しかったので、そのまま食べた。

「死ねーーーーッ!!」

エヴァがお薬の入ったビンを何処からか出して投げってくるが、俺には当たらないぜ。

「ふ・・・小娘ごときの力で俺様を倒そうなどと、百年はや...」

「桂介さん、スイカをお持ちしま…」

しかし、逃げている途中でタイミングよく台所から出てきた茶々丸さんとぶつかりそうなり、急ブレーキをかけてしまった。

「しまった!？」

「馬鹿め。ニウイス・カースス氷爆ツ!!」

「ぎゃあああああああ!？」

数時間後。

エヴァに全身氷漬けにされましたが、茶々丸さんがお湯をかけてくれたので、頭だけは出てこれた。

首から下はまだ、氷漬けだな…。

「…で？ 何がしたいんだ？」

「七夕とやらをやってみたいのです」

「七夕…確か、笹に願いを書いた短冊を吊るす行事だったか…？」

「はい。正確にはお盆の行事の一環で行うモノだったそうで、最近では地方によって男女で贈り物を送ったり、お素麵^{そめん}をいただいたりするようです。マスター」

「ふむ、先祖の霊などは私には何の興味もないが…暇だしな。簡単にやってみるか」

「かしこまりました」

「さすがだ、エヴァ。それでこそ我が妹だ！」

「貴様は見ているだけだな」

「へ…？」

数十分後。

「……………」

「ふむ、そうめんというモノもなかなか美味しいじゃないか」

外に簡易的なテーブルとイスを出し、そこでエヴァは目の前の料理に舌鼓をうっていた。

家の横には本格的な笹が配置しており、そこには様々な色の短冊が縦横に揺れていた。

「……………」

「今日は夏のわりには涼しいな。浴衣を着るのは久しぶりだがやはり着物はいい。最近の日本人は面倒くさがって着ないが、まったく嘆かわしいモノだ」

エヴァは浴衣姿になっており、ゆったりとイスにもたれ掛かりながら満点の星空を見上げていた。

空は雲一つない快晴なので、深夜になって綺麗な星空が辺りを覆うように光っているのが窺えた。^{うかが}

「…なあ、エヴァ」

「なんだ？」

「俺も腹減ったんだが…」

「そうか」

「うん。ついでにそろそろ寒いので出してほしいんだが…」

「駄目だ」

「駄目ですか…」

さて、俺がどうなっているかといえば、数十分前と同じくまだ氷漬
けのままだった。

茶々丸さんが七夕の準備で笹飾りやら料理やら頑張っているので、
誰もお湯をかけてくれないのだ。

なので、いまだ俺の首から下は氷漬けでまったく動けなかったりする。

「謝るので、いい加減出してくれませんか？」

「イヤだ」

「イヤですか…」

季節から夏なのでいい加減、自然解凍してもいいものだが、エヴァ特性の手品のおかげか、まったく溶ける様子がなかった。

「なあ、エ…」

「黙れ」

「……………」

動きたくてもまったく動けず、そのまま…

晩飯を終え…

夜が更け…

朝になって…

昼が過ぎ…

学校から帰ってきたエヴァに泣きながら謝ると、ようやく氷から解放してくれた。

イタズラは今後、控えようと少し思った七夕でした。

オマケ

俺が氷漬けで一夜を過ごした夜。茶々丸さんがエヴァに内緒で、おむすびを作ってくれた。

氷漬けで食べれなかったが、茶々丸さんが食べさせてくれた。

マジ泣きした。

生きてきた中で、一番美味しいご飯だった。

第六話 おりっぺもひこちーも、皆へみんなに見られながらじゃ公へおおやは

気づいたら、昨日が七夕だったので書いてみた。

やっつけ感が否めない。

だが、結局いつもやっつけ感全開（その場のノリともいう）で書いているので、何の問題もなかった。

第七話 最近、タカミチの様子が変なんだが…何かあったのか？（前書き）

注意

今回、主人公と登場人物の一人が恋仲に近い状態になります。

あらずじ同様、嫌悪感を感じてしまう方はご遠慮していただいた方が
いいかと思えます。

ちなみに生徒ではありません。

第七話 最近、タカミチの様子が変なんだが…何かあったのか？

「だから言ってんじゃねえか！ メイドにはガーターベルトが必要なんだよっ！！」

「待たんか！ メイドだからと言ってガーターベルトが全てではなからう！」

俺は今、学園長室でこの学園の妖怪…じゃなかった。

学園長こと爺さんの部屋でメイドについて熱く語り合っていた。

お互いに譲れない部分。

決して負けられないこだわり。

話し合いはその日、昼夜を問わず行われたのだった……。

ネギま！ 〽外側に立つモノ〽

第七話 最近、タカミチの様子が変なんだが…何かあったのか？

ふう、今日も有意義に時間を使ってしまった。

目に眩しい夕日を見たせいだろうか、何故か哀愁を感じてしまった。

すると、考え事をしていたせいだろうか？

一人の女性とぶつかってしまった。

「うおッ!？」

「きゃッ!？」

途端、紙の束がバラバラと宙に舞ってしまふ。

彼女が持っていたのだろう。俺は慌てて拾い集める手伝いをしようとする。

「す、すいません。大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫です。こちらこそ、ゴメンなさい」

しかし、ぶつかった女性は尻もちを着いたままだ。俺は、彼女を先に助け起こそうと手を伸ばした。

「「あ……」」

そして、お互いの混乱が解け、顔を確認する余裕が生まれた時だった。

俺は上から。

彼女は下から。

お互いが見つめあう形になりながら、俺達は二人とも相手の顔に釘付けになったのだった。

固まる事、数秒。

最初に動き出したのは同時だった。

「「あの!」」

奇しくも同じタイミング。

まるで図ったかのようなタイミングに、思わずまた止まりそうになる思考を無理矢理に動かす。

「た、立てますか？」

「あ…は、ハイ！ 大丈夫です……」

俺は彼女を助け起こし、彼女の落としたプリントの束と一緒に拾い集めた。

「すみません。わざわざ拾っていただいて…」

「いえいえ、元はと言えば俺がぶつかったせいですし…」

お互いに恐縮する中、俺はずっと聞きたくて聞きたくて仕方なかった事を聞くことにした。

「その…お名前を聞いてもいいでしょうか？」

俺の馬鹿！ 最初は自分が名乗ってから聞くべきだろ！

と脳内で一人、自らの迂闊さを呪っていると、

「みなもと…」源 しずな”と言います」

「あ…自分は、桂介。…穂守 桂介です」

これが、俺としずなさんとの出会いだったんだ。

「そ、そんな事があつたんだ…」

「そうなんだよ、タカミチ。俺もう、一杯一杯でさあ…」

所^{ところ}変わって、日も暮れた夜。

ここは麻帆良から少し行った所にある居酒屋だ。

何でも、今日給料が入ったという事で、俺の数少ない友人であるタカミチが、奢^{おご}りにつれてきてくれたのだ。

最初は静かに料理と酒に舌鼓を打っていたのだが、途中から酔いがまわってきた俺は、彼が女生徒の一人に好かれているという噂を聞き、ソレを追求し始めた。

「もしかして、中等部の生徒だったりしてな？」と聞くと、「ハハハ…。僕みたいなオジサンを好いてくれる娘なんていないよ」と笑って返してきた。

大人の対応で切り返してくるタカミチだったが、しばらくすると彼にも酔いがまわってきたのだろう。

逆に、俺に質問をしてきた。

「そういう、桂介くんはどうなんだい？ 誰かいい人、出来たんじゃないかい？」

「ば、ばっか野郎！ 俺は別に…」

「ふふふ、少し動揺したね。白状したらどうだい？」

「いや、まあ…気になる人はいるけど…」

「へえ。どんな人なんだい？ 良かったら聞かせてくれないかな？」

「源 しずなさん…っていうんだけど…」

「へ…？」

そして俺はタカミチに彼女との事を話しだした。

彼女と出会った事。

彼女へお詫びに食事に誘ったらOKしてくれた事。

頻繁に話す事になった事。

彼女から、交換日記をしてくれないでしょうか？ と聞かれて、恥ずかしくも嬉しかった事。

彼女からの日記を通して、ガキっぽくも甘酸っぱい事を色々と話そうになった事。

デートもするようになって、戯れに、下着選びにまで付き合わされて恥ずかしかった事。

そして、今度二人っきりで旅行に行きましようという約束した事。

酔っているおかげか、滑りの良くなった俺の舌は、恥ずかしくも喜びで自慢しなかった想いやら何やらをペラペラと喋ってしまった。

おかげで話すにつれ、タカミチがゲンナリとしていったのだが、彼は最後まで、俺の話を冷やかすでもなく聞いてくれた。

持つべき者は友達とは良く言ったモノだ。

「そ、そうかい…それは…おめでとう……」

「ああ、ありがとな。…へへっ。何か、照れくさいな」

実際、顔が赤くなっているのは、酒のせいだけではないだろう。

逆にタカミチの顔が真っ青になっている気がするが…気持ち悪いのか？

「タカミチ、顔色悪いぞ。大丈夫か？」

「は、ははは…。だいじょうぶ、だいじょうぶ……。僕には仕事が…生徒が…困っている人を助ける…おしごとがあるから………」

結局、顔色が悪いのにも関わらず、タカミチは更に酒を浴びるように飲み続けるモノだから、少し心配になった。

酔いつぶれるまで飲み続けるタカミチを見たのは始めてだったので、驚いたが、彼も教員とはいえ人間だ。

日頃の溜まった鬱憤うつぶんというモノがあるのだろう。

そして俺は潰れたタカミチに付き合っていたおかげで、朝帰りになっってしまった。

帰宅後、エヴァに朝帰りについて怒られたが、タカミチが潰れた事

を話すと、「珍しい事もあるものだな」と許してくれた。

その後、数日間タカミチの姿を見なかった。

爺さんの話では、「探さないでください」と書かれた置手紙が部屋で見つかったらしい。

教員つうのは、色々大変なんだろうなあ。と思った。

第七話 最近、タカミチの様子が変なんだが…何かあったのか？（後書き）

しずな先生…イイですよ。

何がイって、胸とか、バストとか、メガネとか、おっ。いとか、乳とか、眼鏡とか…。

…スイマセン。少し暴走してしまいました。

でも、大好きなんです。

ネギま！の第1巻の最後に載っている設定資料で、子供がいる、という設定を見てマジ泣きしそうになったというのは自分だけではないはず…。

本当に…本当に…ボツになってよかった…（泣）。

第八話 俺もガキの頃は、将来は立派なモンスターハンターになりたかったんだ

茶々丸さんがお泊まり会とやらで学園の工学部の方へ出かけているので、今日は俺とエヴァの二人きりである。

エヴァと二人きりというのも久しぶりなので、兄弟水入らずで仲良く過ごそうとしていたのですが……。

あいにくと、数十分と持たなかったりする。

「何を言ってるんだ！！　ちくわがなければ食事が成り立たんだろうが！」

「いや、ちくわはそこまで必要なモノではないぞ」

「エヴァ、見損なつたぞ！　そんな事を言う娘に育てた覚えはありません！」

「いや、私もただの居候に育てられた覚えはない」

「つく……。エヴァがこんなにも聞き分けのない娘に育つとは……。昔はあんなにもお兄ちゃんっ娘だったというのに……。まさか！？　最近、
“お兄ちゃん”と呼んでくれなくなったのも……」

「お前の中で私はどういう立ち位置になっているのかとても気になるな……」

妹ですが、なにか？

ネギま！　　く外側に立つモノく

第八話　俺もガキの頃は、将来は立派なモンスターハンターになり
たかったんだぜ？

という訳で、“ちくわ”を買いにおつかいです。

さて、ちくわは何処で捕獲…じゃなかった。

何処で売っているのか…まずはそれが問題だ。

俺はちくわが好きだが、ちくわの全てを知っている訳ではない。

得^えてして、全てを知ってしまうのは、つまらないからな……。

ま、そういうわけで、分からないのなら聞けばいいんじゃない？

そう考えた俺は目の前をトコトコと歩いていく一人の少女に目をつけた。

「待てい！！ その少女！」

「な、なんですか！？」

デコの広い少女を引き留める為に少し大声を出してしまった。

少々驚かせてしまった感が否^{いな}めないなので、紳士的に謝る事にする。

頭を限界まで前に下げる。

「……すまなかった」

「見知らぬ人のはずなのに深々と謝られたです！？ いったい何があったのですか！？」

む、謝罪したはずなのに更に驚かれるとは……。

謝り方が大げさだったのだろうか？

「ワリイワリイ。ちょい驚かせちゃったっぜ。嬢ちゃんすまなかったNa」

「いきなり軽くなりましたね？ チャラ男が女性にモテると思ったら大間違いですよ？」

俺もチャラ男は嫌いだ。見かけると前歯を剥ぎ取りしたくなるからな。

「して、少女は見たところ学生服だが…中学生だったか？」

「へ？ まあ、そうなりますが……」

「ふむ、まあ学園の中だもんな。………大丈夫。まだ成長期だからな」

「失礼ですよ！？ 初対面の人に言われる筋合いはないです！！」

「そっちこそ失礼な！ 俺の事を忘れてしまったのか？」

だとしたらショックだ。俺みたいなナイスガイ（笑）を忘れるとは…。

「あ…す、スミマセンです。えっと…何処かでお会いしたですか？失礼ですが、私には見覚えがなくて…」

ふむ…まあ、会ったと言っても、図書館島で“トラップ the・バナナの皮”に引っかかっている彼女を見かけて、笑っていただけなんだが…。

「いや、素直に謝れる事はとても良い事だ。キミは忘れてしまっているのだろうが、私はキミに一度会っているのだよ」

「そうなのですか…。私はこの学園に入学してから、あまり外に出る事がなかったので、男の方の知り合いは、ほとんどいないと自負していました。改めて謝罪するです」

「ん。なら、この件はここまでにしよう。そして、改めて自己紹介といこう。俺は桂介。穂守桂介だ。“桂ちゃん”と幼なじみにかかる感じで、気軽に呼んでくれ」

「そ、それは恥ずかしいです…。ですが、忘れていたという引け目もあるので、二人きりの時なら呼ぶことも、やぶさかではないです」

「うむ。ぜひそうしてくれ」

ふむ…気難しそうな顔してなかなか律儀な娘のようだ。

とてもからかい甲斐があるというモノ。

「それでは、私も自己紹介の方を…“綾瀬^{あやせ} 夕映^{ゆえ}”ということです」

「分かった。俺もキミの事を“ゆえちゃん”と仲好さげな感じで呼ぼう」

「勘弁してほしいです……」

こうして俺は、ゆえちゃんとお知り合いになった。

ゆえちゃんと別れてから、俺は家へと帰る事にした。

別れ際に、お詫びと言って彼女が持っていた『珠玉のハンター汁（ア。ルー印の競走薬・ソーダ味）』を貰った。

スタミナが湧きあがり、今なら延々と走り続けられる気がした。

さて、今日は知り合いが一人出来たので、これを交換日記の題材にするとしてよう。

「ただいま」

「ん、帰ったか」

家に帰ると、エヴァが既に食卓についていたので、驚いた。

「なんだ、待っていてくれたのか？」

「ん…まあ、せっかくだしな」

心なしかエヴァの頬が赤いような気がした。

「もしかして照れてんのか？」

「そんな訳ないだろう！ …ホラ、いいから食べるぞ」

まったく…可愛いヤツだ。

もう少し素直だったらいいんだが…いや、エヴァはこのままが一番だな。

「愛い奴め」

「あ、頭をグリグリするな!!」

ついでに三つ編みにしてみました。

「そういえば、結局ちくわは買ってこなかったのか？」

「…あ」

「『…』という訳で、今日は新しい友人が出来ました』、か。あらあら…桂介さんったら、人気者ね」

彼と一緒に始めた交換日記。

学生の頃を思い出し、こちらから言い出してしまったが、彼は古臭い女と思っていらないだろうか？

それが、心配だった。

彼自身は、「へえ。面白そうですね。ぜひやってみましょう」と言ってくれたが、気になるのだから仕方ない。

彼の年齢は聞いていないが、見た目は20代前半といった所だろう。私よりも下だというのは間違いないだろうから、彼よりも年が上という事実を今さらどうこうは言わない。

私は、“今の私”という武器で、彼に好かれるようにするしかないのだ。

交換日記を通じて、彼の好みや理想をそれとなく聞き出そうと思ったのだが…彼の書き方は少し子供っぽいので、見てると自然に頼が緩む。

こういった所が更に魅力的に見えるのだから、私もそうとう参っているのだろう。

でも、そんな今の自分も悪くない。

そう思った。

「……でも、新しいお友達って女性の方なのよね」

それが、問題だ。

もし、自分よりも若くて可愛い娘だとしたら……。

「……がんばろ」

第八話 俺もガキの頃は、将来は立派なモンスターハンターになりたかったんだ

今週は少し遅れて投稿。

まあ、テキストを入れていたUSBが迷子になって、今日見つけたってだけなんだけどね。

第九話 ヒーローだって中には駄目な奴もいるさね。だが…そんな奴も嫌い。

俺は今日、困っている少女を一人助けた。

今の俺はちょっとしたヒーローだった。

ヒーローなんだから、良い事をしないとイケないよな。

「ありがとなー。ほんま、助かったわ」

「フツ…いいって事よ」

今の俺、超カッコよくね？

ネギま！ 〽外側に立つモノ〽

第九話 ヒーローだって中には駄目な奴もいるさね。だが…そんな奴も嫌いじゃない

事の始まりはこうだ。

← 俺、外をブラブラと散歩している。

← 向かい側から、買い物帰りの少女と遭遇。

← 少女、買い物袋（エコ仕様）を落とす。

← それを犬が咥えて、持ち去る。

← 「アカン。その子、捕まえて〜」少女の声に、追いかける俺。

← 逃げられそうになった所を、さく…じゃなかった。刹那ちゃんが、
たまたま（本人談）見かけたので、捕まえてくれた。

← 刹那ちゃんに感謝し、持ち主である黒髪の少女に買い物袋（エコ仕様）を無事、返した。

← 俺、感謝され有頂天。 ↑ 今ここである。

というわけで、感謝されたのだが、実質は刹那ちゃんが頑張っていた。

なんか、ストーカーのように黒髪の少女（買い物袋（エコ仕様）を持っていた少女）をつけており、事件発覚後、逃げた犬を必死の形相で追いかけていたのがチラチラと見えていたのだ。

照れているのか、「た、たま…たまです…ハア…ハア……」と、必死で犬を追いかけてまわっていたせいか、息を切らしながら誤魔化していたので、頷いておいたが…。

まあ、何はともあれ、俺も頑張って追いかけたんだから、感謝されてもいいよね？

開始五分で走るのはやめたが、捕まっただから無問題である。

モウマンタイ

「ありがとな。おかげでたすかったわあ」

「いえいえ、お気になさらないで、でござる」

「いじわるっ」

「気のせいでヤンス」

彼女は独特の間延びしたような口調で喋っていた。

釣られて、俺の口調も変になってしまった。

「そうでヤンスか」

「そうでげす」

「ほうなら、是非お礼させてほしいわ。よかつたら、ちょっとお茶でもどうかなく？」

「おお！？　これが世に聞く“逆ナン”とやらかい？」

「そうやえ。逆ナンや。どうかなく？」

むう…。伝説の“女性にされたいランキング”上位にある、“逆ナン”を俺が受けてしまうとは……。

やっべ、頬がにやけるが、我慢我慢。

今の俺はヒーロー（^{エセ}似非）なのだ。

ほいほい、ついていいたら、軽い男と思われるぜ。

それに、茶々丸さんに「知らない人について行ってはいけませんよ」と言われている俺だ。

簡単にはついて行かないだぜ？

「いや、お誘いは嬉しいんだが…」

「今なら、美味しいお茶とお菓子も出るで〜?」

「む…お菓子は嬉しい、じゃなくて。いや、悪いんだが…」

「何なら、ジュースも出るで〜?」

「いや、俺はコーヒー（ミルク増し増し派）だ」

「お、それなら大丈夫や。おじいちゃん相手にたまに淹れてるから、良い豆もあるで?」

「むむむ…」

「それに、ウチの家の牛乳はビンやで〜」

「よし行こう!」

そして俺は、少女に付いて行く事になった。

好意を無下にしたら、イカンよな。うん。

「はい、どうぞ」

「おお！ これは美味そうだ」

黒髪の少女は、俺を自宅に案内してくれると、さっそくお礼のお菓子と、コーヒー（ミルク増し増し）を淹れてくれた。

砂糖は少なめ、ミルク増し増しが美味いんだが、彼女が淹れてくれたコーヒーは正にそれだった。

「しかし、デカイ家だな。一人で住んでんのか？」

「うん？ ここは家ちゃうで。ここは学生寮って言って、学園の生徒が寝泊まりしてる建物や」

「なるほど……いえ、知ってましたよ？」

こんなデカイ家がある訳ねえもんな。

うん、知ってた。

「クッキーうまうま」

「誤魔化された気がしないでもないけど、美味しそうに食べてくれると嬉しいわあ」

俺はクッキーには目がない。

家にあると、エヴァの取り寄せたフランスの高級品だろうが何だろ
うが、関係なく食っちゃまうからな。

まあ、後で結局ケンカになるんだがな。

「いいな。少女はかなり良いお嫁さんになるぞ」

「ややわあゝ。そんなこと言われると、照れるやん」

「本当だ。胸がもう少し大きかったら、求婚してる」

「もう、胸がどうなんて女の子に言ったら失礼やで」

私怒ってます。というポーズだが、ほわほわした空気のせいか逆に
癒される。

うん、かなりイイ少女だ。

刹那が、天井裏からストーキングしてるのも頷けるわ。

「さて、ごっそうさんです」

「おそまつさま」

本日は十分に癒されたので、そろそろお暇する。

おみやげに、余ったクッキーを少し貰った。

「よかったら、また来てな」

「おう。今度は手土産持ってくるわ」

こうして俺の茶飲み友達が、学園長の爺さんに続いてもう一人出来たのだった。

ん？　そういえば、名前何て言うのか聞くの忘れてたぜ。

「……………って事があってな」

「ほう…それはまた、よかったのう」

可愛い娘が知り合いになったと言ったら、同じ茶飲み友達の爺さん

に自慢出来ると思った俺は、学園町の爺さんに早速、自慢しにいった。

爺さんも、最初は羨ましがっていたが、何か途中から微笑ましい感じで聞き入っていた。

「どうだ、爺さん。羨ましかろう」

「ほほ、そうじゃのう。…ところで、そんなにその娘は可愛かったかのう？」

「おうよ。黒髪で、なかなか将来が楽しみな美人ちゃんだったぜ？」

「のほほ、そうかそうか」

何か嬉しそうだな？

もうちつと悔しがってくれないと、俺としては自慢のしがいが無いぜ。

その後も、その娘を思いつく限りに褒めちぎって、どれだけ可愛いかを爺さんに自慢したのだが、爺さんは最後まで嬉しそうに聞き入るだけだった。

あげくの果てに、気を良くした爺さんが飯をおごってくれたのだが…何か釈然としないぜ。

「今日のしずなさん」

□ 学園町に主人公が可愛い娘^こ自慢をしていた頃。学園長室前の廊下にて

『…って訳で可愛くってさあ』

『ほほ、そかそか』

学園長に書類を持ってきた私が、扉に手をかけようとした時、中から聞き覚えのある人の声が聞こえた。

それが気になった私は、行儀の悪い行為とは思ったが、つい聞き耳を立ててしまった。

すると、その声は案の定、最愛の人の声だった。

余計に気になってしまった私は、そのまま聞き耳を立て続けてしまった。

話を聞く限りでは、桂介さんが、知り合った女の子の事を学園長に

話しているようだ。

特徴や学園長の態度から、どこかで聞いた覚えがあると思ったら、その子は学園長のお孫さんだと得心がいった。

しかし、学園長のお孫さん。

確か、黒髪で可愛い娘だった気がする…。

でも、だからといって好きな人が、他の女の子の事を話しているのは少し気分の悪いモノだ。

「…私だって、生徒から人気あるんだもん」

前に一度、学園祭で起きたミスコンテストで一位を取った事だってあるのだ。

プロポーションだってかなり自身がある。

これを維持するのも一苦労なのだ。

努力の賜物だ。たまもの

その後も学園長室での会話は続く。

『でさ、その娘料理も上手くてな…』

「私だつて、必死で肉じゃが覚えたんだから…肉じゃがなら、負けてないはず……」

『やっぱり黒髪っていいよな。あの清楚さが保護欲をそそるっていうか…』

「私も、黒に染めようかな…ストレートとか……」

『…で、なかなか将来が楽しみな美人ちゃんだっただぜ？』

「若さなんて…若さなんて……」

うう…。

大丈夫。私はまだ、戦える。

戦えるんだもん…。

その後。

図書館で“若い娘に負けない大人の恋愛術”という本を借りる、
—
人の女性の姿が目撃されたいらしい。

第九話

ヒーローだって中には駄目な奴もいるさね。だが…そんな奴も嫌い

何か、しずな先生が段々と幼くなっていつてるような…。

まあ、大人の女性といっても素の姿が大人とは限りませんしね。

しかし、木乃香譲を出してみたのですが、彼女の京都弁がさっぱり分からねえ…。

ココの文章、オカシインじゃない？　と思われた方はすみませんが教えてくれると助かります。

第十話

人って生き物は前を見て生きるもんだ。過去に何かあったのか、忘れ

「あ、こんにちは。お久しぶりやな」

「ん？ ああ、いつぞやの少女。お久しぶり」

最近知り合った黒髪の少女と、偶然図書館で出会った。

ネギま！　　く外側に立つモノ

第十話　人って生き物は前を見て生きるもんだ。過去に何かあったのか、忘れてたって仕方ねえよ

本日の俺は、借りていた本を図書館島に返しに来ていた。

この学園には、“図書館島”という、余所様と比べるのも馬鹿らし

いほどの巨大な図書館があり、様々な本が鎮座されているので、俺も始めは興味本位で来ていたんだが、気がつけば暇つぶしによく訪れるようになっていたのである。

実際、娯楽関係の本も大量にあるので、暇つぶしにはもってこいである。

そこで、最近知り合った黒髪の少女と出会った。

独特のイントネーションで喋る事に定評のある少女だ。

「たしか…セリーヌ？」

「いややわあ。どう見ても日本人やん」

ほわほわした雰囲気で、強烈なツツコミの手が飛んできた。

いいな。これがエヴァに教えてもらった関西人の魂というヤツか…。

しかし、手が出るより先にトンカチを持ったのは何故だ？

慌てて、手でツツコミをし直してくれたが、そんなモノで殴ったら、軽く重傷じゃね？

「このかそういや自己紹介してなかったな。ウチは、木乃香。
木乃香”って言うんやえ」
“このえ近衛

「うむ、俺は桂介だ。気軽に“お兄ちゃん”と呼んでくれて構わんぜい」

「了解や。お兄いちゃん」

この娘、侮れねえ…。

だが、お兄いちゃん……。

…悪くないな。

そういえば、近衛つてどこかで聞いたような気がするな…。

まあ、思い出せないって事はそれほど重要じゃないんだろ。

「うむ。それで、木乃香も本を借りに来たのか？」

「まあ、図書館やしな。本を借りに来るのが筋だと思うんよ」

「まあ、普通はそうなるよな。…しかし、木乃香は何でそんな重装備なんだ？」

彼女の着ている服装は今から秘境に向かう探検隊のような格好だ。

背中に背負っているのは災害用の大型のナップサックだし、そこかしこに、ピッケルやシャベルなど、とても図書館では違和感を感じ

ざるを得ない装備品で固まっていた。

「? どうかおかしいかなあ?」

改めて自分の格好を見る木乃香だったが、俺の質問に首をかしげるだけだった。

「いや…なんというか…本を読む格好でないのは確かだと思っんだが?」

「ん〜。まあ、確かに日常的に使う服ではないかなあ……」

図書館というのは日常的に使うもんじゃね?

まあ、地方によっては年に数回、コスプレをしながら本を売り買いする、と

いう変わった場所もあるらしいしな…。

そういうモノなのかもしれん。

深くは聞かない。

「あ、このかさん。こんな所にいましたか」

俺が木乃香と話していると、一人の少女が会話に入ってきた。

その少女も何処かで見た顔だった。

「あ、夕映。ゴメンなあ、ちょっとお話してたわ」

「いえ、かまいません。少し戻るのが遅かったので様子を見に来ただけですから」

どうやら、この少女も木乃香と知り合いのようだ。

結果的に俺が引き留めてしまったのなら、謝らねばなるまい。

両手をビシッ！と横につけ、頭ではなく、腰から上全体を前に折り曲げる。

茶々丸さんに教えてもらった、“丁寧な謝罪・初級編”で覚えた特訓の成果を見せるべきである。

「申し訳ございませんでした」

「いえ、貴方にもそこまで深々と謝っていただくような事は…なんか、前にも同じような事をした気がするです」

「奇遇だな。俺もそんな気がした」

不思議な事もあるもんだ。

「誰かと思ったら、貴方でしたか…お久しぶりです」

「おう、久しぶりだな」(やっべ…誰だっけ？ このデコの広さは何処かで見た気がするんだが…？)

「あや？ 夕映も、お兄いちゃんとお知り合いなん？」

「お兄ちゃん？ …失礼ですが、このかさんは一人っ子ですよね？ …もしかして、また…」

「ん？ どうかしたん？」

「いえ、なんでもないです…」

イカン、思い出せん。

何か、こう…口の中の天井くらいまではきてるんだが、そこから先が出てこない。

彼女たちも話に夢中みたいだし、ボロが出る前に退散した方がいい気がするな。

「それじゃ、俺は用があるから行くよ。またね、二人とも」

うむ、実に自然だ。

これなら、名前を呼んでボロが出るなんて事もないからな。

自分のさり気なさっぷりが憎いぜ。

「うん。またな〜お兄い〜」

“お兄いちゃん”から“お兄い”にクラスアップした。

うん。

親近感わいた。

「あ、はい。それでは。また…」

夕映と呼ばれていた娘も会釈して、二人とは別れた。

しかし、去っていく中、木乃香を先に行かせると、夕映と呼ばれていた娘が戻ってきた。

「あの…その…」

「ど、どうした？　なんか忘れ物か？」

何かツッコまれるんじゃないかと、内心冷や冷やしたが、それは杞憂に終わった。

「そ……」

「そ……？」

「そ、…それじゃあね、桂介ちゃん、またね」

そう言っつて、今度こそ夕映と呼ばれていた娘とも別れた。

顔を真っ赤にして走っていく姿はなかなか可愛いモノがあっただが…。

「……アレはねえわ」

きつと色々あるんだろう。

精一杯の、無理してます感が痛々しかったが、忘れてあげる事にした。

俺も大人だしね。

んで、その後――

俺が図書館の受付で本を読んでいた怪しげなローブ着たお兄さん（イケメソ）に本を返すと、何か変な本を薦められた。

“YES口リくタNOタッチくvol・1くやわからかほつぺと上目遣いく”

いや、俺は幼女には興味ないんで、そういった本はいいですわ。

…人の趣味思考はそれぞれだから否定はしないけどな。

更に、その後――

「あの……」

「はいなんでしょうか？」

「い、“意中の人を墮とす、愛のハウ・トゥー本”って…あります
でしょうか？」

「フフ…はい。ありますよ」

「あ、ありがとうございます」

ローブ着た怪しい青年に、まっピンク色の本を借りるしずなさんの
姿があったとか…。

更に更に、その後――

「……あ！……！ あのデコッ娘^こ。前に会った事あるわ！」

「ブッ！？ い、いきなり何だ？」

そんな事を叫ぶ桂介と、ソレに驚いてワインを吹くエヴァの姿があ
ったとさ。

第十話

人って生き物は前を見て生きるもんだ。過去に何かあったのか、忘れ

自分のモットーは、『一日一回、一し^{いち}ずなさん!』です。

第十一話

夢ってのは儚いもんだ…。だから夢くらい好きな事しててもいい。

「おはようございますっ！ 桂くん」

ん…。朝からハイテンションですね…。

「そりゃ、そうですね。朝から桂くんの寝顔が見れるなんて、お姉さん興奮して、つつい時間を忘れてしまいました」

そうですね…。どれくらい時間を忘れてたんですか？

「えっと…。起きたのが…。だから……。3時間くらいですね」

…。しず姉。自重してください。

…。ん？

…。しず姉？

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第十一話　夢つてのは儚いもんだ…。だから夢くらい好きな事しててもいいじゃねえか

目が覚めると、今日の俺は子供だった。

正確に言うと、中等部くらいの年齢だ。

「あれ？　なんで、俺若返ってんの？」

「おかしな桂くんですね。桂くんは学生なんだから、若くて当然です」

あれ？　俺学生だっけ？

「ホラホラ、そんな事言ってる暇はないですよ。早く準備しないと、彼女が来てしまいますよ？」

「彼女？」

<ピンポン>

鸚鵡返しに聞こうとして、チャイムの音にかき消される。

しず姉こと、しずなさんが返事をして対応に行くが、何事か親しげに会話をしている様子から知り合いのようだ。

「ゴメンね。…ちゃん。いつもいつも来てもらって」

「気にしないでほしいです。私が好きでやってる事ですから」

そのまま会話をしながら、二人ともこちらへと向かってくる。

部屋の前まで来て、ノックをして入ってきたのは、小さな少女だった。

「起きてますですか？ いい加減にしないと、また先生に怒られるですよ？」

「あれ？ デコっ娘」

「誰がデコっ娘ですか！！ それがわざわざ起こしに来てくれた幼

なじみに掛ける言葉ですか!？」

へ…？

幼なじみですと？

「ホラ、早く着替えて行きますよ。今度遅刻したら、“給食をグラウンドの中央で一人寂しく食べる罰”があるんですから」

「なにそれ、すごくイヤなんですけど…」

そんな、皆で教室で楽しく食べる給食を、グラウンドの目立つ場所で一人寂しく食べ、だと？

…イジメかつこわるい。

「それがイヤなら、さっさとするです!」

「…はい」

訳の分からないまま、俺は急かされる幼なじみ?と共に学園へと向かった。

学校に着くと何処かで見た事がある人たちがチラホラと見かけられた。

「おはよ〜」

「おはようでござる」

「ケケ…オハヨウ、ダゼ」

何か、一人ナイフ持ってる危ないヤツとかいるんだけど？

見なかった事にして、教室へと向かった。

ちなみに、俺と夕映は同じクラス。E組だそうだ。

うん、幼なじみっばい。

「おはようです」

「はよ〜っす」

「おお。綾瀬さん、桂介くん。おはよう」

教室に挨拶しながら入ると、中には同じ制服を着たクラスメイトらしい奴がちらほらいた。

タカミチに、グラサンしたダンディーな男に、頼りなさげな優男に…。

「つか、何で爺さんも生徒なんだよ!？」

学園長の爺さんが学生服つてのは、いくらなんでも無理があんだろ。

「ん？ 桂くんは何かあったのかのう？」

「知りませんです。今朝からずっとこんな調子なんです」

皆が奇異の視線でこちらを見てくるが、納得がいかない。

「いや、だって…」

「ほっほ。いいからさっさと席に着いたほうがいいぞい」

「あ、そうです。先生が来てしまいます」

そう言うと、夕映がさっさと自分の席へと向かう。

疑問やら、やるせなさに押しつぶされそうな心で、俺も席に着く。

ちなみに席は夕映の隣ではなく、爺さんの隣だった。

… がつかりだよ。

「あ、先生が来たよー！」

誰かの声が響いた途端、教室が静かになった。

もう、誰が来ても驚かない気がする。

「ホラ、さっさと席に着け！ HRを始めるぞ、ガキ共！」

… エヴァだった。

「そりゃ、ねえわ！（笑）」とエヴァに指差して爆笑してやったら、氷漬けにされた。

エヴァの身長でスーツ着てたから、あまりの似合わなさに笑っただけなのに…理不尽である。

「あゝ、以上で連絡事項は終わる。それと、数週間後には体育祭がある。しっかりとメンバーを決めておけよ！ N組のヤツらに負けたら、貴様ら全員、氷漬けにしてやるからな！」

最後にエヴァ先生がそう言うと、テクテクと去っていった。

あと、教壇から降りる時にコケた。

「ううゝゝ…（泣）」

無茶苦茶痛そうである。

ついでに、鼻血も出てた。

「いいか、絶対勝てよ！！ 勝たないと許さないからな！！」

そんなに体育祭に勝ちたい理由でもあるのか？

「確か、N組はネギ先生のクラスじゃからのう…。大方、勝って盛大に威張^{いば}りたいのじゃろう……」

なるほどね。

先生になっても、ガキっぽいヤツだな……。

「なんか、思ったより疲れるんだな…学生って……」

授業も終わり、学園から帰って来たが、思ったよりも疲れた。

学生なんて、遊んで、昼寝して、青春してるだけかと思ってたが…。

認識を改めねえとな……。

ちなみに夕映は図書館探検部とかいう、よく分からない部活へと向かったのだ、現在は俺一人ぼっちである。

家を出てくる時には、急いでたので分からなかったが、どうやら俺

の家はマンションの一室らしい。

しかし、表札に“穂守 しずな・桂介・木乃香”って……。

妹も…いるんだな……。

「あ、桂介さん。おかえりなさい」

名前を呼ばれて振り返ると、そこにはエプロン姿の茶々丸さんがいた。

「茶々丸さん…？」

「はい。桂介さん。こんにちは」

茶々丸さんの様子はいつも通りのように見えるが、茶々丸さんは一体どうなっているのだろうか？

「ちゃ、茶々丸さんは…その…えっと……」

「？ どうかしましたか？」

「あ…いや……」

「フフフ。変な桂介さんですね」

む。笑われてしまった。

しかし、茶々丸さん…。いつもより何か色っぽいような……？

「よかったら、家に寄って行きませんか？」

「へ？」

「少し暇してたものですから、よかったら話相手になってもらえませんか？」

「あ、はい。大丈夫だけど…」

「はい。それでは、どうぞ」

茶々丸さんに誘われるままに家に上がらせてもらう。

彼女らしいシンプルながら機能美のある部屋だった。

さりげないインテリアなどが、とてもカッコいい。

「着替えてくるので、少しだけ待っててくださいね」

「着替え…ですと!？」

「はい。お買い物に行っていたら汗をかいてしまったので…」

そういうと、シャツを指でつまみ、パタパタと扇^{あお}いだ。

豊満な胸元がチラチラと目に入ってしまった、とても眼福である。

しかし、茶々丸さんはこんなに胸があつたか？と疑問に思ったが、その魅力的なメロンの前では些細な事である。

「フフ…気になりますか？」

「あ、や、えつと…その……」

茶々丸さんが近づいて来て、下から伺^{うかが}うように顔を覗き込んでくる。

女性特有の甘く、惹かれてやまない香りで、頭がいつぱいになる。

「ちゃ、茶々丸さん…」

「桂介さんなら…いいんですよ？」

さらに近い。

耳元で囁くような甘い声に、

俺の理性は呆気なく、

飛び去った。

「茶々丸さん!!」

「あんっ
っ」

茶々丸さんをリビングで押し倒した俺の視界は、真^まっピンクで塗り
つぶされていた。

「おい…おい！ いい加減起きろ！」

「んあ？」

「まったく…何で私はこんな事をしなければいけないのだ」

愚痴の混じった不機嫌そうな声。

それはいつも聞いていた妹の声だった。

「やっと起きたか。ホラ、朝食だ。茶々丸が待っているぞ」

「へ？ 茶々丸さん…？ あれ？ なんでエヴァ先生が？」

「先生？ 何を言ってるんだ、貴様は…。まだ寝ぼけているのか？
まったく…仕方のないヤツだな」

「寝ぼけ…？ まさか…いままでの…夢？」

夢という言葉と、先ほどの甘い光景が脳裏に流れる。

それを俺は認めたくなかった。

「まったく…私がないとなにも出来ないのだからな。ホラ、さっさと起きて着替えろ」

一転して不機嫌から機嫌が良さそうになったエヴァは、俺を起こすとダンスから俺の服やズボンを出してきた。

「夢…………だと？」

「ん？ どうした。早くしないと茶々丸のご飯が冷めるぞ？」

茶々丸さんのご飯は食べたいが、俺はそれよりも茶々丸さんが食べたかったのだ。

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおッ！！！！（泣）」

「うおおお！？ ど、どうした？」

「せめて、30分。いや、あと10分あったら一回くらい出来たというのにいいいい！！ エヴァ！！ 今日の今日こそオマエを許さん！！ そこに直れいッ！！」

（怨）」

「は？ 何を言って……待て、待て、待て。何故、虚空から武器を取り出す？ しかも何故、泣いているんだ！？」

「うるさい、うるしい！！ すごいイイ匂いで、すごい柔らかそうで、すごい大きかったんだぞ……！！！！（哀）」

「バカッ！！ 泣きながら武器を振るうな！ 家が壊れる！？ しかも意味が分からん！」

「うああああああああんっ！ 初めてだったのに~~~~~
マシなき
！……！（真剣泣）」

こうして、彼の気が治まるまで暴走は続いた。

結局、家は殆ど跡形も残らず、後に残ったのは、何があったのか理解出来ずに混乱する少女と、悲しみに暮れる二人の兄妹だけだった。

第十一話 夢ってのは儚いもんだ…。だから夢くらい好きな事しててもいい。

はい、夢オチです。

ちなみに、この穂守家では桂介くんを取り合って、しずなさんと木乃香ちゃんが誘惑してきたり、桂介くんの写真を見て、二人でハアハアしていたりします。

桂介くんの運が良ければ（作者の気分次第で）、続きが見られるかもしれません。

第十二話 子供の頃とはいえ、大切なモノを失う…あんな理不尽な目に合うのは

我が家にはちよつとした守り神がいる。

その名は、チャチャゼロさまという。

何でも、崇めればチャチャゼロさまが、何処からともなく現れて、助けてくれるのだという。

正にヒーローみたいな神様だ。

とてもカッコいい。

そんな訳で、俺は今日もチャチャゼロさまに供物を捧げるのだった。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十二話 子供の頃とはいえ、大切なモノを失う…あんな理不尽な目に合うのは一度だけで充分だ

チャチャゼロさまは、いつもは地下で暮らしているらしい。

らしい、というのは、伺いに行く度にチャチャゼロさまの場所が変わっているのだ。

まるで生きて、自らの足で歩いているかのように…。

そんな訳がないのだが、チャチャゼロさまならありえるかも…と、思ってしまうから恐ろしい。

まあ、オチとしては、エヴァなり茶々丸さんなりが、動かしているのだろう。

神様とはいえ、人形が動くわけがないのだ。

うん。その筈だ。

ちなみに、チャチャゼロさまは人形だ。

見た目は、なかなか愛くるしい姿で、よく見ると茶々丸さんに似ている。

愛くるしい訳だ。

「お、いたいた」

ちなみに今日は、地下の奥の方にいた。

場所によっては、見つからなかったり、エヴァの部屋にいるから侮れないんだよな……。

そして、傍^{そば}には、エヴァの自作のボトルリゾートがある。

エヴァがテレポートの手品を使う度に使用しているモノだ。

本当に、リゾート地のような場所まで行ってしまうのだから、妹の手品の腕前は天才級である。

世界に名がたるマジシャンたちも真つ青の腕前だ。

…ちと兄馬鹿だったかな？

まあ、今はエヴァよりもチャチャゼロさまだ。

「チャチャゼロさま」。今日のお供え物です。お納めくだされ」

へへ。と、大仰な仕草で、チャチャゼロさまの前に、ちくわとワインを置く。

ちくわもワインも最高級の品だ。

きつと喜んでくれるだろう。

なんせ前に、深夜の寝ている時に、

『ケケケ…貢ギ物ハ、上等ナ酒ニシロ。ケケケ』

と言われたのだ。

夢にまで現れるのだから、チャチャゼロさまは侮れない。

「これで、よし。…アレ？　いまニヤリと笑ったような……？」

お供え物を置いた、と思つて見たら、チャチャゼロさまの口元が笑ったように見えた。

そんな…馬鹿な事、ある訳ない…よなあ？

「…チャチャゼロさま、いま笑った？」

「ケケ、ソナ訳ナイダロ（嘲笑）」

「だよな〜（笑）」

チャチャゼロさまがそう言うのだから、そんな訳はないのだ。

…なんか腑に落ちないが、地下から外に出る。

狐に化かされるとはこういう事なんだろうな……。

お供えを終えた俺は、お外をトコトコと散歩してみた。

歩いていると、前方で子供を見つけた。

子供、といえばネギくんだろう。

俺は声を掛けようとして…。

「でも、それじゃアスナさんを巻き込んだじゃうよ……」

「ダンナ…決断するのも勇気ですぜ？」

何か話声が聞こえたような気がしたが、周囲にはネギくんしかいないようだ。

何かしているのだろうか？

気になった俺は結局ネギくんに話しかけることにした。

「うっす。ネギくん」

「うわわっ！？　だ、誰？」

いくら何でも驚きすぎだろ、ネギくん。

「あ…桂介さんでしたか……」

「驚き過ぎだ、ネギくん。…アレ？　ネギくん一人か？」

「え…？　はい。そうですけど……」

「おかしいな…さっきネギくん以外の声が聞こえたんだが……」

「（ギクツ！？）そ、そそそんな訳ないですよ？」

「そそそんな訳ないですか」

「そうですよ！　ボクはずっと一人でした！！」

ふむ…確かに、ネギくん以外にはポツンと立っているオコジョくらいしかない。

何か、ネギくんが冷や汗だったり、脂汗だったりダラダラと出しているが、気のせいらしい。

「…ハッ！！　分かったぞ！」

「な、何がですか？」

「ネギくん、忘年会に向けての腹話術の練習でもしてたんだろ？」

「へ？」

確か、学園長の爺さんが「年末には忘年会という行事があつてのう。忘年会では必ず、一人一芸を必ずせねばならないのじゃよ」と神妙な顔で言っていた。

爺さんは、俺にそういつて色々な情報を教えてくれるのだ。

俺はこつちの世界の情報は少ないからな。

そしてここからが重要なのだが、忘年会の一芸に失敗すると“他人のドラ。エのセーブデータを無差別に消す”という罰ゲームをしなければいけないらしいんだ。

知らない他人とはいえ、そんな悪魔の所業を前情報もなしにやらされていたら、と思うとゾツとするぜ…。

爺さんには感謝しきれないな…。

「まだ年末には気が早いというのに…練習熱心だな。ネギくんは」

「は、はい！ そうなんですよ。ボク、かなりスゴイモノを見せるつもりですから！！」

「そいつはスゴいな。よかつたら少し見せてくれよ」

「だ、駄目ですよ!! まだ秘密なんです!」

「秘密なのか?」

「はい! 桂介さんには話しますが、実は…ボクが秘密の特訓をしているのをバラしてしまうと、オコジヨにされてしまうんですよ?」

「オコジヨ?」

「ハイ! オコジヨです。だから、桂介さんも喋ったらダメですよ! オコジヨになりますからね!」

ふむ…そこまで言うなら、黙っていてあげようじゃないか。

オコジヨになるのもイヤだしな。

「分かった。なら、コイツは男どうしの約束だな」

「ハイ! 約束ですね!」

そういつて俺はネギくんにも男どうしのお約束を交わした。

独特のポーズに若干恥ずかしがっていたが、男どうしならやらない

といけないからな。

「そ、それではボクはもう行きますね。吸血鬼対策…じゃなかった、テスト対策がありますから！」

「お、おう？　じゃあな」

挨拶する間もなく、ネギくんは走って行ってしまった。

しかし…テストはもう前に終わったって聞いたんだがな…。

このかちゃんやルームメイトの…あ…あ…アスタロト三世（確かそんな名前）とかが、楽しそうに話していたのを聞いたんだが…記憶違いだったかな？

まあ、友達がなくて、オコジョに話しかけていたのを誤魔化すよ
うな子供だ。

俺に、何時^{いつ}ツツコまれるか不安だったのだろう。

ネギくん、際限なく溜め込むタイプっぽいしな…。

誰にも話せずに、故郷の家族や友人の事を思い出していたのだろう。

……グス。

俺もこれから、少しは気にかけてやるかな。

「今日のしずなさん」

「……ん。我ながら美味しくできた、かな？」

しずなはそう言うと、夕飯に作った料理の数々を見た。

きんぴらや煮物。ジャガイモの味噌汁は元より、メインの肉じゃがなどは自信作の出来だった。

「桂介さん……日本食好きだって言ってたしね……」

愛しの人を思い浮かべて、彼女の頬が桜色に高揚する。

脳内で再生するのは美化された自分と桂介の、二人の生活風景だ。

『おいしい…。美味しいよ、しずな』

「よかった。喜んでくれて嬉しいわ」

『でも、まだまだ満足出来ないな…』

「え？」

『俺のメインディッシュは、キミだから、ね……』

「いや〜ん」

まあ、既に料理ではなく、二人の熱い情事へと話はぶっ飛んでいた
りするが…。

「えへへ…桂介さぁん……」

ちなみに二人は、キスもまだの関係だったりする。

ついでに彼女が食事始めるのは、肝心の料理が全て冷め切ってか
ら、だったりもする。

第十二話 子供の頃とはいえ、大切なモノを失う…あんな理不尽な目に合うのは

誰もが忘れていた（と思われる。作者は忘れていた）本編をそろそろ動かします。

次に動くのがいつかは、分かりませんが…。

ちなみに作者はド。クエよりもFF派です。

第十三話 外で裸って……兄として、妹の性癖が心配だ……

「来るがいい、ぼーやー!!」

「くうッ!？」

学園と町を繋ぐ大きな橋。

その橋の上で、今二人の魔法使いが己の想いを貫く為に闘っている。

片方は、亡き父の面影を知る目の前の人物に、自らの正義を見せるために……。

片方は、亡き男の面影というべき、その子供の血を求めて……。

二人は放つ。

雷の魔法を、氷の魔法を……。

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス
「雷の暴風!!!!」

ニウイス・テンベスタース・オブスクランス
「闇の吹雪!!!!」

それは夜空に咲く、雷と氷によって生み出された大輪の花火と呼ぶに相応しい輝きだった。

「…停電中なのに、花火なんて暢気なもんだな…」

そんな輝きに、一人暢気な声で感想を述べる一人の男がいた。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十三話　　外で裸って……兄として、妹の性癖が心配だ……

空から、妹が降って来た。

…いや、ギャグとかコントじゃなくて、マジなんだわ。

しかも、この妹。

……裸だし。

どうして、こんなコトになったのか、俺は少し前の自分を思い返して
みる事にした。

今夜は停電という事で、学園中が真っ暗だった。

そんな日常では滅多にない事態にワクワクした俺は、家でジツとしている
気にならずに、外へと飛び出した。

ついでに、チャチャゼロさまが暇そうにしてるので、一緒に来ても
らった。

決して、外が真っ暗闇で怖かったからではない。

んで、外に出た俺は、せっかくなので真っ暗なのをイイコトに普段
禁止されている場所に忍び込もうと、学園の端にある大きな橋へと
向かった。

正確には、橋の下の湖だ。

大型の遊覧船とかが通ったりするので、泳いだり、釣りをする事を
禁止している大きな湖だ。

湖に着くと、俺は虚空から黒い塊を取り出して、釣竿へと変化させた。

いざ湖へと向かう。

さあ、楽しい釣りの始まりだ。

最初こそ、普通に釣りをしていたのだが、真っ暗なせいかまったく釣れない。

これはアレだ。

場所が悪いんだ。

そう思った俺は、場所を変えては釣り直し。場所を変えては釣り直し、と転々としてみた。

しかし、どれだけ移動してもまったくアタリがない。

何がいけないんだろう…。

途方に明け暮れた俺を救ってくれたのは頭に乗せた、チャチャゼロさまだった。

「ケケ…コンナ浅瀬じゃ、無理ダロ」

なるほど…つまりここではない場所。

もっと沖の、深い部分にいるんだな…！

「さすがチャチャゼロさまだ。目の付け所が違つぜ」

「褒メルナ。照レルゼ」

さっそく俺は、その辺に生えてた木を失敬して、黒い塊を斧に変えて木を伐り倒した。

…ゴメン。ウソついた。

正確には、チェーンソーに変えて伐り倒した。

斧で伐るとか、シロートにや無理だわ。

んで、適当に纏めて、縛ってイカダにした。

適当に作ったのだが、湖に入れるとちゃんと浮いていた。

やれば出来るもんである。

一仕事終えて満足したので、帰ろうと思ったが…。

「オマエ、何シニ来タンダヨ…」

というチャチャゼロさまの一言で、我に返った。

そうだ。俺は釣りに来たのだ。

チャチャゼロさまをイカダの先に括り付けて、いざ発進。

「オイ馬鹿。何デ、コンナトコニ付ケテヤガル…」

何でって……“ローレライ”って感じがするだろ？

「意味ワカンネエヨ…」

十字架に貼り付けにされた、神様みたいだぜ？

んで、沖で釣りを再開したんだが…。

これが何と、釣れるコト、釣れるコト。

入れ食いといわんばかりに、赤と白の斑模様や金色のヒゲを生やした魚が、ポンポン釣れるのだから面白い。

しかも、俺のこの釣果を祝っているのだろう。

橋の上で、さつきから花火みたいな音が聞こえる。

まったく……暢気なもんだ。

…照れるべ。

と、いい気分になっていた所で、上から何かが落ちてくるような音が聞こえた。

ホラ、あれだ。

ヒューーーーーーウウウ……。みたいな感じの。

その音が段々近づいて来ており、ふと見てみると、何処かで見た金髪の少女が、こちらに落ちてくる。

つか…エヴァだった。

「……うそつき」

少女こと、エヴァは更に泣きそうな顔でそんな事を言った。

「何やってんだオマエ？」

俺はエヴァをそう言って、抱きとめる。

よく見ると、目には涙が浮かんでいた。

「お、おいエヴァどうした！　なんで泣いてんだ！？」

エヴァの涙で頭がいっぱいになった俺は、この事態に混乱状態だった。

落ちてきたという事は、この上。

橋の上から落ちてきたのだろう。

こんな高い所から落ちれば当然、無事では済まないだろう。

「エヴァンジェリンさん！　大丈夫ですか？」

そんな俺の混乱に拍車をかけるように、杖に乗ったネギくん登場。

しかも、空に浮いているし…。

これが、かの有名なワイヤーアクションってヤツか…。

驚きの連続だ。

そんな俺に気が付いたのか、ネギくんが驚く。

「け、桂介さん！？ 何でココに…！！？」

そのネギくんの慌てっぷりに、俺はピーンッ！と来た。

犯人はコイツだと…。

「テメエがエヴァを泣かせたのか————！！」

「へ？ え、ええ！？」

「“ええ”だあ？ 認めやがったなあ————！！！！」

俺は、釣竿を瞬時に、巨大な大剣へと姿を変える。

「え…？ け、桂介さん！？」

「死にさせ————！！！！」

その日、停電の復旧とほぼ同時に、橋は無残に砕け落ちるのだった。

「今日のしずなさん」

「……うう……真っ暗で怖いよう……。桂介さん……（泣）」

停電の暗さが怖くて、部屋で布団を被りながら涙目で丸くなっていました。

第十三話　外で裸って……兄として、妹の性癖が心配だ……（後書き）

うし、何とかエヴァ編が終わった。

次は修学旅行かあ…。

俺も京都行きたいなあ……。

第十四話 高いモノ〃美味しいモノとは限らない

「はい、どうぞ。桂介さん」

「ほ、本当にいいのか…?」

「はい。桂介さんにはお世話になっていますから、そのお礼です」

「そ、そうか…。では遠慮なく」

俺はそう言つと、目の前に置かれた皿に向き直る。

そこにはホカホカと湯気を立てている美味しそうな料理。

“フカヒレの姿煮”、があつた。

「いただきます」

さて……。

食べるぜえ!!

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十四話　　高いモノ〓美味しいモノとは限らない

本日は学園教師陣の給料日だ。

俺は、いつものようにタカミチに奢ってもらおうとしたのだが、肝心のタカミチが出張中だった。

残念ながら、諦めて爺さんのトコにでも行こうか、と考えていると……。

「あれ？　桂介さん」

「ん？　おお、ネギくん」

ちと前に、橋でエヴァから苛められていたネギくんと出会った。

そのまま進む方向が同じだったので一緒に向かう事にした。

そして俺は、この機会に夜の橋での事について、謝罪を述べる事にした。

「あん時は悪かったな。まさか、“ネギくんがエヴァを苛めてた”んじゃないくて、“エヴァがネギくんを苛めてた”とは思わなくてさ」

「いえ、実際エヴァンゼリンさんの服を脱がせてしまったのはボクですから…」

そう、あの停電のあった日。

“裸のエヴァを橋から落とした”と勘違いした俺は、ネギくんごと橋を真つ二つにしてしまったのだ。

幸い、ネギくんはギリギリの所で当たらなかったらしく、被害は橋だけだった。

勘違いだと、アスナン（俺、命名）と喋るオコジヨ。エヴァと茶々丸さんに説明してもらった。

オコジヨが喋る事には驚いたが、そんな時はアスナンなり、茶々丸さんなりに、「やりすぎだ（です）」と怒られていたので、それどころではなかった。

外での正座は小石がチクチクと当たって、とても痛かったぜ…。

「ボクにも非があるのは確かですから、あまり気にしないでください」

い。ボクも、もう気にしていませんから…」

ええ子や…。

ちよつとでも疑つて、悪かったなあ…。

「分かった。あんがとな」

「はい。…ところで、桂介さんはどうして中等部の校舎に？」

俺は、こつちに来る経緯を説明する。

「かくかくしかじか…」

「え…えつと…」

「（ネギくんには難易度が高すぎたか…）つまりな…」

「なるほど…。タカミチに用事だったんですか……」

「タカミチは、よく奢ってくれるからな。ああいう、気さくに奢ってくれるトコとかは、カッコいいよな。大人って感じで……」

「大人……」

俺の言葉に、ネギくんは何故か考えこんでしまった。

そして、ブツブツと何事かを呟くと、こう言ってきた。

「では、ボクが桂介さんに奢りますよ!」

「へ?」

「……」

「……」

「……」

と、そんなこんなで冒頭に戻る、という訳である。

適当な中華料理屋にネギくん入り、適当に何皿か頼む。

ネギくんが、張りきって「どんどん注文しますから」というので、メイン以外にも何品か置いてある。

おかげで、すっかりここだけパーティー状態である。

「こ、こんなに頼んだのか？」

「ハイ！ 何たってボクも大人ですから！」

ああ、なるほど…。

大人っていう単語に憧れて連れてきてくれた訳ね。

納得である。

ネギくんも教師という立場とはいえ、まだ10歳ばかりの子供だ。

大人っぽく振る舞いたいと、そういう事だろう…。

「はい、どうぞ。桂介さん」

「ほ、本当にいいのか…？」

「はい。桂介さんにはお世話になっていますから、そのお礼です」

「そ、そうか…。では遠慮なく」

ネギくんに対して、何かした覚えはないんだけどなあ…。

ま、本人が望んでいるのだし、いただくとしよう。

しかし…。こここの店、やたら豪華だな……。

料理名も全部、漢字で分かりにくかったし……。

値段も書いてなかったな……。

……。

もしかして、スゴイお高いお店なんじゃ……。

……。

……。

が、学園の中だし…。まさかね……。

その後…。

ネギくんが、伝票を見て真っ白になっていた。

別れ際は笑っていたが…。

何か、涙が薄っすらと出てたような……。

えっと……。

ごちそうさまです。

「今日のしずなさん」

「と、いう訳で姉妹校であるこの学園に、少しばかり出張に行ってくれんかのう？」

「イヤです」

とある日の学園長室。近右衛門こと爺さんが、目の前に立つメガネをかけた女性にそう尋ねるモノの、女性の返事はまったくもって躊躇のないモノだった。

「そんな事を言わずに行ってくれんかのう？」

「イヤです」

「他の先生方も今は手が一杯でのう…そこを何とか…」

「イヤです」

「せめて数週間でいいんじゃないが…」

「イヤです」

「いや…だからのう…」

「イヤです」

「……………」

メガネの女性。しずなは断固として、譲らなかった。

結局、この出張は毎度の事ながら、タカミチが行く事になった。

後に、学園長が何故そこまで頑^{かたく}なに拒否するのか？ と尋ねると「愛するココから離れたくない」との事だった。

学園長は、そこまで学園の事を想ってくれる事に涙したが、しずなとしては、「愛する桂介さんから離れたくなかった」と、ただそれだけの理由だったのだが…。

知らないという事は、幸せな事である。

第十四話 高いモノ〃美味しいモノとは限らない（後書き）

作者はまだフカヒレなるモノを食べた事ありません。

…おいしい餃子が食べたいです。

第十五話 旅行かぁ……俺だって、行きてえよ!!!（前編）

なんか最近、エヴァの様子がおかしい…。

いや、前々から外で脱いだり、スゴイ手品使えたり、偉そうだったり、別荘持っていたり、生意気だったり、ガキだったり、残念だったりしたが…。

なんか日に日にイラついているような…。

カレンダーとか見ると、とても機嫌悪そうになるし……。

いったい何なん？

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十五話 旅行かぁ……俺だって、行きてえよ!!!（前編）

エヴァンジェリン side

ふん…忌々しい。

私はエヴァンジェリン。真祖の吸血鬼だ。

魔法界では、泣く子も黙ると言われる存在だが…ある男のせいで、この麻帆良学園という場所にて、何年も、何年も、下らない生活を送っている。

物珍しかったのも最初の一カ月だけ。

数か月と生活する内に、私にはソレが、苦痛にしかなかった…。

私の周りにいたのは。皆私とは違う。

ガキばかりだ。

当然、話が合う人間なぞ数人もいない。

そして、決定的に違うモノ…。

彼女らは“人間”だ。

私とは違い、皆は数年間を過ごせば卒業し、いなくなってしまう。

自然、私は数年と経つにつれ、一人になっていた。

…まあ、そんな事は今さら言っても仕方のない事だ。

それに今では、家族といえる存在がいる…。

……バカも一人いるがな。

それでも……存外悪くはない日々といえよう。

しかし…そんな今でも、この時期はとても憂鬱なモノになるのだ…。

私は、好きでこんな場所にずっといる訳ではない…。

私は、“呪い”によって縛られているのだ。

つまり、縛られている以上…私は、ココにいるしかない……いや、強制的に“居続けなければならない”のである。

ようするに、この学園から一步も外に出られないのだ。

そして、春のこの季節にある麻帆良学園の行事。

それは、“修学旅行”である。

旅行…つまり、学園外に出る必要があるのだ…。

外に出られない、私……。

行事で外に旅行に行く、“楽しそう”な生徒達……。

……………ぐすっ……………。

……………もう寝よう。

くエヴァンジェリン side endく

ふむ…。

妹の様子がおかしい…つか、機嫌が悪すぎて、気まぐれで氷投げてくるのは勘弁してほしいぜ。

コブが出来ちゃった…。

とにかく、妹の機嫌が直るまで、俺は爺さんのトコにでも非難しに行く事にした。

「おい、爺さんいるか」

ノックという名の蹴りを入れてやると、ドアが吹き飛んでしまったので、ドアに謝ってから入室する。

キッチンと留め具も直しておいたぜ。

「…直すくらいなら、壊さねばええじゃろつに…」

「なんか、たまにドアって蹴破りたくなるんだ」

衝動みたいなモノだ。

「ふむ…。まあ、キッチンと直すから特に何も言わんが…客がおる時はさすがに勘弁しておくれ」

「分かってるって。という訳で…」

「うん…?」

「遊ぼうぜ!」

「ワシ…これでも、超忙しいのじゃが…」

そんな事は関係ないぜ。

「ふむ…エヴァの機嫌がのう…」

「そうなんだよ…。最近ずっとそうでさあ…」

俺は、爺さんと“魔法淑女りりかるナノハ”という格闘ゲームをやっていた。

魔法という力を持った淑女たちを操って、戦う格闘ゲームなんだが…。

爺さんの使つ、“黒い翼の女性”が、無茶苦茶強い。

広域魔法の必殺技とか、画面中を覆うほどの範囲で、当たれば体力ゲージ、丸々半分持つていかれるんだぜ？

なんだ、この強キャラ……。

「なんか心当たりないのか？」

「ふむ…そうさのう……」

お！

俺の使っている、“金髪の女性剣士”が必殺モードに入った！

この娘、必殺モードになるか、体力が3割を切ると、衣装が脱げてエロくなるんだよなあ…。

装甲は紙状態だが、スピードと技のダメージが倍々で上がるから、強いんだ。

“黒い翼の女性”は、基本的に鈍重なので、このモードになれば負ける事はないぜ！

…当たれば、即死だな…！

「そついえば、しずなくんもここ数日は機嫌が悪かったのう…」

「は？ しずなさんが！？」

あ…。

今ので動揺して、“黒い翼の女性”の援護キャラである、“ハンマー持った赤い少女”の援護技が決まっちゃった！！

やべえ！！

“黒い翼の女性”から黒い本が出た！！

彼女の最強必殺技の溜め動作だ。

「なんとも…ココから離れたくないと言ってのう…。たった5日じやというのに…」

「5日？ どっか行つたのか？」

あ……。

決め台詞の「これがアタシの全力全開や！！」言ってるし……。

積んだ、か…？

「うむ。中等部の方では今、修学旅行に行つとるのじゃよ」

「修学旅行？」

いや、まだゲージが残っている。

“黒い翼の女性”の援護キャラである、“ハンマー持った赤い少女”の援護技効果でピヨリ状態だが…。

この状態でもこちらの援護キャラは出せるんだぜ…。

「うむ。彼女はその引率…付き添いみたいなもんじゃな。それで出かけておる」

「そつか…。少しの間ですが、離れ離れになってしまいますね。悲しすぎて身が裂けそうですが、私はずっと貴方の事を想っていますから…」ってちょい前に言われたのはそういう事か…」

ゲージを使って、彼女の親友。

“白の魔法淑女”を呼ぶぜ！！

彼女のサポート防御魔法のおかげで、ほんの少しだけが生き残ったぜ！！

彼女の硬さは、ゲーム内でも上位3指に入るからな。

「そ、そんな事を言っておったのか…」

「うむ。…聞いてて、ちと恥ずかしかった」

“白の魔法淑女”は、あまりの強さから“白の魔王さま”やら“白の悪魔”とも呼ばれ、公式でも禁止扱いになっただくらいだから…。

俺達の間でも、使うのは援護キャラとしてだけだ。

「しかし、修学旅行か…ん？ 中等部って…エヴァもそうだよな？」

「ん？ まあ…そうじゃのう……」

お、爺さんの動きが止まった。

技の硬直で動けないんだな。

よし、もらった！！

「なんで、アイツも行っていないんだ？ ハブられてんのか？」

「いや…ちと行けない理由があつてのう…」

コマンドがちと複雑なんだが…「オーバードライブ…真ソニックフ
ォーム！」双剣モードにして…。

ここを、こうして…出来た！

双剣モードから、大剣モードになった“金髪の女性剣士”の武器が、一直線に“黒い翼の女性”に向かう。

「理由？　なんだそりゃ？」

「まあ、ちょっとした呪いみたいなモノじゃよ。彼女はこの学園から出られんようになっていてのう…」

雷を纏った必殺の一撃が“黒い翼の女性”に命中した。

「これが、私の…全力全開！」

決め台詞と共に、モーションが入る。

“金髪の女性剣士”が双剣を用いて、縦横無尽に画面内を駆ける。

目にもとまらぬ速さで、相手を切り刻み、上空で制止すると、双剣が一つに交わり、金色の光を生む。

金色の光は大剣となり、“金髪の女性剣士”が構え、一直線に相手へと向かうと、水平に敵を薙いだ。

雷のように光る大剣が眩い光となって“黒い翼の女性”を包み、最後には閃光となって消えた。

「私は…一人じゃ、ないから…」

決めポーズを取る“金髪の女性剣士”が、カッコいいぜ!!

「呪いか…」

「……………」

「つか、そんな事より…」

「…は？」

「俺も、旅行行きたい!!!」

「へ？」

く今日のしずなさんく

「ほら、行きますよ！ しずな先生!!」

「え〜ん…やだ〜！ 離れたくないの〜（泣）」

駄々をこねるメガネの女性を必死で引きずるのは、同じくメガネの女性だった。

「馬鹿な事言つてないの！　ホラ、集合時間に間に合わなくなるでしょ！」

「いいの～！！　遅れて、私ココに残るんだもん～！」

「いい加減にしなさいっ！！！」

駄々をこねるのは、“源　しずな”その人だったが、もう一人のメガネの女性は“葛葉　刀子”。

同じ学園で働く教師仲間で、お互い、こちらに来てからの友人同士であつた。

お互い気兼ねする事なく、お互いの家に遊びに行く仲だったが…。

刀子は、ここ最近での友人の変わりゆく姿に驚くしかなかった。

「そんなに離れたくないの？」

「当たり前よ！　一秒だって、傍にいたいんだもん！！！」

友人である、しずながここまで夢中になる男性というのはとても興味があるが、いかんせん私たちは教師だ。

教育者として生徒たちに、みつともない姿は見せられない。

遅刻するなど、もつての外^{ほか}である。

「もう…。帰ってきてから存分に会えばいいでしょ？」

「グスン…。だって、会えない内に飽きられたら…って思うと…」

「その時はその時でしょ。ほら、行くわよ」

「え〜ん〜。刀子のバカ〜〜〜（泣）」

そう言つて、恨み言^{こゝろ}を言う友人を引きずりながら、私たちは職員室へと向かった。

まったく…。

私だって、男運は良くないのに……。

……今度、しずなに内緒で、その男性とやらにこっそり会ってみようかしら…。

第十五話 旅行かぁ……俺だつて、行きてえよ!!! (前編) (後書き)

はい。珍しく2話構成にしてみました。

着々と読んでいる読者さん達が増えているみたいで…作者の拙い作品が読まれていると思うと、身を振りたくくなります。
作者はDMなので、それはソレで嬉しいんですが…。

…何書いてんだろ。自分。いや、ジョークですよ？

そ、それはそうと、近い内に後編も上げるつもりですが、いつも通りの不定期人間なので、いつ頃になるかは分かりません。

ただ、今週中には頑張つて出します。

それではまた、次の話で～

P S ・ 作者はリリカルなモノも当然大好きです。

第十六話 旅行かぁ……俺だっ、て、行きてえよ!!!!（中編）

「俺も京都に行きたい」

「……………」

「…間違えた。俺も、旅行行きたい!!」

「いや、同じじゃろっ…」

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十六話 旅行かぁ……俺だっ、て、行きてえよ!!!!（中編）

前回のあらすじ

妹こと、エヴァの機嫌が悪い。

← 爺さんの所に避難。

← “りりかるでナノハ”、をする。

← 金髪の女性剣士が、エロカツクいいぜ！

← 俺も、旅行行きたい ↑ 今ココ。

「だから、俺も旅行に行きたいんだ。爺さん！」

「いきなりなんじゃ？」

「いやな。中等部ってネギくん達もだろ？」

「うむ」

「ネギくん達が楽しんでるのに、俺とエヴァがハブられてんのは悲しいだろ」

「そうじゃのう…」

「という訳で、悔しいので俺も旅行行きたいのだ」

ネギくん達だけ、美味しいモノ食べて、遊んで、観光して、青春してるなんて…。

妬ましいじゃないか！！

「…要するに、“ネギくん達と同じく京都に行きたい。”という事かろう？」

「さすが爺さん。物分かりがいいぜ」

「それは構わないのじゃが…エヴァはどうするのじゃ？」

「何が？」

「（話を聞いてなかったのかのう…）いや、だから」

「ああ…“呪い”がどうのこうの、ってヤツか」

面倒な奴だ…。

しかし、まあ…なんとかなんだろ。

「んなもん、解除すりゃいいだろ」

「それが、出来てたらエヴァがとっくにやってるじゃろ」

「まあ、エヴァはヘナチヨコだから仕方ないな」

「お主…たまにとんでもない事言うのう…」

「俺がちよちよいと、解いてやんよ」

「いや…ちよちよいと、解かれても困るんじやが…」

よしエヴァを連れて、行くとするか…。

俺は家に帰ると、麻袋を用意してエヴァを包んだ。

そして、茶々丸さんを連れて電車に飛び乗った。

「モゴ！ モゴモゴモゴ！？（おい！！　なんだコレは！？）」

今、エヴァは麻袋で包まれているので、中で喋られてもモゴモゴ言っているだけで、よく分からない。

だから、気にせず担いで、電車の荷台に置いておいた。

ちなみに、行き先とかは爺さんが教えてくれたので、バッチリだ。

「ッぶは！！　おい、だからコレは何なんだと聞いているだろ！！」

「お前、荷物なんだから大人しく入ってるよ」

「ふざけるな！！　いったい何がしたいんだ！！」

「うるさい奴だなあ…。茶々丸さん。ガムテープ持ってる？」

「はい。ここに…」

「ありがと。借りるね」

俺は茶々丸さんからガムテープ（布）。を借りて荷台の麻袋エウアに向かう。

「おい、待て…　一体何をするつも…」

「はーい。荷物は静かにしてような〜」

とりあえず、雁字搦がんじがらめにしとくか…。

数分後。

ガムテープ《布》を大量に使い果たすと、エヴァが静かになった。

ジタバタと動くが、少ししたら諦めたのか静かになった。

しかし…ガムテープ（布）で巻くの…なかなか興奮するな…。

知らない所で、新たな性癖に目覚めそうだ。

「あの…」

「なに、茶々丸さん？」

「それで、私たちは何処へと向かっているのですか？」

「…言ってなかったっけ？」

「はい。何も聞いてません」

む…。

そう言えば、帰ってからエヴァを麻袋に入れて、それっきりだっけ…。

反省、反省。

「行先は京都。ネギくん達のトコ行こうと思って」

「京都…ですか…。あの…しかし、マスターは学園から出られませんか…」

「ああ、大丈夫。コレ貼っておくから」

「何でしょうか？ ソレは…」

「なんか、昔友達に貰った」

取りだしたのは、荷札みたいな紙だった。

と、言うか…荷札だった。

「これに、書き書きつと…」

「……………」

「これでよし。ホイ」

書き込んだ荷札をペタツ、とエヴァの入っている麻袋に貼っておく。

そこには、“コレは荷物です。エヴァンジェリンという少女ではありません。”と、書いてあった。

「コレで、大丈夫」

「はぁ……」

その後、学園の境目にある場所まで来たが、問題なく通れた。

「ホラ、大丈夫だったろ？」

「……大丈夫でしたね」

「……ッ！！（そんな馬鹿なッ！！）」

「今日のエヴァンジェリンさん」

「ハ、ハハ……。やった……。やったぞ！！ これで、私は自由だー
ーッ！！」

「ああ……マスターが本当に嬉しそうに……」

私は遂に、あの長い間苦しめられた呪縛から、逃れる事が出来た。

まったく……。この男は、いきなり私を麻袋に閉じ込めて何をするつもりか、と焦りもしたが……。

まさか、この男に救われるとはな……。

「フフ……。まあ、今となっては些末なモノだ」

これで、私は忌々しいあの学園にいる必要はなくなった……。

しかし……これから、どうするか……。

あの、ぼーやが言っていた事を確かめに行ってもいいかもしれない。

そう、あの男が簡単に死ぬはずがないのだ。

「フフフ…。しかし、笑いが止まらん…。よくやったぞ桂介。今なら褒美の一つでもくれてやろうというモノだ」

「え、マジ!? じゃあ“お兄ちゃん”って可愛らしい声で呼んでくれ!」

「…もう少し、マシな願いはないのか？」

「いいから、呼べ!」

「アホか…」

まったく…。この男はいつも通りと言うか…。

「ちえー。じゃあ、茶々丸さん。呼んで」

「はい…………“お兄ちゃん”」

「……俺、もう死んでもいいわ」

いつも通りのバカだな…。

というか、茶々丸もわざわざ言わんでいいと、言うのに…。

…血など、繋がっていないというのに…。

まあ、この男は何故か、私たちを人間扱いするほどのバカだからな

…。

こんなバカに付き合った戯れも、たまにはいいだろう。

「ふん……バカ兄……」

まあ、今日くらいは“兄”と呼んでもいいだろう。

第十六話 旅行かぁ……俺だつて、行きてえよ！！！（中編）（後書き）

何か…、書いてたらまだ京都に着かなかった。

もう少し続きます。

ちなみに、主人公が持っていた荷札らしきモノは、主人公が元いた世界で、友人である冒険者が持っていた、ゝ特殊なジャミング効果のある札ゝといった感じのモノです。深く考えてはいけません。それに、あくまでジャミングだけです、呪いは消えていません。

第十七話 旅行かぁ……俺だつて、行きてえよ!!! (後編)

前回のあらすじ

ネギくんが妬^{ねた}ましい。

←

旅行に行こう。

←

エヴァをガムテープで縛って麻袋に入れ、荷台に放り込んだいた。

←

茶々丸さんは今日も可愛いぜ。

ネギま! 〵外側に立つモノ〵

第十七話 旅行かぁ……俺だつて、行きてえよ!!! (後編)

「ん? おかしいな…魔法が使えないぞ?」

「魔法？ …何言つてんだ？ 魔法なんてモンがあると、本気で思ってるのか、オマエは？ ん？」

「ぐ…その上から目線で、可哀相な娘を見る目はヤメロ！！」

まったく…。

まだ魔法なんて夢見てんのか？ この少女は…。

ウチの幼女^{いもつこ}はいつまで経っても夢見がちだな。

「桂介さん。マスターの呪いは、桂介さんのこの荷札の力で無くなつたのではないのですか？」

「あゝ、その札は誤魔化すモノだから、呪いとやらを解除するような力はないぞ」

「なに！？ それじゃ、意味がないではないか！！」

「…？ 京都行くのには何の問題もないだろうが」

何を言ってるんだ、呪いを解くなど一言も言っていないだろうに…。

しかし、呪いか…。

「ふん……。まあ、今回は外に出ただけでも良しとするか…」

「マスター………」

「心配するな、茶々丸。いずれは自力で解けばいいだけの話だ」

「……はい」

まあ、家族が本気で困ってるみたいだしな…。

俺も解除の仕方を調べてやるか……。

「それよりも、早く京都行こうぜ」

「む…そうだな。急ぐぞ！ 私も早く京都観光がしたい!!」

「はい、行きましょう」

こうして、俺達は京都への道を急いだ。

既に数日と経っているのに、急がねばネギくんたちとすれ違ってしまふ。

それでは意味がない。

ネギくんたちに会って、「俺たちだって京都に来てやったぜ!!」と高らかに言ってるのだ。

「あ、ちなみにその荷札。使い捨てだから」

「何だとッ！？」

まあ、まだ予備のヤツとかあるんだけどな……。

さて…。

京都にやっそこさ着いたと思ったら、そこではちょっとした催しモノが行われていた。

タイミングが良かったな。

「しかし…随分デケエ人形だな…」

目の前では、湖から見上げるような大きさの、デカイ二つの顔をもつ鬼の人形が立っていた。

きっと祭りの主役か何かだな。

「ふん…アレがジジイの言っていた“鬼”とやらか…」

「しかし、爺さんもちょうど良いタイミングで教えてくれたもんだ。まさか、ネギくんたちも参加してるとはな…」

そう、俺たちが京都に着いた、と同時に学園長の爺さんから連絡があったのだ。

それによると、「ネギくんたちの応援に行ってほしい」との事だった。

急な話だったので、俺は詳しい話を聞けなかったが、ノリ^き気のエヴァに連れられて行く事になった。

そして、現場に着いてみると、ご覧の通り。ネギくんたちが湖に架かる橋の上で、ちょっとした舞台を行っていた。

しかし、まさかネギくんやら、刹那ちゃんやら、アスナんとかが舞台をしているとはな…。

このかちゃんなんか、裸同然の姿で参加してるし…。

腕から光の帯を出したり、爆発したり、背中から羽生えてきたり…。

さすが京都。凝った作りだなあ……。

「おい、坊や。聞こえるか坊や？」

隣を見ると、エヴァが何か目を瞑ってブツブツと言っていた。

……大丈夫か？

「フフフ…。わずかだが、貴様の戦い覗かせてもらったぞ……」

おお！！ 刹那ちゃんが空を飛んだ！！

すげえ！！！！

「まだ限界ではないハズだ、坊や。意地を見せてみる！！ あと一分半持ち堪えたなら私が全てを終わらせてやる！！」

羽がバッサバサ羽ばたいているし…。

かっけえなあ……。

「おい、桂介！」

「んおっ！？ どうしたエヴァ？」

「私たちも、そろそろ行くぞ!!」

「ん？ 何処へ？」

「話を聞いてなかったのか！？ アイツらのトコだ!!」

そう言って、エヴァはネギくんたちを指さす。

「おお!! 俺達も参加できるのか！ 飛び入り参加ってヤツだな
!!」

「そうだ!! 今ジジイが私の呪いを限定的に解いた!! これで
あの小僧と大鬼を蹴散らしてやるうではないか!!」

おお！ エヴァ何かノリノリだな。

よっしゃ!! 俺も久々にカッコいいトコ見せてやるぜ!!

「先に行く。オマエもさっさと着いてこい！ 行くぞ茶々丸!!」

「はい、マスター」

言うが早いか、エヴァはお得意の手品で影の中へと入っていった。

俺が驚くのも束の間、エヴァはさつさと舞台の方へと瞬間移動しており、ネギくんと一緒に大立ち回りをしていた。

茶々丸さんも、いつの間にか空を飛んでるし……。

「あ~~~~!!!　ズルいじゃねえか!!!　俺の見せ場も残しておいてくれ~~~~!!!」

エヴァのような特殊移動が出来ない俺は、仕方なく、泳いで追いかける事になった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。契約に従い、我に従え、氷の女王。来たれ、とこしえのやみ!　えいえんのひょうが!!!」

「つつつ、次から次へと何や、何なんやー! あんた何者や!?!」

「くくくく… 相手が悪かったなあ女…。ほぼ絶対零度。150フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐこと適わぬぞ」

ようやくと、湖を泳ぎきつて見ると、エヴァが空中からとても楽し

そうに喋っていた。

おお……エヴァ、ノリノリだな。

「我が名は吸血鬼エヴァンジェリン！！」
「闇の福音最強無敵の悪魔法使いだよ！！」
「アハハハハハッ！！！！」

だが、妹だけに見せ場をやる訳にはいかんぜよ！！

「そして、その兄、桂介だーーーー！！！！」

「け、桂介さんまで……」

おお、ネギくんが律儀に反応しているが、エヴァに比べて地味な気がするぜ……。

くそ……俺にもカッコいい呼び名があれば……。

ならば、技だけでも派手なヤツにして周囲の度肝を抜いてやるぜ！！

えっ……と……。

派手な技……派手な……。

！！

そうだ！ アレをやろう！！

「くらえ！！ プラクテ〜〜・ビギ・ナル〜〜！ 火よ灯れー
ーッ！！」

「あ、あのバカ！！」

巨大な火柱が大鬼を包み込む。

その反動で、近くにいた着物姿の姉ちゃんも吹っ飛んでいった。

「げ……ナニアレ……」

「す、スゴイ……。あんな初期の呪文で……」

おお…アスナんとネギくんが驚いてる！

やべえ、そんな顔で見られたら……

俺、調子に乗っちまうぜ！！

「おら〜〜！！ まだまだ火力上げるぜ〜〜〜〜！！！！」

「やめんかーーーー！！！！」

しかし、そんな俺を止めたのは、敵役の着物姿の姉ちゃんでも、エヴァが吹っ飛ばした白髪の小僧でもなく、

エヴァの投げた、氷の塊だった。

「馬~~~~鹿~~~~!! 私がせっかく氷漬けにしたのに、解凍するとは何事だ~~~~~」（怒）!!!!」

「あ……………」

見ると、確かに俺の炎にあぶられて、氷で閉じ込められていた大鬼はすっかり元通り……。

…いや、若干焦_こげていた。

「ええい…手間を焼かせる…。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……………」

結局、大鬼はエヴァが再度凍らせて、バラバラに砕いていた。

「すごいよ、エヴァちゃん。やるじゃん！ 最強とか自慢してただけあるわね見直しちゃった！」

「ス…スゴかったです。エヴァンジェリンさん」

「そーかそーか！ よしよし、いい子だ！ー」

エヴァとネギくんたちが仲良く談笑している。

投稿地獄がどうのこうの言っているが、俺はエヴァの“オシオキ”で正座させられているので、動けない。

…つく……。足が痺れてきた。

「いいか、ぼーや。今回の事を私が、暇な時にやってる日本のテレビゲームの例えるとだな…」

あゝ…まだ続くのかな……。

足が痺れて、痺れる時、痺れるから。□×……………。

「む…さすがにキツそうだなぼーや。大丈夫か？」

「エヴァンジェリンさん！！ うしろっ…」

ん？

何か、ネギくんが焦ったような声を出していたような……。

…。

……。

……。

ちょっと、待て……。

その白髪の小僧……。

俺の妹に……

何てもん……

突き刺してんだよっ！……！

「この……クソガキッ！……」

俺は、虚空から黒い槍を取りだし、白髪の小僧目掛けて投げつける。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル……“人形使い”か……
そして……」

俺の黒い槍を難なく避けて見せる小僧。

だが…。

その行動も、遅え！！

「シネ…」

俺は槍よりも早く駆け、白髪の小僧が避けたその背後へと回り込む。黒い槍をそのままキャッチし、回避した直後で、こちらの動きに気づいても、反応が出来ないその首へと、更に変化させた黒い剣で薙いでやった。

薙いだ影響で、地面ごと抉りぬいた衝撃は湖面を巻き上げるほどの勢いだっただが…

そこにいた小僧の身体は、水のような幻像だった…。

「……なる程。相手が吸血鬼ハイ・デイルイトウォーカーの真祖…それに、その黒い武器を持つた得体の知れないお兄さんもいる、となると分が悪い…」

「デメエ………」

「今日の所は僕も退くことにするよ………」

言いたい事だけ言うと、パシャッ…と水のように小僧の姿は消えていた。

「クソがつ!!……逃げやがったか……」

残された行き場のない怒りに、

俺はただ拳を握りしめるしか出来なかった――。

「今日のネギくん」

「エヴァ!! 大丈夫なのか!？」

「騒ぐな。吸血鬼である私が、あんな攻撃で簡単に死ぬはずなからう……」

「そ、そうか……よかった……」

「（コイツ……そんなに私の事を心配してくれたのか……）……ふん。心配しすぎだ、バカ兄」

「……エヴァ」

「な、なんだ……」

「……ヘソが出たエヴァは、何というか……イイ感じでエロいな……」

「たまにはマジメに締められんのか……！！」

「おふッ！！」

エヴァンジェリンさんと仲良さそうにしてる桂介さんを見て、幾分か気分が楽になった。

でも、皆を危険な目に合わせてしまっただけで申し訳ない気持ちや、終わった後の解放感で気の抜けた身体は鉛のように重かった。

（ボクも……エヴァンジェリンさんみたいな力があれば……）

ただ、意識がドロのように重たくなっていく中…。
それだけが心残りだった。

第十七話 旅行かぁ……俺だって、行きてえよ!!!（後編）（後書き）

はい。と、いう訳で京都編の後編になります。

といっても、もしかしたら次回の話で京都編のエピローグ的なモノを書くかもしれませんので、まだ京都編は続くと思います。

まあ、来週は少し所要で出かけるつもりなので、いつ出せるかは分かりませんが…。

そんな訳で、また次回会いましょう。

P S ・お気に入り登録が100を超えていた件。あまりの喜びに、仰け反って頭を打ちました（実話）。

読んでくれる皆さん共々、ありがとうございますです。

第十八話 旅行っていいよな。美味いもん色々食えて……。サイフの中身までは

「ふあ~~~~~あ……」

「長い欠伸だな…」

「それくらい、よく寝たって事だ！」

「威張^{いは}つていう事が……？」

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十八話 旅行っていいよな。美味いもん色々食えて……。サイフの中身までは保障できないんだがな……

昨晚……お祭りが終わってから俺達は、ネギくんたちと共に、このかちゃんの家へとやって来た。

アホみたいにデカイ家だったので、驚いたぜ。

しかも、家のあらゆる場所に、精巧に出来た石の像があるんだから、

かなりビビった…。

人間そっくりで、今にも動き出しそうだし…何か置いてある像が殆ど、苦悶の表情浮かべているし……。

……こわ。

でも巫女服姿のお姉さんの像は、一体欲しいな。

……置く場所がないか。

まあ、それはともかく俺は祭りで疲れていたなので、適当な部屋で寝る事にした。

せつかなので、このかちゃんに頼んで大きい部屋にもらった。

「ここは俺の領土だーっ!!」

言いたい事を言って満足したので、寝た。

朝になると、エヴァと茶々丸さんが起こしに来てくれたんだが、二人の姿が、着物姿だった。

とても良く似合ってるぜ。

二人が「この家の者が礼をしたい、とさ……」と言つので、俺もついで行く事にする。

しかし、起こされたせい、まだ眠気が取れない。

「目がニユルニユルする……」

「言っている意味がさっぱり分からん……」

「……囁んじやった」

会話しながら、俺、エヴァ、茶々丸さんの三人で、テクテクと廊下を歩く。

この家はデカすぎて、迷子になりそうだ。

……実際、夜にトイレに行ったら帰れなくなって、諦めて適当な部屋で寝る事にしたしな。

「ホラ、ここだ」

エヴァに案内されて部屋に入ると、大きな広間だった。

左右の壁伝いに、色んな楽器を持った巫女さんが演奏している。

部屋の扉、襖ふすまを開いた瞬間に風が吹き、桜の花びらが大量に舞う中、部屋へと入る。

舞い散る桜と相まって、着物姿の茶々丸さんがとても絵になったので少し驚いた。

「綺麗だ…」

「桂介さん…?」

「え…? ああ、いや…何でもないよ茶々丸さん…」

あぶね。

着物姿の茶々丸さんの、うなじとか反則級だろ。

中央に置いてある丸い座布団? らしきモノに座って待つこと数分。

前方にある階段から、オッサンが1人歩いて来た。

「お待たせして、申し訳ない。この家の代表で、近衛このえ 詠春えいしゅんといい

ます」

「待たされました。エヴァン家の代表、穂守 桂介だ！」

「なんで、オマエはそんなに偉そうなんだ？ あと、勝手にウチの代表を名乗るな」

対抗心が燃えたんだ。

「ははっ…。ユニークな御方おかたですね。…さて、まずはお礼をしなくては…。昨晩は、私共の諍いさかいに巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした」

そう言うと、詠春と名乗ったオッサンは、頭を深々と下げた。

ム、出来る……。

大変、綺麗な謝り方だ。

「そして、有難う御座います。アナタ達のおかげで無事、事なきを得る結果となりました」

「ふん、気にするな、近衛 詠春。私としても久々に全力が出せて気分が良かったからな…」

「そう言っていただけると、助かります」

そういえば、昨日のエヴァのテンションは、可笑しかったな。

まあ、あんな凄い手品が成功したんだから、嬉しいよな。

あんなデカい人形だって氷漬けに出来るんだから、大したもんだ…。

「あの大鬼…スクナは無事、再封印しましたので、ご安心を」

「うむ、面倒を押し付けたな」

「いえ、これくらいは……私としましても、今回はまったく活躍出来ませんでしたからね……。不甲斐ないモノです」

「それよりも問題は、あの白髪のカキが…」

「ええ。現在調査を進めてはいますが…あまり情報が入ってこないのが現状です」

白髪のカキか……。

エヴァの腹に、あんなモン突き刺すとか調子に乗りやがって…。

今度会ったら、ひき肉にしてやる。

「それより、皆さんは、この後のご予定は？」

「む、そうだな…。このまま京都を観光するつもりだが…」

「宜しければ、昼頃になりますが、ネギくん達と共に、ナギの別荘にご案内しましょうか？」

「ふむ……。そうだな、私達も同行するでしょう…」

……腹減ったな。

まだ、終わんないのかな？

「茶々丸さん…ちくわ、ちょうだい」

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

ちくわ、うめえ。

「なんか、生臭いと思ったら…何を食ってるんだ？ キサマ…？」

「え？ ちくわ、だけど…」

「ちくわ、だけど…。じゃ、ない！ こんな所で食うな！！」

「エヴァのくせに、いちいち五月蠅おそろいなあ…」

「その態度はなんだ！！ だいたいキサマは…」

「お、やるか？ やるつてのか！？」

「上等だ！ 表に出ろ！！」

「表？ 出るのは外です…」

「知ってるわ！！ キサマこそ、意味を知らんのか！？」

「え？ 知ってるよ。知ってて言ったんだし…」

「面倒な事をさせるなっ！！」

この駄少女には、一度上下関係をしっかりと教え込まないといかんな。
そんでもって、ついでに“お兄ちゃん”とネコミミ付けて、言わ
せてやるぜ！！

「ははっ…。仲の良い御二人ですね」

「はい。マスターも桂介さんは、とても仲が良いです」

その後、午前中を高速で駆け抜けて京都を観光する事になった。

エヴァのハシャギようつたら、そこらの子供が泣いて逃げ出すくらいだったんだぜ？

超、恥ずかしかった……。

まったく…エヴァはまだまだガキだなあ……。

両手に抹茶アイスと、宇治金時の力キ氷を装備したエヴァを連れ、再度、近衛のオッサンと再会する。

既にネギくんや他の皆は集まっており、後は向かうだけだった。

目的の場所は、ネギくんのお父さんが使っていた別荘らしい。

デコっ娘にそんな話を聞きながら、歩くこと数十分。

草木に覆われた一軒の家があった。

秘密基地みたいで、ワクワクしながら入ってみると、本がズラリと並んでいた。

生活感のない家だが、本当にただ短期で滞在するのに適したこの家には、ちょっとした好感を感じた。

狭いながらも、機能美のある屋内で、縦に長い家という印象の家だ。

皆が思い思いに家の中を漁っているので、俺も適当に漁らせてもらう事にした。

しかし、本はよく分からない文字で書いてあり、読むことが出来ないの、俺はグルグルと歩き回るくらいしかやる事がなかった。

次第に、それも飽きてきたので、適当なソファで寝転がる。

ソファに寝転がっていると、眠くなるのだから不思議だ。

催眠効果あるよな、ソファって……………。

とか考えていると、意識が上に上がっていくような感覚がして……………。

…起きると既に、誰もいなかった。

……しくしく。

……泣いてなんかいいです。

「今日の茶々丸さん」

今日はマスターの、長年の夢だった、という観光をする事になりました。

マスターは、かなりの日本びいきなので、京都という日本の中でも有名な土地へ来る事ができ、口にごそ出しますが、事の発端である桂介さんに感謝している事でしょう。

両手に抹茶味のアイスと、宇治金時の力キ氷を持つマスターは、幸せいっぱい、といった満面の笑みだったのが印象的でした。

ついでに、桂介さんも両手に、同じモノを持っていたのですが…。

そちらも幸せそうな表情でした……。

そしてお昼頃に、ネギ先生の父親が昔使っていたという別荘を、近衛 詠春さんに案内してもらいました。

木々に隠れるように、ひっそりと建つ隠れ家、といった風情の別荘は、小さいながらも多くの本が置いてある建物でした。

マスターは、その建物を静に見ているだけでしたが、何かを思いつめるような表情をしていましたが、こちらを向き、桂介さんを見ると、フツと、笑っていました。

私には、その笑みの意味は分かりませんが、そのマスターの笑顔に何故か、自然と胸が温かくなったような気がします。

気がする……そんな曖昧な表現をする存在ではないはずなのに、そんな事を考えてしまう自分の変わりように、疑問を思った私ですが、それをマスターに尋ねると……。

「別におかしな事ではないさ。オマエも私たちの家族だから、な……」

と言って、やはり笑っていました。

家族……。

桂介さんが現れてから、随分その単語を聞く機会が増えた気がします…。

「今日のエヴァさん」

今日は大満足の日だった。

学園に縛られてから、渴望してやまなかった旅行という行事。

出かける、という簡単な事が出来なかった事が、溜まりに溜まっていた鬱憤となっていたのだが…。

それらを、一気に晴らす機会に恵まれたのだから、力が使えない事を差し引いても、あの男には感謝するべきだろう。

口にすると、調子に乗るから、絶対に言わないが……。

まあ、そんな学園では滅多に味わえない食べ物や、見る事の出来ないモノを見れたのだから…。

…うん。

とりあえず、桂介ではなく、京都に感謝しておくでしょう。

そして、近衛 詠春 の案内で、ナギの別荘を訪れる事が出来た。

アイツのいた場所…。

アイツ自身がいる訳ではないのに、自然と色々と考えてしまう。

呪いの事。

息子であるネギの事。

学園の事。

ナギ自身の事。

でも、最初に言うのは…きっと、私自身の家族の事だろう。

私にも家族がいる。

そんな、ちつぽけな自慢が出来る。

それがとても嬉しくて、楽しみで仕方がなかった。

「今日のしずなさん」

「うん……」

「ねえ……。もういい加減にしたら？」

「だって……」

「お土産くらいでそんなに悩まないでちょうだい……」

学生たちがいないとはいえ、こんな姿を見られたら、どうするつもりなのかしら？

私こと、葛葉 刀子 とその友人である源 しずな は、共に旅行のお土産をみていたのだが……。

しずな が、またも恋する乙女状態になってしまったようだった。

「ホラ、さつさと決めなさいよ。集合時間まで、そんなに時間ないわよ?」

「やっぱり基本の“八橋”かしら……いいえ、ここは奇抜な選択で“ひよこ饅頭”とか……」

先ほどから、愛しの彼にあげるお土産をどうするか、で悩み続けているのである。

悩むのは結構だが、いい加減もう時間も押している。

これ以上、居続ける訳にもいかなかった。

「えっと……えっと……」

「もう、コレでいいじゃない……」

「さすがにソレは……」

「いいから、はい。コレください」

「ちょ、ちょっと! 刀子……!?」

こうして、時間の流されるまま、しずなは刀子が適当に選んだ土産を渡す事となってしまうのだが、それが思いのほか喜ばれる結果となる事を、この時の彼女が知る事は、当然なかった。

第十八話 旅行っていいよな。美味しいもん色々食えて……。サイフの中身までは

お久しぶりです。作者です。まだ生きてます。

という事で、18話をお送りします。

しかし、久しぶりのせいかな、難産でした。

正直、書いててどうよ？ と何度も思いましたが、京都編のまとめ
って事で……。

つか、もう面倒になった（↑作家にあるまじき、発言）ので、さっ
さと流しました。

終わってないようで、終わりです。

次回からはまた学園で、うだうだと過ごします。

では、また……。

第十九話

○月×日。帰ってきた俺

家に帰ってきた。

久しぶりの我が家だ。

旅行から帰って来た直後、疲れが一気に襲ってきたのか、俺はリビングでそのまま眠ってしまった。

そこで、金のお饅頭に押しつぶされる夢を見た。

その衝撃で目が覚めて、見てみると、エヴァが人を枕に眠っていた。微笑ましい姿だが、悪夢を見たのはコイツのせいなので、髪で遊んでやる事にした。

サラサラの髪を、触ったり、結んだり、ヒゲにしたり、写真に撮ったりした。

うむ…。

俺の“エヴァコレクション”に新たなページが生まれた。

最後に、軽くパーマをかけてみようとしたら、アフロみたいになっちゃった…。

…………どうしよう？

ネギま！　　く外側に立つモノく

第十九話　　○月×日。帰ってきた俺

「暑い…」

ジリジリと、うだるような太陽光線が降り注ぐ。

照りつける太陽の熱は、直に浴び続けたら、ミイラになるかなのような熱線だった。

「なんで…俺、こんなトコにいるんだろ…？」

ふと、気がつけば、そこは砂漠といっても差し支えない。砂の砂に

よる、砂天国だった。

ぶっちゃけ、砂漠である。

そんな所に、気が付けば居たのだ。

直前まで何処にいたのか……。

思いだそうとしても、熱でフラフラになった頭では、考えるという事が出来なかった。

「暑い……」

ふと、俺ではない声を聞いて、見てみると、そこにはエヴァの姿があった。

いつも綺麗な金の髪は、熱でカサカサ。

肌も乾燥していて、とても見れたモノではない。

しかし、エヴァもそんな視線など気にしていられる状態ではなさそうだった。

「み、水……」

エヴァが呟いた言葉に、俺は自然と腰に下げていた水筒を渡す。

こんな異常な暑さの場所に居続けていては、直ぐに日射病になってしまうだろう。

水分補給はしっかりするべきだと、熱暴走寸前の頭でつつすらと考えた。

「ホラ……」

エヴァは俺の渡した水筒を受け取ると、グビグビと美味しそうに飲んでいった。

水筒で冷たいままの水は、まさに命の水といえるだろう。

ゴクゴクと飲み続けるエヴァを見ると、本当にそう思った。

…。

……。

……おい。

ちょっと待て。それは俺の水ですよ？

いつまで飲んでらっしゃるのかしら？

「……ゴク……ゴク……ゴク……ゴクン」

あ…。

「ん？ 無くなったのか？ おい、おかわり」

俺は改めて自分の腰を見る。

右………ない。

左………ない。

後ろ………ない。

つまり……エヴァが持っているのが、最後の水筒のようだった。

「おま！！ なに、全部飲んでんの！？」

「いいから、おかわり」

「ふざけんな！！ 俺の水筒の中身全部飲みやがって！！」

「ん？ コレが最後の一個か………使えない奴だ」

テメエ………寛容さ、に対して定評のある俺でも阿修羅になりますよ？

「仕方ない。自分のを飲むか…」

そういうと、エヴァは何処からともなく水筒を取り出した。

そして、またも自らの口に当てると、グビグビと飲み始めた。

「は…?」

「ゴク……ゴク………」

「テメエ!! ふざけんな、俺にも寄せ!!」

俺は、エヴァの持つ水筒を手に取りようと、手を伸ばすが見えない何かに阻まれた。

「は!?!? なんだこりゃ!?!」

「見ての通り、“魔法”のシールドさ…。キサマが馬鹿にしていた“魔法”のなあ…」

「魔法なんて、バカなもの………」

「信じないのは勝手だが、そのままのキサマでは、永遠にこの水は飲めんだろうなあ」

「ふざけるのも大概にしろよ……。こんな子供だまし……」

「ふふ……。そんな事を言っている間に、ホレ」

そう言つて、エヴァは自らの持つ水筒を逆さにしだした。

当然、重力に引かれ、中の水は下へと流れていく。

「ば、バカ！！ 何考えて……」

「ホレホレ、急がないと無くなるぞ」

あ、ああ……。

こうしている間にも、エヴァの持つ水筒から水がどんどん流れていく。

「畜生……！ 来い……！」

空間から、黒い塊を取りだし、腕に巻きつける。

巻きついた塊は姿を変え、籠手のような形となった。

「オラアッ……！」

気合いを入れ、強烈な一撃を叩きこむ。

しかし、エヴァの前に展開されているシールドらしきモノには、何の反応もなかった。

「ウソだろ……？」

岩でも簡単に砕く一撃が簡単に止められてしまい、俺は目の前が真っ暗になりそうだった。

「俺は……俺は、どうしたらいいんだ……」

無力感で目の前までが暗くなっていく。

なけなしの体力を振り絞って出した一撃に、もう立っているのも億劫になる。

膝から崩れ、大地に突っ伏してしまいそうになる。

「もう……駄目なのだろうか……」

打開策もなく、ただ、目の前にある脅威がとても巨大に見えた。

「諦めては、駄目です…」

そんな俺に、何処からか声が聞こえてくる。

「この声は…」

その声は、何処か機械的で…。

それでも温かい、いつも側にいてくれた人の声だった。

「諦めては駄目です。桂介さん」

「茶々丸…さん……」

茶々丸さんの声に、俯いていた顔を上げる。

茶々丸さんは、いつものメイド服だった。

スカートとソックスの間にあるガーターベルトが、色っぽかった。

「貴方はこんな所で…」「うおおおおおおおっ！…！絶対領域パワーアアアアアアアアアアッ！…！」「…え？あの…」

俺の拳に、黄金に光る太陽を見た気がした。

「…という、夢を見たんだ」

「どんな夢だ」

「色っばい……でしょうか？」

所変わって、エヴァ家のリビング。

お土産に買ってきた八つ橋を食べながら、優雅にティータイム中だ。

「んでな、こつからネギくんが現れて「よくぞ、我が配下（クラス
の生徒）を倒しましたね。桂介さん！！」と言ってくるんだ」

「何で私が、あのぼーや何かの手先にならなければいかんのだ…」

「色っばい……」

八つ橋と一緒に買ってきた、このかちゃんオススメのお茶も美味い。

渋い味だが、甘いお菓子と丁度合う。

「んで、今度はネギくん直属の四天王。アスナンやら、このかちゃんやらが出てきて……」

「もう、どうでもいい……」

「……ちょ、ちょっと頭を冷やしてきます」

京都から帰ってきて、いつも通りの我が家である。

「今日の爺さん」

「アタタ……腰が……」

爺さんに、お土産を渡しに行ったら、爺さんは腰を痛めていた。

もう歳なんだから、ハッスルするのは控えた方がいいぜ？

「これは、オヌシの妹のせいなんじゃが……」

俺の妹？

エヴァの事だよな……。

……エヴァのせいって……。

…。

……。

……ッ！

爺さん。エヴァ相手に一人でハッスルしたのか！？

「そんな訳なからう！！」

ははは。

そんな事してたら、俺が挽き肉にしてるぜ？

第十九話

○月×日。帰ってきた俺（後書き）

皆さんも日射病には気をつけましょう。

第二十話 俺の持っている“コイツ”が何かって？ ソイツは秘密ってヤツだ

今日は、しずなさんとお出掛けだ。

二人きりで、お出掛け……。

これは、つまるところ……。

デート……ってヤツだよな……？

今まで、交換日記しかしていない（キスやら、デートやら、えちい事は何回か妄想した）ピュアな関係な俺たちだったが……。

こ、これは期待してもいいんだろうか……。

ネギま！ 〵外側に立つモノ〵

第二十話 俺の持っている“コイツ”が何かって？ ソイツは秘密ってヤツだ

エヴァンジェリン side

朝、目が覚めると何かしら違和感を感じた。

いつもならリビングまでくれば誰かしらいるのだが…。

今日は誰もいないせいだろう。

茶々丸もどっかの馬鹿も、今日は出かけているようだ。

私は、茶々丸が用意してくれた朝食を、いつもより味気なく食べながら今日の事を考えた。

幸い、今日は花粉症がそれほどに酷くない。

あのバカが買ってきた空気清浄機。＜癒しの風さんver2.5＞が、思いの外、効果があつたのかもしれない。

家にいれば、ある程度は快適に過ごせるだろう。

これまた幸いな事に、今日は学校が休みなので、終始家にいても問題はないだろう。

ただ…家にいてもする事がないので、結局、暇を持て余す事になるのだが……。

まったく……。

あのバカ男は、こういう時こそ家に居れば役に立つといつのに……。使えないヤツだ。

「はあ~~~~~……」

ソファに寝転び、ゴロゴロする。

女性としては、はしたないかもしれないがここは自分の家なのだ。

これくらいは、好きにさせてほしいものである。

「暇だ……」

いつもより独り言が多くなっている自分に危機感を感じるが、実際に暇なのだからしょうがない。

……ゲームでもしようか。

そう考えていた私の視界に、何かが映った。

それは、黒い塊だった……。

「これは……」

近づいて見てみると、それは黒い……黒い塊だった。

それ以外に何ともいいようがないのだ。

見た目は本当に真っ黒。

黒一色で出来ており、少し長い……ナマコ？　メガネケース？　みたいな形だな。

突起のようなモノや窪みも、何もない。

本当に黒いナニカ……である。

「これは……何なのだ？」

私が途方にくれていると、何もない空間から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「御主人。何ヤッテンダ？」

「チャチャゼロか……。オマエこそ何でココにいる？　地下に放置し

ていただろう？」

この人形とは付き合いが長い。

それこそ最初に作った従者なのだから当然だ。

気兼ねなく話せるように調整したと思ったら、口が悪くなってしまったのが難点だが…。

まあ、付き合いが長い分どの人形よりも頼りになるのだから、得てして物事とは上手くいかないものだな……。

「数年前カラ居ツイテイル変ナ男ガ居ルダロ？ ソイツガ、何カ“様付ケ”デ敬ツテクレルンダヨ。ソノママ命令シテタラ色々ト連レ出シテクレルヨウニナツタゼ？」

「あのバカ男……」

最近、「守り神様が付いてくれるようになったんだぜ！」と自慢そうに言っていたのはこれの事か…。

「ソレヨリ、ソレ…。ソノ馬鹿ノ持チ物ダロ？」

「ん？ この得体のしれないモノがか…？ こんなモノ持っていたか？」

あのバカの持ち物と聞いて、途端イヤな予感がする。

一体何処から拾ってきたんだか……。

「ホラ、アイツ虚空カラ武器出シテタロ？ ソレ、ダ」

「あー……」

確かに、アイツは何処からともかく武器を出していたな。

最初は不思議に思ったモノだが…。

それが、コレ……か？

「一体ドンナモノカ興味アルダロ？ 触ッテミタラドウダ、御主人？」

「……触るのに抵抗があるな」

何か今にも動き出しそうなんだが……。

だが、確かに好奇心を^{くすぐ}くすぐられているのも確かだ。

恐る恐る手を伸ばしてみる。

そろ~~~~~
.....。

.....。

.....。

.....。

.....
ウネウネ。

.....。

.....。

.....。

「何か（力）動いた（イタ）———!？」

s i d e
e n d

デート未満（しずなさんの体調が悪かったのか結局出来なかった）から帰ってきたら、いきなり怒られた。

理不尽だと思った。

「リビングにあんなモノを放置しておくんじゃない！！ 今後、置いてあったら茶々丸に言っ捨てさせるからな！！」

「あんなモノって……。慣れるとカワイイのに……」

「ギャーッ！？ 見せるんじゃないっ！！」

氷漬けにされた。

「今日のしずなさん」

しずなさんの家。

「えへへ」。桂介さん「」

デートの前から緊張しすぎて倒れたしずなさんは、夢でデートの続きをみていました。

第二十話 俺の持っている“コイツ”が何かって？ ソイツは秘密ってヤツだ

放置してた訳ではないんです。

ちよつとネタが出ないなゝってだけで……。

あははは……。

……なんか、スイマセン。

第二十一話 結局…テストってのは何のテストだったんだ？

「あれ？ エヴァに茶々丸さん。こんな時間にどこか行くのか？」

「ん？ ああ、オマエか。ちょっとした用事があったな…」

ある日の日曜日。

午後の11時を過ぎたところで、外へと出かけようとしている二人を見つける。

さすがに女の子だけでこんな時間に出かけるのは男として感心はしないでしょう。

というか、普通に心配だ。

「用事？」

「ウチの先生とちょっとした約束があるんだよ」

「約束…」

約束…。

そうだな。約束は大事だ。

ウチの先生というのは多分、エヴァの担任である子供先生のネギくんの事だろう。

こんな遅い深夜ともいえる時間に、若い男女が二人…。

「まさか、ふしだらな事では…」

「アホかつ！ そんな事があるわけないだろう。ちよつとしたテストをしてやるだけだ」

「冗談だ。茶々丸さんもいる事だしな。しかし、テストって…普通オマエが見てもらう立場じゃないのか？」

「今回はちと特別なんだよ。とにかく私はもう行くぞ。時間に遅れてしまうからな」

「それでは行つてきます。桂介さん」

エヴァはともかく、茶々丸さんは弱い女の子なんだから、さすがにこんな時間に見送るのは心配だな。

いくら、この街が比較的安全とはいえ、変態とかが出てきたら事だからな。

「俺も着いて行つていいか？」

「なに？」

「エヴァはともかく茶々丸さんが心配だ」

「キサマ……」

「茶々丸さんは大事な人だからな。何かあつたらと思つと気が気じゃないんだ」

「桂介さん……」

ん？ 今、茶々丸さんの頭に煙みたいなモノが見えた気が……。気のせいかな？

「それではお願いします……」

「おう。大船に乗ったつもりでいてくれ」

快適ではないが、安全な旅をお約束するぜ？

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第二十一話　　結局…テストってのは何のテストだったんだ？

さて、エヴァと茶々丸さんと俺（チャチャゼロさまの要望でチャチャゼロさまも椅子と一緒に持ってきた）は世界樹前の広場で待っていた。

「オイ、ナンカ酒買ッテキテクレヤ」

「はい。喜んでー！」

「ツマミモ忘レンナヨ」

「チーズでよろしいでしょうかー？」

チャチャゼロさまに貢ぎながらだが…。

「オマエらは……まあいい。おい桂介。私にも何か飲み物を…」

「自分で行けや」

「ほほう、いい度胸だ（怒）」

なぜエヴァにまで貢がなければいかんのだ？

…氷漬け一步手前で逃げのびた俺は近くのコンビニで適当に買い物
を済ませる。

すると、店の前でネギくん達と会った。

「あれ？ ネギくんと……その他御一行」

「誰がその他御一行よ！」

いやだって、ねえ？

人数が多すぎんねん。知らん娘もいるし。

「あ、桂介さん。こんばんわ。桂介さんは買い物ですか？」

「うんにゃ。パシリ」

「パシリ…ですか？」

「アンタ、パシリにするってどんだけよ…」

人は生きていく上で、えてして誰かに奉仕しているもんなんだぜ？

その後、ネギくん達とエヴァの待つ広場まで向かう。

行く途中で、“佐々木さん”とか“くーふえい”とか知らない人も挨拶した。

気軽に“お兄ちゃん”と呼んでもらおうとしたら、ノリよく答えてくれた。

いい娘たちである。

「ん？ 来たか…」

「エヴァンジェリンさーん。ネギ・スプリングフィールド。弟子入りテストを受けに来ました」

「はいチャチャゼロさま。御所望のワインとおつまみでございます」

「オウ。御苦労サン」

（（（今…人形が喋ったような……？）））

チャチャゼロさまにワインとおつまみを捧げて、俺もエヴァの隣に行く。

「ほれエヴァ」

「ん？ おつと…。何だコレは？」

「何って、飲み物欲しいって言ってたろうが…」

「あ、ああ……（最初から素直に買ってくればいいだろうに……）……」

「なんだよ？ こっちの“体力の全回復する緑と赤と黄色のハーブ入りドリンク”の方がよかったか？」

「いや…こっちでいい…（よくコイツはそんな得体の知らない名前のモノを飲めるものだ…）……」

「変な奴」

「ふん、貴様ほどではないわ」

「両方とも準備はいいな？」

「はい。茶々丸さん。お願いします」

「お相手させて頂きます」

エヴァの言葉で茶々丸さんとネギくんが向かい合う

二人とも動きやすい格好をしているが……。

茶々丸さんのスパッツから伸びる脚が艶めかしくて鼻血が出そうだ。

「では始めるがいい!!」

再度、エヴァの一言で向かい合った二人が動き出す。

茶々丸さんはネギくんの方へ。

ネギくんは、おもちゃのステッキを持って何事か集中して。

二人がぶつかると同時に、身体全体を使った高速の組み合わせが始まる。

茶々丸さんが拳を突き出せば、ネギくんはそれをいなし、カウンターの一撃を。

ネギくんが拳を突き出せば、最低限の動きでそれを避け、それ以上

の攻撃を繰り出す茶々丸さん。

どちらも、殴りあうだけではない技術をもった組み合わせだった。

「おお、ネギくんやるなあ……」

「ふん…我流の自分への魔力供給か…」

エヴァと一緒に二人の様子を観戦する。

ただの子供と思っていたが、ネギくんがここまでやれるというのは知らなかったぜ。

…まあ、それよりも茶々丸さんがこんなに強いとは思わなかったが……。

……あんまり今後も怒らせないようにしようと思った。

「ぐ……うぐっ……」

「ネギ君!!」

よそ見をしてる内に、ネギくんが吹き飛ばされ態勢をくずしていた。

「いや作戦どおり!! あれは誘いアル!!」

あ、そうなの？

でもそれを、くーふえいちゃんが言っちゃったらアカンのでは？

改めて見ると、崩れたと思ったネギくんの足腰はキチンと地面を踏みこんでおり、力をため込んでいた。

そして茶々丸さんの高速の一撃を受け流すと、それを掴み。引き込む。

そこにネギくんの渾身の肘が入るかと思いきや、茶々丸さんの動きはそれを凌駕していた。

突き出した手をそのままに、ソレを軸として、ト、トンツ。と側にあった柱を利用しネギくんの背後へと頭上から回り込む。

これにはさすがのネギくんも対処しきれずに、上から勢いをつけた茶々丸さんの蹴りがネギくんへとクリーンヒットする。

ダン、ダダンツ！ と数メートルも吹っ飛んだネギくんは、そのまま倒れこんでしまった。

「…………チツ。ふん……。まあ、そんな所だろう」

おおっ!?

舌打ちしたエヴァめっさこええ…。

これは、種を取りつくしてようやっと思っようとしていたスイカを横取りした時のエヴァ並みだ。

……いや、あの時の方がもっと怖かったな。

「ゴキゲンナメダナ御主人。ケケケッ」

笑い事じゃないぜ。チャチャゼロさま…。

「ネギ!!」

「ネギ君」

倒れこんだネギくんの下へ駆け寄るバカレッド&ピンク（このかちやんが教えてくれたんだが、コイツらのあだ名らしい）。

「残念だったなぼーや。だがそれが貴様の器だ。顔を洗って出直してこい」

心配する二人をよそに、エヴァはネギくんに追い打ちをかけるよう

に突き放すが、ネギくんは笑ってそれを否定した。

「へ…へへ……。まだです…。まだ僕くたばってませんよ。エヴァンジェリンさん」

「ぬっ…？ 何を言ってる？ 勝負はもう着いたぞ。ガキは帰って寝ろ」

「…でも条件は「僕がくたばるまで」でしたよね。それに確か時間制限もなかったと思いますけど？」

「な…何っ！？ まさか貴様……」

「へへ…そのとおり一撃当たるまで何時間でも粘らせてもらいます。茶々丸さん続きを…！」

「し、しかし先生……！？」

続行を望むネギくんは、拳でソレを伝えようとするが、ダメージが酷いのだろう。

先ほどまでとは雲泥の差といわんばかりにスピードがガタ落ちになっ
っていた。

当然、そんな攻撃が茶々丸さんに通じる訳がなく、軽々と避けられ
茶々丸さんの肘であっさりとやられてしまう。

「茶々丸さん…ほ、本気でお願いします手加減されて合格しても意味ないですから…」

「で…でも……」

それでも諦めずに立ちあがるネギくん。

すげえな、ネギくん。まるでマンガの主人公みたいだぜ。

「…わかりました」

茶々丸さんもネギくんの熱意に押され、攻撃を続行する。

茶々丸さんも心苦しいのだろう。辛そうに無表情でネギくんを責め続ける。

ゴッ！

バキィッ！

ドカアッ！！

延々と一方的な組み合わせのまま時間が流れる。

既にネギくんは至る所を打ち身などで青アザを作りボロボロとなっ

ていた。

さすがに見ていられたモノではないが、止める事もネギくんの事を考えればとてもではないが、したくはなかった。

「お、おいぼーや。もういいだろ。いくら防御に魔力を集中しても限界がある。お前のやる気は分かったから、な？」

「い、いえ…ま、まら……あきらめないでふ……」

エヴァもそんなネギくんの様子に降参を促すが、ネギくんがそれを認める事は断固としてしなかった。

「はあ…ネギくん意地っ張りで頑固そうだもんな…。なんとかならんかね、チャチャゼロさま？」

「ケケケツ。根性アルナーアイツ。モットヤレ」

「おいおい……」

見かねた様子で少女たちもネギくんを止めようとするが、一方でそれを良しとせず、ネギくんをあくまで応援し続ける娘もいた。

青臭い事も言っているが、ネギくんに対して真剣に考えた結論なのだろう。

必死だけは伝わってきた。

改めて見るが、ネギくんはどれだけ殴られても、どれだけ蹴られても立ち上がり続ける。

頑固で融通の利かないハゲそうな性格のネギくんだが…。

それでも俺の数少ない男の知り合いの一人だ。

「おごつて貰った恩もあるしな…」

「ン？ 何力言ツタカ？」

「別に…。よつと…」

俺は立ちあがると茶々丸さんに声をかける。

「茶々丸さーん」

「はい？」

律儀に俺の方向を向いて答える茶々丸さん。

そんな所も可愛いんだけどね。

でも今回は……。

「ゴメンね」

「？ なんの…」

「あ…オイ茶々丸…！」

「え…」

フラフラなネギくんがいきなり何かにつまずいたように前へ倒れこむ。

その拳は、当然前にいた茶々丸さんの方へと迫り、偶然なのかネギくんが無意識に伸ばしたのか。茶々丸さんの頬に、ペチツと軽い音を立てて当たってしまったていた。

「…あ」

「な…」

「あ……当たり…まふいた……」

ドサッ…と倒れこむネギくん。

「「「「やっ たー！ー！ーっ！ー！」」」」

「コラー！！！ 桂介ッ！！ 茶々丸ッ！！」

「サーセン」

「す、すすすいません。マスター」

こうして、ネギくんのテストはネギくんの勝利。

合格という結果で幕を閉じたのだった。

く今日の茶々丸さんく

（マスターの命令とはいえ…ネギ先生には悪い事をしてしまいました……）

ワタシはマスターの命令で、ネギ先生のマスターへの弟子入り試験

の相手をさせて頂きました。

命令に逆らえないワタシですが、ネギ先生を“殴る”たびに何故か胸がチクチクと痛みました。

（それに…桂介さんにも、ワタシがネギ先生を殴る所を見られてしまいました……）

ネギ先生を殴った時とは違う、なにか説明できないイヤな感じ…。理解できない思考で埋め尽くされてしまいそうです。

機械であるワタシが痛みを感じたり、説明できない思考でいっぱいになるなど、本来ある事ではないでしょう。

でも、どれだけ考えても理解できませんでした。

「だいたい、勝負中に声をかけるとは何を考えているんだ？」

「だから悪かったって…」

マスターは帰りの道中も、負ける敗因となった桂介さんを叱っていました。

確かにワタシが桂介さんに呼ばれて振り向いたのも敗因の一つですが、ワタシがマスターの声で、ネギ先生の方に振り向いた時。

ネギ先生の足元でウネウネと動く黒い何かが見えました。

それがネギ先生の足をとったのが決定的だったと思います。

（アレは確か…桂介さんの……）

そして、マスターの要望は「手を抜くな」との事でしたが、だからと言って負けてしまっただけだったのか？ と問われればそれは違うのでしょうか。

ですが、負けた事に対してはマスターはそこまで気にしてはいないようでした。

（結局…何が“正解”だったのでしょうか……）

結局。疑問ばかりが生まれ、増えていくばかりでした。

第二十一話 結局…テストってのは何のテストだったんだ？（後書き）

相も変わらず、遅くなりました。

21話をお送りします。

しかし、最近…といっても結構前からでしょうが、“スパッツ”の事を“レギンス”というみたいです。でも、作者は“スパッツ”の方が好きです。

ちなみに関係ありませんが“スパーツツア”もちよつと食べてみたいです。

も一つ関係ありませんが、“パスタ”は好きです。“ラーメン”の次だな！！

第二十二話 お天気ニュースって、ついつい見ちゃうよな？

「すみませんね。わざわざこんな所まで」

「ん？ ああ、別に気にしないでくれや。どうせ暇だったしな……」

今日は朝早くから、おつかいに出ていた。

ちなみに依頼人は学園長の爺さんで内容は、図書館の地下に住んでいる司書さんに本を届ける、といったものだ。

本当は、今日のお天気ニュースの占いで今日は運勢が最悪だったので、出かけたくなかったのだが……。

爺さんがどうしてもというので、引き受けたのだ。

ちなみに、司書さんはローブ姿でいかにもな変態っぽかった。

「お礼に私のお勧めの本をご紹介しますよ。 “YESロリくタNOタッチく” というシリーズでしてね……」

「あ、俺年上派なんで……」

どっかで聞いたタイトルだな……。

ゴアアアアアアアアアッ!!

ん？ 今何かドラゴンの咆哮のようなモノが聞こえた気が…。

「おやおや…。朝っぱらから侵入者とは…。いやはや、この学園の生徒さん達は侮れませんねえ……」

困ったように言う司書さんだが、笑顔なので困っているのかどうなのかとても判断できない。

「あ、それで先ほどの続きですが、私のお勧めは特に先月出た“YESロリ”タノタツチvol.9<白いソックスと未成熟な絶対領域>”なんかは特に……」

勘弁してくれ……。

ネギま！　く外側に立つモノく

第二十二話　お天気ニユースって、つつい見ちゃうよな？

家に帰る途中で、ネギくんと女の子たちが花火をしていた。

リア充め、もげろ。

「…あうう？」

と思っていると、ネギくんがいきなり倒れた。

よく見ると、ネギくんの周りには最近よく見かけるメンツだった。

「何やってんだ、お前ら」

「ん？　貴様か…」

声をかけるとエヴァが反応してくれた。

というか、花火やるなら俺も誘ってくれよ。

「こんな真昼間から花火でもしてんのか？」

「まあ……。そんなトコだ……」

「（え？ エヴァちゃん。なんでこの人に魔法の話さないの？）」

「（コイツに魔法なんて言っても信じないんだよ。というか、エヴァちゃんはやめろ……）」

コソコソ話してるな……。

なんか、ぼつちにされているみたいで寂しいぜ。

「そか……。んじゃ俺、先帰るわ……」

寂しくなったので、一人帰って不貞寝する事にした。

夜になって起きてリビングに行くと、少し騒がしい。

見ると、エヴァがメガネをかけて何事かを、ネギくんとこのかちゃんに教えていた。

…エヴァのメガネ姿……。

……有りだな。

可愛かったので、写真に撮ろうとしたら……。

「邪魔だ」

一蹴された。

凹んだので、再度部屋で不貞寝した。

「エヴァが冷たいです……」

部屋で熱くなる目頭と格闘していると、階下で、バシンッ！ ビシッ！ ダンッ！ と物音がした。

かなり喧しい音だったので、何なんだと再度下のリビングに行くと、ネギくんが何かしらの格闘技の練習をしていた。

……外でやってくれよ。

一言注意しようとしたが、ネギくんが今度はいきなり脈絡もなく泣き出すと隅で頭を抱え始めた。

情緒不安定なんだろうか……？

「どうしたんだ？　ネギくん」

「へう…？　あ…桂介さん。なんでここに？」

俺が自分の家にいたら、オカシイでしょうか？

「お、ダンナ。ちょうどよかったダンナも話を聞いてくださいよ」

聞き覚えのない声に振り返ると、白い獣が何かを喋っていた。

「何だコイツ？」

「コイツはないですけどダンナ。皆のマスコット。“アルベール・カモミール”。通称“カモ”でさあ」

なんぞ、このオコジヨ？

とっても鬱陶しいんだけど…。

「ネギ先生のペットですよ。桂介さん」

一緒にリビングにいた刹那が補足をしてくれる。

そういえば、ネギくんの肩に居た気がするなあ…。

「なるほど。で、その“カモナール”が何か用か…？」

「“カモミール”だって、ダンナ。それより兄貴の話を聞いてくださいえ」

「兄貴？」

「ネギの兄貴の事でさあ」

ネギくんが兄貴で、俺がダンナかあ…。

…俺もアニキの方がいいなあ。

「どうかしたんですかい？」

「いや、なんでも…。で、ネギくんの話ってのは？」

「それが――」

「ネギ先生大丈夫ですか？」

俺が“カモ煮^ニール”から話を聞こうとするより先に、茶々丸さんが紅茶を持ってきてくれた。

側には見知らぬメガネを着けた少女もいる。

ついでにチャチャゼロさまもいた。

「紅茶です」

「あ、どうも」

茶々丸さんが、紅茶のカップを並べる。

さすが茶々丸さん。エヴァなんかとは違って気配り上手である。

えっと…。

ネギくんの分…。

刹那ちゃんの分…。

チャチャゼロさまの分に…。

メガネの少女の分…。

オコジヨの“カ…カ…カマカーニ”の分と…。

そして……俺の前には、カップがないのですが？

「申し訳ありません。桂介さんの分もすぐに持ってきますので、少し待っていてください」

え……？

そんな……。

茶々丸さんまで……。

茶々丸さんまで、俺をのけ者にするのですか……？

「うあああああああああ——っ！—」

気が付けば、駆けだしていた。

「（桂介さんのマイカップ…マイカップ…あ。ありました…）…お待たせしました、桂介さん。…アレ？」

「あの…茶々丸さん。桂介さんが叫びながら走って行ってしまいました…が…。どうかしたのでしょうか？」

「……え？」

泣きながら目的地もなく走っていると、図書館島の方まで来ていた。途中で、全裸で走るバカレッドことアスナんやら、寝ているドラゴンやらがいたが、素通りして最下層にいるイケメソ司書の兄ちゃんのとこまで行って泊まらせてもらう事にした。

「泊めてほしい…ですか？ かまいませんよ」

「ありがとう。ローブの紳士！ よ、男前！！」

「ふふふ…。それでは私秘蔵のコレクション。“YESロリ〜タN Oタッチ〜総集編＜未発達という禁断の果实＞”でも見て夜通し語り合いませんか」

「げ……」

俺の災難は、まだ終わっていないようだ……。

第二十二話 お天気ニュースって、つつい見ちゃうよな？（後書き）

何か…微妙……。

ネタがマンネリしないようにしたいなあ…。

あ、ちなみに作者は巨乳のメガネっ子派です。

けて口。ータ趣味はないので、あしからず…。

あの図書館島の司書さんであるイケメソの家で泊まって以来、ほぼ毎日……。

……いい加減ノイローゼになりそうだ。

「おい五月蠅いぞ！ 毎日毎日変な叫び声で起きるな。近所迷惑どころの騒ぎじゃないぞっ！！」

「ひいつ！？ 幼女！！」

「誰が幼女だっ！！」

ネギま！　　ゝ外側に立つモノゝ

第二十三話　ネギくん、ネギくんって…そんなにネギくんが好きならネギくん村の住人になったらいいじゃない……

最近、ネギくんが我が家に入り浸っている。

家主であるエヴァの許しがあるから致し方ないとはいえ、なんとなくか……こう……微妙な気分だ。

まあ、ネギくんは良い子だしね。

あんまり気にしないようにしよう。

…そう思っていたのだ。

最初の内は。

………しかし……。

その認識は甘かったとしか言えない。

例えば、ここ数日……。

エヴァの部屋に押し掛けると――。

「エヴァー。新作の格ゲーやろっぜ」

「ん？ 今は少し忙しい。ボーヤを揉んでやらんといかん」

遊んでくれない……。

茶々丸さんと出かけようとすると――。

「茶々丸さん。一緒に買い物行かない？」

「あ、桂介さん。スミマセン。今からマスターと一緒に別荘に行きますので…」

構ってくれない……。

余ったチャチャゼロさまの所に行く――。

「チャチャゼロさま？ アレ、いない？ ん、張り紙？」

「才出力ケ中ダ。ケケケッ」

お出かけ中だった……。

そう、エヴァ家の面々がネギくんに構いつきりで、のけ者みたいになっっているのだ。

ネギくんが悪い訳でも、エヴァや茶々丸さんが悪いわけでもないとは思っのだが……。

…とりあえず腹いせに、ネギくんとタカミチがホテル街を歩いていた噂を流しておいた。（ネギくんよりもタカミチが白い目で見られたが…）

そして極め付けがコレである。

「ん？ 家の電気がついてない？」

その日、爺さんからの夜間警備のバイトを終えて帰ってくると、家は真っ暗だった。

仕方ないので、煙突から侵入する。

煤まみれになるので、正直入りたくないが背に腹は代えられない。

「……っぺっぺ！ あゝったく…エヴァー。寝てるのかー？」

深夜とはいえ、遅くまで起きているエヴァらしくない。

気になって部屋に入ってみるがベッドは、からっぽだった。

「アレ？」

仕方ないので、リビングまで戻ってみるとテーブルの上に置手紙が置いてある事に気づく。

丁寧に書かれているので、エヴァではなく茶々丸さんだろう。

どれくらい丁寧かというと、“行書体”で書かれてるくらい丁寧だ。

「えっ」と…なにになに…？ 『今日はマスターとネギ先生。そして姉さん（チャチャゼロさまの事）と共に、別荘の方へ行ってきました。テーブルに晩御飯を置いておきますので、レンジで温めて食べてください。茶々丸』……か」

見るとテーブルにはお皿が置いてあり、そこにはラップしてある野菜炒め（ちくわ入り）があった。

お茶碗にごはんを盛り、コップにお茶を注ぐ。

お椀にお湯を注ぎ、インスタントの味噌汁を作る。

チーンッ！

タイミングよく出来た野菜炒めをレンジから出し、テーブルへと並べた。

「……いただきます」

野菜炒めをおかずにごはんを食べる。

少し濃い味付けだが、ご飯と一緒に食べるので、これくらいでちょうどいい塩梅だ。あんばい

「…………スズッ」

味噌汁はインスタントなので、無難な味付けである。

可もなく不可もなく。

普通だ。

…………。

…………。

…………。

「もぐもぐ…………ゴクン。…御馳走さまでした」

晩御飯を食べ終え、お皿を台所に持っていく。

ザッと水洗いして、全自動食器洗い機（制作：麻帆良学園工学部）に入れ、スイッチオン。

「…食後のお茶は…………」

いつもなら、食後のお茶は茶々丸さんが用意してくれるんだが……。

「……今日はいいか」

食事を終え、リビングでテレビを見る。

誰もいないので、好きな番組を見る事が出来る…。

……いつもなら、エヴァが時代劇を見るか、俺がアニメを見るかでケンカするんだが……。

「……テレビもいいか」

今日はテレビもやめて、風呂に入ってさっさと寝る事にする。

お湯も張ってないので、シャワーだけで手軽に済ませ、愛用のパジャマ（制作：しずなさん）を着て寝る事にする。

真っ暗な天井を見ると、自然に目頭が熱くなってきた。

「……エヴァ……。茶々丸……。寂しいよ……」

その声は森全体に響くほどに木霊し、たまたま近くでキャンプをしていた忍者少女が、「『寂しい、寂しい……』と泣く男の幽霊が出るでござる!」と噂を広げる事になるのだが……。

それはまた、別の話である――。

第二十三話

ネギくん、ネギくんって…そんなにネギくんが好きならネギくんえ〜っと……。なんかゴメンなさい。

単純に上手く手が進まないまま、気がついたら放置…みたいな流れになっておりました。

久しぶりの話なのに、いざ書いたら女の子が出てこなくて絶望した…orz

じ、次回は頑張ります…。

第二十四話

いつもより色気60%増し……こんな歌い文句に騙されても俺は

「はぁ…（起きてきても誰もいないリビングとか寂しすぎるぜ…）」

朝起きてリビングに行くが最近は何もない。

前までエプロン姿の茶々丸さん（超愛らしい）や寝ぼけているエヴァ（超可愛い）と一緒にいたはずなのに…。

「どうしてこうなった…」

「何がこうなったんだ？」

完璧独り言のつもりだったので、突然の声に驚いてしまった。

見ると、そこにはエヴァがいた。

「エ、エ、エエヴァンジェリンさんじゃありませんか…!？」

「何を動揺している？」

「き、きき、気のせいです」

「???…変なヤツだ。まあ、いい。今日は予定があるのか？」

「ん、俺？ とくに無いから爺さんトコでも行こうと思ってたけど……」

なんか、エヴァとまともに会話するのが、すげえ久しぶりな気がする。

「そうか、ならちようどいい。今日は付き合え」

「へ……？」

「聞こえなかったのか？ 今日は私に付き合えと言っただ」

エヴァが……。

俺を誘っているだ！？

「し、仕方ないな。エヴァがどうしても、と言っなら付き合ってやらん事もやぶさかでは、あつたりなかったりだぜ……？」

「……よく分かんが、いいんだな？」

まったく……。

いつまで経ってもお兄ちゃん娘で困るぜ、この幼女は！

「なんだ、ニヤニヤして気持ち悪い奴だな……」

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第二十四話　いつもより色気60%増し……こんな歌い文句に騙されても俺は後悔しないぜ（泣）？

「リク・ラ・ラクラ・ラックライラック……」

「くっ！？」

今、眼前ではエヴァとネギくん。そして茶々丸さんとチャチャゼロさまの三人と一体が激しい攻防を繰り返していた。

主にエヴァが中々遠距離での攻撃を、近距離で茶々丸さんとチャチ

ヤゼロさまがそれぞれネギくんに攻撃を仕掛けていく。

ネギくんも頑張って応戦しようとしているが3対1ではやはり分が悪く、追いつかれて防御が間に合わず攻撃を食らっている。

「付き合え、つてのはネギくんの修行の事が……」

俺はエヴァに付き合え、と言われ付いて来たのだが、そこはエヴァの別荘で（地下室を適当に歩いてるとたまに来れる）付き合えっていうのはネギくんの修行を手伝えとの事だった。

いや……別にがっかりはしてませんけどね……。

「ホラホラ、どうしたばーや!」

「ぐつ……ラス・テルマ・スキル……」

「遅イゼ……」

「ああっ!?!」

エヴァたちに追い込まれ、立ち止まってしまったネギくん。

杖の前に何事か技を出そうとしたようだが、追撃に来ていたチャチヤゼロさまに杖を弾き飛ばされてしまう。

しかし……刃物持つてるチャチャゼロさま、めっさ生き生きしてんだけど……。

超怖い……。

「うう……」

「ホラ、さつさと立て！ 次いくぞ！！」

エヴァもなかなかスパルタだな。

なんか生き生きとして楽しそうだし……。

小さい子供虐めて楽しんでいるガキ大将みたいだぞ？

超イジメカッコ悪い。

「チャチャゼロ！ 茶々丸！ 休ませる暇なく攻め続ける！！」

「ケケケ、セイゼイ逃ゲ続ケロ」

「ハイ、マスター。行きますネギ先生」

ううん……。

茶々丸さんも相変わらず強いなあ。

上に右に下に左に縦横無尽に駆け回っては、ネギくんを攻め立てているし……。

苛烈な攻撃にネギくんはすっかりタジタジだ。

…。

……。

……………。

てか、何でスカートなの！？

ここは暑いから薄着なのは分かりますが……。

健康的な脚線美の付け根から、何かピンク色がチラチラ見えるんですけど！？

見えそうで、見えなくて……。

でもやっぱり見えないかと思ったら、見えたり……。

やべえ……。

超エロい……。

「ん？ おい、桂介！！ オマエもさっさと加われ！ 何しに連れて来たと思っている！」

「いや……ちょ、今無理……」

「ッ！！ 前屈みになってどうしたのですか、桂介さん！？」

心配になったのか茶々丸さんが、駆けよってくれるが……。

茶々丸さん。今近づいちゃダメ……！！

「何処か具合でも悪いのですか？」

「いや、むしろ元気が有り過ぎて困るくらいで……」

「……？」

ああ……。

さっきまで動き続けていた茶々丸さんから彼女の香りが……。

……。

……つっすらと油っぱい臭いがするような……。

……気のせいかな……？

「大丈夫ですか？」

「あ、いや大丈夫……。うん本当……」

いや、本当マジ大丈夫なんで、スルーしてください。

ん？ 何か茶々丸さんのワキ……。

シャツから何か、はみ出て……。

「そうですか……。何かあったらすぐに言ってください」

ピンク色のこれは……。

……ぶらじゃあ？

「きゃっ！？」 あ……桂介さん！？ マスター！ 桂介さんから噴水

のような鼻血が――！」

「なに……！？ 暑さでやられでもしたのか……？ ったく……仕方ないヤツだ」

ピンク色のお花畑が見える……。

目が覚めると、すっかり陽が沈み始めていた。

海から来る潮風が頬を撫でてくるのがとても心地いい。

「ん……？ 起きたか」

「あれ、エヴァ………？」

目を開けると、傍らにはエヴァが立っていた。

見ると、エヴァは手に濡れたミニタオルを持っていた。

「看病しててくれたのか……？」

「ふん……夕食まで暇だから見ててやつただけだ……」

照れるようにそっぽを向くエヴァだが、さっきから当てていてくれたのだろう。

額が湿っているを感じた。

「夕食……？」

「……意識はしっかりしているか？ さっきオマエは日射病で倒れたんだ」

「は？ 日射病……？」

「簡単に言えば陽の暑さにやられた、というコトだ。気分は悪くはないか？ 吐くならそっちの袋にしろ」

まあ、確かに茶々丸さん（主にパンチラやブラチラ）が俺には眩しすぎたが……。

「いや……気分は悪くないどころか絶好調だが……」

「本当か…？」

「それにエヴァを見てたら落ち着いたしな……」

「なっ！？」

エヴァも今は薄着で、スカートもミニだが…。

お子様体系にはトラウマ一歩手前までいったからな……。

エロい気分どころか、恐怖……じゃなかった。

賢者並みに冷静クールになるってモノだ。

「わ、私を見てオマエは落ち着くのか……？（そ、そんなに私のことが良いという事なのだろうか？）」

「ああ……。エヴァが居てくれれば何もいらないよ……（お腹いっぱいでもう何もいらねって感じ……）」

「そ、そうか……（わ、わたしがいれば……い、いいのか……）。
…そ、そこまで言うならし、仕方ない……。こ、ここにいてやる……」

「ああ…ありがとな……（そっぴや腹減ったな……茶々丸さん何処だろ……？）」

その後、いつもより甘えてくるエヴァや、いつもより甲斐甲斐しい茶々丸さんに囲まれて、楽しい夕食となった。

久方ぶりの家族での夕食（茶々丸さん特製チキンカレー）は格別な美味さだった。

第二十四話

いつもより色気60%増し……こんな歌い文句に騙されても俺は

改めて漫画を読みなおすと、色々な発見がありますね。

8巻最初の話なんかスカート姿の茶々丸さんが縦横無尽に動いていて……。気づいたらこんな話を書いていました。後悔はしていない。

あ、ちなみにネギくんは先に帰りました。エヴァと茶々丸さんのみ桂介くんの看病に残ったという設定です。

第二十五話

調子に乗りすぎるのはいけない。身をもって知る事になっても遅

「ホラホラ、避ける避ける！ 避けねば死ぬぞ！！」

「うわっ！ うわわっ！！」

今日も今日とてネギくんの修行だ。

ちなみに今日の修行は、とにかくエヴァの攻撃を避けて、避けて、避けまくる攻撃だ。

これによって、ネギくんの回避力？ はケタ違いに跳ね上がる事だろう。

「ま、マスター！ ほ、本当に死んでしまいます！！」

「人間はそう簡単には死なん！」

「多分！」

「桂介さん！ “多分”なんて言うのやめてください！！」

エヴァが無尽蔵に生み出していく氷の柱を左へ、右へと避けるネギくんだが……。

…なんか楽しそうだな。

「なあなあ、エヴァ…」

「ハッハッハ…ん？ どうした？」

「俺もやってもいいか？」

俺の言葉にエヴァはニンヤリとイイ顔をし、ネギくんが反対に顔が真っ青になった。

「クツクツ…いいだろう。…ヤ「殺レ！」…おいチャチャゼロ…」

「任せろ！ 本気で殺ろう！！」

「……サーー（ネギくんの血の気が引く音）」

まさか本気でやっていいとは…。

俺的には、まだまだだと思ったのだがエヴァが言うのなら問題ないのだろう。

「おい！ 待て、今のは私じゃ……」

「任せろ。殺してもいいという事だろ？」

「いいわけが…」「いいぜ」…オイ！ チャチャマル！！」

「という訳だ。ネギくん…」

「け、桂介さん…？」

「死にたくなかったら死ぬ気で避けてくれな」

ネギま！ 〽外側に立つモノ〽

第二十五話 調子に乗りすぎるのはいけない。身をもって知る事になっても遅いからな

「えっと……なんかゴメンなネギくん…」

「……モコモコ」

うーん結構イケると思ったのだが、さすがに調子に乗りすぎたのか
ネギくんは、全身包帯男みたいになってしまった。

…。
…。
…。
最近エヴァとの訓練が厳しいのか日に日にやつれていってるし…

…反省反省。

……。

…ゴメン。実は結構楽しかったんだよ。

「う、うう……」

「ったく。これじゃ修行にならんだろうが…。仕方ない。今日は切り上げるぞ」

そういうと、エヴァはさっさと自室にこもってしまった。

仕方ないので俺も好きに過ごすとしよう。

さて…。

何しようかな……。

それから数時間後。

俺は茶々丸さんの髪を梳とかす。という至福の時間を過ごしていた。

茶々丸さんの髪はエヴァとは違った、なんだろ……人工的にすら思えるきめ細かさ？　のような髪質なので、触り心地抜群なのだ。

「茶々丸さんの髪ってサラサラでいくら触っても飽きがこないね」

「あ、ありがとうございます……」

茶々丸さんはよほど恥ずかしいのか、耳まで真っ赤だ。

最初はかなり拒否してたからなあ……。

まあ、承諾してくれるまで粘り続けたの俺だけだ。

「もう少し触っていい？」

「え……それは、その………はい………」

ああ…困ったようにオロオロする反応が可愛いなあ。

あと2…いや4時間くらい触ってもいいよね…。

——
ガヤガヤ

ん？

何か騒がしいな…。

「上の方が騒がしいね。何かあったのかな？」

「そうですね。行って確認してきましようか？」

「そうだね。んじゃ、俺も行くよ」

まったく…。

避暑地は静かに過ごす場所だというのに……。

上の広場まで行ってみると、そこには見知らぬ客たちがいた。

…。

…いや、よく見ると知った顔の少女たちだ…。

このかちゃん…と、その他だ。

いちいち説明するのも面倒なので、いつものメンツとだけ言うておこう。

「何してるんだ？」

「あ、お兄い…」

「桂介さん…」

俺は、比較的仲が良い……良かったよね？な筈の、このかちゃんと刹那に事情を聞く事にした。

「実は…」

「かくかくしかじか、なんやで〜」

「お嬢様、それではいくらなんでも……」

「…なるほど。最近ネギくんが干物みたいになってきているから様子を见に来たのか…」

「……何で通じるん？」

刹那が何か不満そうな羨ましそうな顔をしているが、置いておこう。

「それで肝心のネギは何処なの!？」

近くにいたアスナんが俺に聞いてきた。

えっと…ネギくんは確か……。

あ、まだ広場の方で寝てるんじゃないか？

「確か、そっちの広場の方……」

「そっちな!」

あ、走っていったよ。

「キャーーーー!」

あ、悲鳴が上がった。

「何でこんなケガしてんのー！？」

……。

「……逃げるか」

一抹の不安と多少の罪悪感に突き動かされて俺はその場を後にした。

「いや、ほんろすんまへんっしは……（いや、本当スンマセンっした……）」

「い、いえ。もう大丈夫ですから……」

さすがにケガさせて放置したのはマズかったようで、アスナンは当然としてこのかちゃんやデコッ娘などの少女たち全員からオシオキという名の本気ビンタを頂いた。

むっちゃ、顔いてえ…。

歯の根が合わないし……。

「ったく……。本当に何考えてんだか…」

「そんな…アスナさん。桂介さんは桂介さんなりに真剣にボクの為に稽古をつけてくれてたんですよ」

ゴメン、ネギくん。

かなり楽しんでたわ…俺……。

…ま、まあ、とりあえず許してくれたようだ。

しかしアスナんはともかく、このかちゃんとデコっ娘のお友達の、のどかちゃんとやらが怒ると超怖え…。

以後気をつけよう……。

…。

……気を付けられたらいいなあ。

その後、部屋から出てきたエヴァを交えて話をする事となった。

といっても俺はケガした顔を治癒してたんでほとんど聞いてないけどな…。

「——という訳で、私にも教えてください」

「は、はぁ……」

ようやく顔が完治したので、皆の輪に戻ろうとしたらデコっ娘とのどかちゃんが二人でネギくんに迫っていた。

お、二人して迫るなんて大胆だな。

ここからストロベリで胸キュンな物語が始まるのか？

「えっと……まずはこの初心者用の杖を持っていたいてですね…」

「ふむふむ……」

「いいですか、こうです。プラクテビギ・ナル……」

と思ったら手品の練習のようだ。

どうやら手品をネギくんから教えてもらおうとしてるようだ。

「プラクテビギ・ナル……」

「プラクテビギ・ナル！」

二人とも頑張って練習してるようだ。

うんうん…。

俺も最初は大変だったぜ。

「えいつ、てやつ。あーん。出ーへん〜」

「そんなにすぐには出来ませんよ」

「そうそう。俺も最初はなかなか出来なかったからなあ…」

「アレ？　せつちゃんとお兄いは出来るん？」

「はい、私は出来ますよ。【ラン】…」

「キヤーーツ。スゴーイ、せつちゃん」

刹那は言うが早いか、一言で簡単に火をつけた。

お、刹那もなかなかやるな。

「よっし。んじゃ俺も……」

「やらせぬわ！ オマエは金輪際ここで使っなっ！！」

いつの間にか傍にいたエヴァに強制氷漬けで止められた。

…シヨンボリだ。

く今日のデコっ娘く

「——火よ灯れくアールデスカット>……………。うゝん、やはり出ませんね…」

あれから数十回と繰り返して初歩の魔法を繰り返してみたのだが、火が灯る事は一度としてありませんでした…。

でもいいのです。私は遂に念願叶って魔法という現実ではない。フアンタジーという非現実の領域に足を踏み出す事が出来たのですから……。

今はこの事実を喜びましょう…。

「しかし、魔法を扱う、“義務”や“意味”も理解しなければいけないのですよね」

そう、魔法というのはただ懂れるというだけのモノではない。

違う側面から見れば、これは立派な誰かを傷つける暴力なのだから…。

「エヴァンジェリンさんやネギ先生も言っていましたね…。魔法には危険が付き物だと……」

この初步の魔法すら、杖さえあれば簡単に火を生み出せるのだ。

考えたくはないが、悪意ある人間などが持てばいくらでも犯罪に使用する事が出来るだろう。

「だからこそ、秘匿し続けなければいけないのですよね…」

ネギ先生がいうには『魔法をバラした魔法使いにはオコジヨとなつてしまう』との事でした。

魔法という危険な力が世間にバレてしまえば、確かにマズイでしょう。罰があるのは当然といえます。

しかし、いくら何でもオコジヨになるなどと…。

…そんな罰でいいんでしょうか？

「…そこまでは私が考える事ではありませんね…。今は魔法をいう存在を危険だという事さえ分かっていればいいです」

…そういえば、桂介さん。

この場にいる者で、唯一魔法という存在を知らない人。

彼は、魔法の事を手品だと思い続けているようだが…。

…そんな訳がないのに、ネギ先生やエヴァンジェリンさんは自らソレをバラすという事はしないようだ。

例えば、私が魔法の事を桂介さんにバラしたらどうなるのでしょうか？

『桂介さん。私……実は、魔法使いなんです！！』

『……な、なんだって……！？ そいつは驚きだ！ 愛してる！』

… / / / / /。

あ、愛してるって……わ、私は何を考えてるんですか……!?

あ、在り得ないですっ!!

桂介さんなど、ただの数少ない私の男友達でして… / / / / /。

ちょっとバカっぽくて……でも、たまに横顔がカッコ良くて……。

私に幼馴染みみたいにして欲しいとか言い出す変態ですし…。

このかにまで“妹”なんて言わせるし…。

妹………ちょっと……羨ましいです……。

……ッハ!? いえ、けして桂介さんのような男の人に甘えたい訳では無い……はず……です。

……も、もつと良く考えるです!

桂介さんならどちらかと言えば……。

『桂介さん。私………実は、魔法使いなんです!!』

『……ぷ。アハハッ、アハハハハッ!! そ、その歳にもなって魔法使い!! 「私、魔法使いなんです!!」 キリッ ……だって。アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!』

……。

確かに私とてオコジヨになどなりたくありません。

ええ。なりたくありませんとも！！

ですからこれから魔法使いとして自覚を持って行動する為にも、桂介さんにだけは、絶・対・に！！ バレないようにしなければ……。

第二十五話

調子に乗りすぎるのはいけない。身をもって知る事になっても遅

お久しぶりです。相変わらず更新が安定しない作者です。

今回は話自体は出来ていたのですが、気に入らずに何回か消したり、分割で繋げたりしているうちにこんな感じになってしまいました。

最近しずなさん成分が足りなくていけませんね。反省、反省…。

第二十六話 自業自得って言葉知ってるか？ 俺は知らない

「マスター。桂介さん。おやつ準備が出来ましたよ」

「ん、分かった」

「わーい。愛してる茶々丸さん」

「え／＼／＼！？ あ、あの…わ、わた…わたしも……」

「お、おい茶々丸！？ 最近頭から煙が出る回数が増えてるぞ！
大丈夫なのか！？」

今日のおやつはパンプキンケーキです。

ネギま！ 〵外側に立つモノ〵

第二十六話 自業自得って言葉知ってるか？ 俺は知らない

おやつのケーキを一口サイズに切って食べてみた。

中身が黄色という変わった色のケーキだが、味もなんだか一味変わった。

「あれ？ 変わった味だね、このケーキ。なんてケーキなの？」

「あ、そろそろハロウィンなのでパンプキンケーキにしてみました」

「はろういん？ ぱんぷきん…？」

「ハロウィンというのはヨーロッパが発祥のイベントの一つです」

「パンプキンというのはカボチャの事だ」

聞きなれない単語に鸚鵡返しに尋ねると二人が教えてくれた。

何でも……。

オバケになって――

人を襲いながら――

お菓子を食べる――

――というモノらしい……。

なんだかよく分からないが、取り合えずやってみました

「おい……なんで私までこんな格好をしなければいけないのだ……？
しかも吸血鬼とか……舐めとるのか？」

エヴァはヴァンパイアとかいう格好だ。

黒いゴスロリ服を着せてマントを着けたただけだが、思いのほか似合っている。

よし。

ついでに黒いリボンでツインテールにしようじゃないか！

「良く似合っているな。可愛いじゃないか」

「か、可愛い？ ……そ、そうか。可愛いか……」

「ああ、まるで本物みたいだぜ！」

「……なんだ…このやるせなさは……」

…？

喜んだり凹んだり変な奴だな？

「あ、あの…」

「ん？ なにかな茶々丸さん？」

「えっと…私の格好は何でしょうか？」

「ああ、うん…。ネットで可愛い格好したのが見つかったからソレを参考にしてみた」

「そ、そうですか…」

「大丈夫！ 超可愛い！！」

「あ、ありがとうございます／＼」

ちなみに茶々丸さんの格好はウサギ女だ。

ウサギ耳とウサギしっぽを着け、服はレオタードに網タイツというかなりエロ可愛い格好だ。

……また鼻血出そう。

「よし俺もOKだ!」

俺はネジを頭に付けて顔に縫い痕をペンで書けば終わり。

フランケンシュタインとかいう奴だ。

「んで次に人を襲えばいいんだな？」

「は？ あゝ…まあ、それでいいんじゃないか？」

「分かった。行つて来るぜ！」

「お外に出られるのですか？」

「うん。ネギくんとか襲つてくる」

「気をつけて行つてきてくださいね。私は夕飯の準備をしていますので…」

「いつてきまゝす」

「……行つたか。まあ適当に遊んだら帰ってくるだろ」

さて、目に付くヤツから襲つてやるぜ。

女忍者の場合

「襲っちゃうぞ〜?」

「やや? 物の怪の類でござるか? …… って桂介殿ではござらんか」

「けしからんおっぱいは揉んじゃうぞ〜?」

「へ、変態でござる〜!?」

とりあえず、戦闘のドサクサで揉んどいた。

このか&刹那の場合

「いっのかちゃん?」

「はい？ あ、お兄い。いらっしやい。お菓子あるで？」

「襲っちゃうぞ〜〜？」

「あれ〜〜。襲われてまう〜〜」

「な！？ お嬢様！？」

「刹那も一緒に襲っちゃうぜ〜〜〜？」

「……なにをしているのですか？ 桂介さん？」

「襲ってます」

「ア、アハハハ。くすぐったいわ〜。アハハハ」

「このちゃん…楽しそうですね……」

三人で遊んだ。お茶とお菓子を頂いた。

デコっ娘の場合

「お〜い。デコっ娘〜〜」

「デコっ娘はやめてください。……って、何ですか？ その格好…
」？」

「怪物です。襲っちゃうぞ〜〜〜？」

「…具体的に何をするですか？」

「デコっ娘の全身至る所までこの筆でくすぐります」

「とてもイヤです……」

「フリですね。分かります」

「やめるです〜〜〜〜！！！！」

“あのメガネっ娘も大好き！ ハシバミ草入りのジュース”を奪つた。

…にがつ！？

しずなさんの場合

『ごめんください…』

「はい。…け、けけ桂介さんっ!？ ど、どうしたんですか？」

『こんにちは。しずなさん。ハロウィンなので襲いに来ました』

「襲っ!？」

『いただきま〜っす』

「……あつ…ダメ……そんな…イタズラしちゃ……だめですう……」

しずなさんの妄想です。

ネギくんの場合

「ネ〜ギ〜くん」

「あ、桂介さん。どうしたんですか？ その格好？」

「襲っちやうぞ〜?」

「…? あ、もしかしてハロウィンですね？ それでは先程のどかさんに頂いたクッキーを少しあげますね」

「リア充は消毒だ〜〜〜!!!」

「うわぁ~~~~ん!? なんて~~~~?」

とりあえず額に“変態紳士【ネギ味】”って買いとくか…。

やべえ。楽しくなってきた。

このまま学院中を恐怖のズンドコにしてやるぜ!

↓その後のエヴァ家↓

「あのバカ遅いな……」

「マスター」

「茶々丸、どうした?」

「学園長から電話です」

「なに？ ……もしもし…爺か？ どうした？」

「……」

「なにっ！？ あのバカが学園の女子にイタズラをして周ってるだ
と！？」

「……？（…あのバカ？ 桂介さんの事でしょうか？）」

「あゝそれで……そうか…魔法教師どもで処理したか……」

「……！？」

「引き取りに來い？ あゝ……知らん。桂介なんてヤツは私は知ら
ん。適当に牢屋にでもぶち込んで」

「……（オロオロ）」

「ああ、じゃあな。…ったく。何考えてるんだあのバカは……」

「いいのですか？ マスター？」

「放っておけ。甘やかすとつけあがるからな」

「…はい」

こうして桂介は、エヴァが許してくれるまでの約3週間を野宿する

事
と
な
っ
た
。

第二十六話 自業自得って言葉知ってるか？ 俺は知らない（後書き）

ハロウィンが近いので番外っぽくネタを書いてみた。

…どこかでもうネタにされてそうな気がするが、まあ気にしないさ
ね。

…被ってたら別の作者さんゴメンなさい。

第二十七話

自分の好きなモノになら金にいとめをつけない。そんな生き方

「うつつ……ネギ君にそんな過去が…」

「ネギ先生……」

「えっ…?」

擬似的な星空と月の光だけが周囲を照らしている深夜の時間。

塔の頂上にある広場にて涙を流す集団がいた。

「き、聞いてたんですか皆さん!？」

ネギを含めたネギパーティーともいうべき、いつもの面々である少女たちだ。

少女たちはネギの過去を知り、その過去について各々の想いをネギへと告げる。

「ネギ君!! 及ばずながら私もネギ君のお父さん探しに協力するよ!—」

「ウチもー！」

「ワタシも協力するアルよー！ー！」

「協力的で…そんなダメですよ！ エヴァ…^{マスター} 師匠この人たちに何とか言っただけでござい…っ！」

ネギ自身としては、この件は自分自身で何とかしようと思っていた事なのだ。

悪魔とさえ関わりのあったあの事件に、少女たちを関わらせたくないだったので話したのであって、決して自分の生徒というだけの少女たちを巻き込む気はなかった。

だからこそ、あの過去の話をしたのだが……。

逆効果のように、皆して積極的に関わろうとしていた。

彼女らのあまりの勢いに押され、すっかり困ってしまったネギは、師であるエヴァンジェリンに助けを求めたのだが……。

「いや…まあワタシも協力してやらんこともないが……ぐすっ……」

「ちょっと、ちょっとお！！ そうじゃなくて師匠^{マスター}……ッ！！」

しかし彼の助けの矛先が彼女に届く事はなかったのだった……。

「う…ん……。しずなさん、茶々丸さん……。それ以上ちくわは口に
入らないよ……」

ついでに主人公である筈の桂介は、ぐっすりと夢を見るほどに寝入
っていたので、

この話を知る事すらなかったという。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第二十七話　自分の好きなモノになら金にいとめをつけない。そ
んな生き方もアリじゃないかい？

朝起きて朝食を食べる。

今日はいつもの面々であるエヴァや茶々丸さんとは別に、ネギくんやアスナンやこのちゃんやデコッ娘などもあるのでかなり賑やかだ。

「おいし〜、ね、ネギ？」

「あ、はい……」

「本当。コレなんかほっぺが落ちそうやえ？　ネギくん」

「あ、はい……そうですね。とっても美味しいです」

「ネギ先生……おかわりはいらしますか？」

「あ、いただきます……」

賑やかなんだが……。

皆、何かネギくんに優しくないかい？

「ホレ、しっかり食っておけ、ぼーや。帰る前に軽くまた稽古をつけてやるからな……」

「あ、ハイ！　マスター 師匠ー！！」

あのエヴァまでネギくんを気に掛けてるし……。

何かあったのだろうか…？

「ホラ、これアンタ好きだったでしょ？ アタシの分あげるわ」

「え？ い、いえ。アスナさんだってソレ好きでしょう？ ボクはまだ自分の分がありますから……」

「そう？ 別に気にしなくても今食べたいわけじゃないから遠慮しなくてもいいのよ？」

「じゃあ、俺が……」

「アンタは自分の分があるだろうが……っ！」

アスナさんが、いらなそうだったから俺が貰おうとしたのに……。

怒られるなんて理不尽じゃね？

「「「おじゃましましたーっ！……！」」」

ネギくんとその仲間たちが帰ったので俺たちもリビングでのんびりする。

騒がしいのは嫌いではないが、何時間も一緒では疲れるから……。

「お、爺さんからメール来てら……」

「ジジイからか……。どうせロクでもない話だろ」

「えーっと……」

文面を見ると、そこには重大な事が書かれていた。

「……エヴァ。少し出かけるわ」

「ん？ いきなりマジな顔になったな……。……何かあったのか？」

エヴァには悪いが、コレはおいそれと人に話せる類のモノではない。

たとえ大切な妹にだろうと話す訳にはいかない。

「ちょっと……。帰るのは遅くなりそうだと茶々丸さんにも伝えてくれ」

「あ、ああ……。わかった。……よく分からんが伝えておこう……」

「ああ、いつてくる」

こうして俺は学園長室までの道を急ぐ。

外は大雨だが、そんな事はメールの件を考えれば些細な事だ。

途中、裸姿のデコッ娘、のどちゃん。朝倉とかいうカメラっ娘や
くーふえいちちゃんが、液体状の幼女たちに何処かへ連れ去られてい
く姿が見えた。

……が、少女等の裸体写真だけ撮って見なかった事にした。

幼女が液体みたいになって女の子攫ひたっていくってどんなんだよ？

つか、液体状の幼女ってなんだよ……。

新ジャンルにしても新しすぎるだろ……。

「……まあ、雨だし……。裸で出かけたくなる日もあるだろうさ……」

「いやいや、それはいくらなんでも特殊すぎるのではないかな？」

走っていた俺の前を塞ぐように黒尽くめの男が立っていた。

「…誰だ？」

「ハハ、失礼。少しキミに用があつてね…」

声の質や見た目のヒゲからして、40くらいのオッサンのようだが、あいにく生涯出会ってきたオッサンを1人1人覚えていてるほど特殊な性癖は持ち合わせていない。

「俺に…？ 人違いじゃないかい？」

「いやいや…間違いない。キミの事だよ……ホガミケイスケくん」

「…俺はアンタの事を知らないんだがね……」

「まあ、そうだろうね…。私は、ある男に頼まれてキミを調査に來ただけだからね…」

「ある男……？」

俺の事を（性的に）狙っている男だったらどうしようか……。

とりあえず、知り合いに作ってもらった“某マンガの機械を自作してみたシリーズ”の『試作型“魚ーっ 苦しいマシーン”』を試してみる必要があるな……。

「そう……京都で出会った白髪の少年……。そういえば分かるんじゃないかな？」

その言葉に京都での1シーンが連想された。

「…つぐむ!!」

その瞬間、俺の姿はオッサンの眼前へと跳んでいた。

メリメリとオッサンのどてっ腹に拳をめり込ませる。

「あのガキの仲間かぁ……オッサン!!」

いまだ脳内で勝手に再生されるエヴァに突き刺さる石の槍が、酷く癢しゅくに障った。

「くつく……」

「何がおかしい？」

「キミといい先ほど会った少女といい、この場所には面白い子が多い」

「あん？」

「キミとも遊びたいのだが、私の本来の目的は別でね。キミはオマケだ」

「オマケだあ……？」

「ふふ……そういう訳だ。また会おうホガミケイスケくん。次に出会ったら私直々に石にしてから粉々になるまで砕いてあげようではないか」

「待て！」

「はっは、さらばだ——」

その言葉を最後に、ヒゲ面のオッサンの姿が見えなくなる。

白髪のカキ同様に逃げられたせいか、無性にムシャクシャした。

「あのヒゲのオッサン……人の身体じゃなかったな……。何者だ？」

気になるが、次に出会ったら、と態々言い放ったくらいだ。

待っていれば、その内勝手に出てくるだろう。

「爺さんのトコ行くか……」

割り切れない複雑な気持ちのまま、俺はその場を後にする事にしたのだった。

その後、学園長室にて――

「ん？ 来たかのう。遅かったではないか…」

「悪い悪い。何か変なオッサンに絡まれて…。それより早く行くうぜ」

「む、そうじゃのう。では…」

学園長室の奥。

学園長と限られた者にしか分からない秘密の隠し部屋があった。

隠し部屋からは螺旋階段のようになっており、学園の地下へと続いていた。

そこでは、大型の講堂のようになっており、前面に大型のスクリーンがあった。

講堂には既に大勢の人で埋まっている。

学園長室とは別の入り口から来たのだろう。様々な人間が仮面を着け続々と席に着いていた。

勿論、俺と爺さんも学園長室にて既に自分専用の仮面を着けている。

ちなみに、爺さんはキツネの仮面。俺はダンボールで作ったエヴァ仮面だ。

席の9割が埋まった頃、ブザーの音と共に照明が落とされる。

それと同時に、前面にある教壇の上に1人の女性が照らされる。

女性は大仰な仕草で挨拶を述べた。

「えー…ようこそおいでくださいました。紳士淑女の皆様。本日の司会を務めさせていただきます。ミス・パルと申します。…前置きはさておき、さっそく始めましょう」

ミス・パルと名乗った黒髪のマンガ家の神の自画像仮面を着けた少女は、手元の機械を弄る。

すると、前面に展開された大型スクリーンに光が当たり、何かの映像が現れる。

そこに映し出されたのは、高等部の女性の写真だった。

「エントリーナンバー1番。高等部麻帆良ドッジ部所属“黒百合の栄子さ〜んっ!!”」

映し出された写真は、部活の休憩中なのだろう。

ブルマ姿の黒髪の女性が逆さにした蛇口から直接見ずを飲むシーンが写っていた。

「「「おおおおおーっ!!」」」

会場が一気にざわめく。

ただ水を飲んでいるだけのシーンだが、髪をかき上げ、無防備に水を飲む姿。ユニフォームの白シャツが汗に濡れ、薄っすらとブラが透けている。

しかもローアングルからブルマもきっちり写された最高の位置からの写真。

これは熱い戦いが予想された。

「それでは始めましょう！ 600から——！！」

「700！！」

「760！！」

「810！！！！」

次々に上乘せされていく額。

初っ端から熱い男たちの勝負は白熱したモノだった。

「せ、1260！！！！」

「はい！ そこまで。“黒百合の栄子さん写真”は、1260で同じドッジボール部の……じゃなかった。ドッジボール仮面さんが落札されました——！！」

どうやら、勝負に勝ったのは黒い短髪にドッジボールの仮面を着けた少年のようだ。

「ふおっふおっ…。若いのう」

「ああ、それほどあの娘の写真が欲しかったのだろくな」

こうして次々に麻帆良で極秘裏に行われている生写真オークションは進んでいった。

「いやゝ、いい買い物をしたわい」

「まったくだ。俺もついつい熱くなっちゃったぜ」

しずなさんや茶々丸さんの写真を全部買い取ったせいで、今月はかなり苦しくなってしまった。

が、“尻餅をついている茶々丸さん写真”と“鏡とにらめっこしているしずな先生写真”の為ならば……。

後悔などする筈がないっ！！！

「ふおっふおっ…お主、しずなくんに頼めば写真など撮らせてもらえるだろうに…」

「じいさんこそ、このかちゃんの写真買い占めるのはいくら何でも大人気ないぜ？」

「……」

「……」

「ま、しょうがないよな（のじゃよ）…」

こうして俺たちは戦いを終え帰路へとつくのであった。

「お次はー！ー！！ 最近学園で見かける密かな人気者！ー！ 穂守桂介さんのたい焼きを口いっぱいにはお張る”シーンだー！ーっ！」

「100、000よっ！ー！ー！」

「おつとーーーー！！ ふくよかな身体をしたメガネの貴婦人ごと、麻帆良の校章仮面さんの落札！！ 正に瞬札（殺）だーーーー！！」

「……………（桂介さんの写真、桂介さんの写真……………っ！！！！……………ハアハア……………）」

まだまだ麻帆良の地下は眠らないようだ――。

第二十七話

自分の好きなモノになら金にいとめをつけない。そんな生き方

作者は話をその場のノリやら思いついたネタを元に適当に作っております。その為、書き終わった後に大抵、意味不明状態になります……。

「どうしてこうなった……？」

ヘルマンとの会話や戦闘は当初もつと色々考えていたのに……。

この世界は不思議で溢れています。

第二十八話

テストつてのはイヤなもんだが…それで知り合いよりも良い点と

「ふんふふん」

「随分ご機嫌ですね。何を見てるですか？」

俺が別荘で写真の整理をしていたら、デコっ娘が後ろから声を掛けてきた。

「おう、デコっ娘。ちょっと写真の整理をしててな…」

「ですからデコっ娘はやめて下さいと何度言えば——」

「ハハ。わりいわり——幼なじみっぽく呼んでくれたらやめようではないか!!」

二人つきりなのでデコっ娘は幼なじみモードでなければウソだ。

やめません。呼んでくれるまでは…。

「ぐ……この人は……。うう……。その……。け、桂介ちゃんは、写真とか撮るのが……。しゅ、趣味なんですか？」

「ああ。写真は撮るのが好きだぜ、ゆえちゃん」

「……………そ、そうですか（うう…男の人からの“ゆえちゃん”は恥ずかしぎます……）」

いまだ照れている（それがいいんだけどな…）デコっ娘に写真を何枚かせてやる。

そこには、裸で液体少女に攫われていく少女たちが写ったモノが何枚もあった。

「……………こ、コレは、ど、どどこで撮ったです!？」

「ん？ ああそれは雨の日にたまたま外にいたら出くわしてな。そういや、コレなんか体型的にデコっ娘そっくりだな」

「捨てるですー！ー！！ 直ぐに！ 早急に！！ 迅速にいつ！！
！ 急いで、捨てて下さいいいいつ！！！！」

「へ？」

「早くするですうー！ー！ー！っ！！！！」

全部燃やされた……。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第二十八話　　テストってのはイヤなもんだが…それで知り合いよりも良い点とると内心…：…けっこう嬉しかったりするよな？

最近よくエヴァの家でネギの生徒の女子連中をよく見かける。

……。

……まあ、いつもの事だよ。

んでもって、それは大抵いつものメンバーなのだが、最近は手品ではなく勉強目的で集まっているのだという。

なんでも中間テストとかというのが近いらしい。

ならば、ウチの“家主”兼“妹”であるエヴァもテスト前のはずなのだが…。

当の本人は、ソファに寝転んで俺が買ってきたマンガを読んでいた。

「エヴァはテスト勉強しないのか？」

「面倒だ」

一言で終わってしまったが、それでいいのか妹よ…？

はあ…。

少しは勤勉な茶々丸さんやネギくんを見習ってほしいもんだ。

「……まあ、エヴァなら勉強しても大した点数取れないか」

「……あん？」

「エヴァはどつちかといえば頭悪いイメージだしな。……点数悪くても俺は怒らないぞ？」

「そんな訳があるかつ！！　というか、貴様は今まで私をそういう目で見てたのか！？」

「え？」

「不思議そうな顔をするな！！　ああ分かった！　だったら私がどれだけ出来る女か見せてやる！！　全教科、満点とって貴様にほえ面かせてやる！！！」

「はいはい…それならエヴァが良い点とったら、何でも言う事聞い

「やるよ」

「本当だな!! その言葉、確かに聞いたからな!!!!」

まったく、褒美があれば頑張るなんて…

子供かよ……。

「あの…」

「ん？」

くいくいと裾を引かれて見ると、茶々丸さんだった。

「私にも頑張ったらご褒美くれますか？」

恥ずかしそうに上目づかいでこちらを窺ってくる茶々丸さん。

そんな顔したら即決しない奴いないわ…。

「勿論。テスト頑張ってね」

「は、はい! 頑張ります!」

数日後。

テストは終わり、答案用紙が返却された。

「ふふん♪ どうだ？ この程度楽勝だ」

エヴァがどうだ？と自信満々に答案用紙を見せてくる。

そこには赤文字で“100点”と書かれていた。

そういえば、夜遅くまで自分の部屋で頑張ってたもんな。

机に突っ伏してそのまま寝てたほどののだ。

……寝顔が可愛かったなあ。

よし。ここは褒めてやるべきだろう。

「ごちそうさま——じゃなかった。スゴイじゃないかエヴァ。大したもんだ」

「?? ま、まあ、当然だっ!」

訝しみながらも、鼻高々に笑うエヴァ。

それに比べて…。

「……………」

茶々丸さんの結果はあまり良い物ではなかったようだ。

「茶々丸…さん?」

「……………」
「のですが」

「へ?」

「……………」
「残念です。もう少しで満点だったのですが…」

見てみると、90点後半の数字がゴロゴロと転がっていた。

……………。

……普通にスゴイのでは？

「ご褒美……欲しかったです…」

膝を抱えてうずくまる茶々丸さん。

無表情だが、何だかとても残念そうだ…。

「褒美……ねえ…」

「そうだ！ 自分で“何でも言う事を聞く”と言ったのだ。当然、約束は果たしてもらうからな！」

あ——。我ながら面倒くさい約束をしたものだ。

茶々丸さんならともかくこの小娘が何を言うか、分かったモノではない。

「あ——まあ、言った手前聞いてやるけどよお…」

「ふふん。当然だ！ さて…キサマに何をやらせようか…」

エヴァはぶつぶつと、あ——でもない、こ——でもないと、考えているが、締まらない顔の様子から、碌ろくでもない考えなのは間違いないよ

うだ。

当分浸ったままだろうし……。

……。

……放っておくか。

「……」

「…ねえ、茶々丸さん？」

落ち込んだままの茶々丸さんに声をかける。

「…なんででしょうか？」

「茶々丸さんだって充分頑張ったと思う。だから俺は、茶々丸さんにもご褒美をあげたいな」

「え……でも、私は…」

「全教科90点以上なんだから、茶々丸さんだって充分にご褒美を貰う権利があるって。気にしないで何でも言ってくれ」

「……桂介さん。……では、その……早速……よろしいでしょうか？」

「お？ なになに？ 何でも言つてよ。茶々丸さんなら多少の無茶くらい叶えちゃうよ」

もじもじと、両手の人差し指をクルクルさせながら、上目遣いで茶々丸さんはこう言つた。

「その……ギュッ」と、抱きしめてくれませんか？」

あつちにチラチラ、こっちにチラチラ…。

視線の定まらないままモジモジとする茶々丸さんは、誰よりもカワイイ女の子でした…。

ネギは、今日もカモと共にエヴァンジェリン家へと出向いていた。

玄関まで来て家の呼び鈴を押すものの、反応がなかった。

「あれ…？ 師匠^{マスター}——！ ……居ないのかな？」

「呼び鈴を押しても反応がないって事は地下っスかね？」

普段なら従者である茶々丸が出迎えてくれるのだが……。

今日は呼び鈴を押しても何の反応もなかった。

「そうかもしれないね。鍵は開いているみたいだし……お邪魔させてもらおうか？ カモくん」

「そうしようぜアニキ」

修行に来る事自体は最近では毎日の事なので、特に気にせず一人と一匹は家へお邪魔させてもらう事にした。

中に入ると、リビングにて人の話す声が聞こえたので、エヴァンジェリン達か？と、覗いてみるネー人と一匹。

案の定、そこにはエヴァと茶々丸と桂介の三人がいた。

「師匠^{マスター}。呼び鈴を押しても反応がなかったのですけど——何しているんですか？」

ネギが声を掛けるものの、エヴァ家の面々には聞こえていないよう

だった。

「ぶつぶつ……（やはりここは“エヴァ様”と、さま付けで呼ばせるか……。いや、ここは意表をついて“お姉さま”というのも面白いかもしれない……ふふ……私にかしずく、桂介の姿……ふつぶつぶ……テンションが上がってきたぞおっ！）」

「桂介さん……（……あつたかい。それに、胸の主機関部辺りがドキキします……）」

「茶々丸さん……（やべえっ！！ 良い匂いっ！ 柔らかいっ！！ 耳ハムハムしてえっ！！！ でも隠れてるから出来ねえっ！！！）」

「

ピンクの空間を作っている抱き合う二人こと、茶々丸と桂介。その傍らで黒い笑みを浮かべる黒い幼女こと、エヴァンジェリン。

そこには異質な空間が出来上がっていた。

「^{マスター}師匠？ 桂介さん？ 茶々丸さん？ ……無視しないでくださいっ！っ！」

「なんというか、まったく聞こえてねえな、こりゃ……」

そんな様子のエヴァ達に、健気に声を掛け続けるネギと呆れるオコシヨ。

これにより、本日の修行は3時間ばかり遅れる事となった。

第二十八話

テストってのはイヤなもんだが…それで知り合いよりも良い点といます。作者です。

最近アクセス数がやたら増えて下さって、内心いつもニヤニヤしています。本当に有り難うございます。

作者は最近風邪をひいてリアルに死んでおりましたが、皆さまはどのような事がないように気をつけてくださいね。

それではまた次回お会いしましょう。

第二十九話 幽霊ってのはオバケの事なんだな（違います）…。初めて知った

あの熱い戦い（写真オークション）から、少し月日が流れた。

その間にも色々とおった。

ネギくんと一緒にキャバクラを疑似体験したり――

ネギくんとアスナさんがベッドで性的一歩手前……つか、もうアウト
！！ ってくらい抱き合ってたので対抗してこのかちゃんと刹那に
迫ったら、ハンマー食らったり、斬られたり――

エヴァに泣かされて、ネギくんと一緒に酒に溺れていたら四葉さん
に二人共励まされたり――

まあ、そんな他愛もない日々を送ってたよ。

……。

……。

……。

……振り返ってみると、少し所ではないくらい異常な気もするが。

まあ…麻帆良では、よくある事である。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第二十九話　幽霊つてのはオバケの事なんだな（違います）…。
初めて知ったぜ…

さて、学園祭も近づいた麻帆良学園では、最近仮装して登校する生徒が多々いるらしい。

何でも学園祭の宣伝効果もかねているのだとか。

たかが学生のお祭りだろ？　と、最初はタ力をくぐっていたのだが、毎年一万人もの死傷者を出すほどに白熱するらしい（コタローとか

いうネギくんの知り合いに教えてもらった）。

それを裏付けるような結構大がかりな施設なども設営されていたり、
どうやらそんじょそこらの学園祭とは比べ物にならないモノらしい。

そんな麻帆良学園の学園祭。

その好奇心甘美な響きに誘われて、ネギくんのクラス麻帆良学園中等部に侵入してみ
る事にした。

まあ、男がいたら驚かれるかもしれないが、「仮装です!」と言
きってしまったえ何とでもなるだろう。

早速やってみた。

最初にタカミチに出会った。

「桂介くん? ここは中等部の校舎なんだけど…なんでいるんだい
?」

「あら? 何を言ってるザマスか、タカミチ? ミーは桂介なんて
男ではないザマスよ」

「いや…何処から見ても桂介くん本人なんだけど……」

「これは仮装ザマス」

「…ちなみにその口調は何なんだい？」

「女の子なんだから語尾に“ザマス”をつけるのが普通ザマス」

「……授業のジャマだけはしないようにね」

「了解ザマス」

タカミチはバカだな。まったくバレなかったぜ。

ネギくんにも出会った。

「け、桂介さん！？ 何でココにいるんですか？」

「け、桂介さん！？ じゃないザマス。 エヴァンジェリン、ザマスッ……」

「え？ エヴァンジェリンさん？」

「そうザマス。エヴァがしている桂介の仮装ザマス」

「えっと……（何か事情でもあるのかな？）」

（ちなみにエヴァはこの時、遅刻していて教室にはいなかった）

「……（ここは話を合わせておこう）……エヴァンジェリンさんなら、可笑しくはないですね」

「……（ええ……っ!?）」「」

「今日は遅刻していませんですね。立派です、えっと……エヴァンジェリンさん!」

「当然ザマス」

ちよろいもんである。

さて、そんな訳でここ数日は皆と一緒に授業に出たり、学園祭の準備を手伝ったりした。

最初こそ色んな娘に疑われたが、ネギくんの知り合いだと言ったら何とかだった。

それに、学園祭の準備は重労働なので戦力になるなら問題ないらしい。

「桂介さん。この机教室まで運んでくれる？」

「ういっい。任されたザマス」

「あ、小銭がないです。…桂介さん。ジュース代を貸してほしいのですが…」

「任せろザマス。デコっ娘」

「……当分返さないです」

「桂介さん！ 少し取材してもいいかな？」

「ん？ 視力なら両方とも7.0あるザマスよ？」

「いや、別に視力はどうでも…って、凄じゃんっ！！」

「おい桂介。購買でパンを買ってこい」

「茶々丸さんの分なら買ってくるザマスが、エヴァの分は“。っちやんイカ”×昼飯代分。に、なるザマスよ？」

「私への挑戦と受け取った」

と、順調に楽しい日々を送っていた。

しかし、得てして物事というのは最後まで上手くいかないモノである。

準備も順調に進んでいたある日。

事件は起きたのである――。

それは、ある朝の麻帆良スポーツの新聞の見出しが切っ掛けだった。

「幽霊？」

「はいです。あれは本物だと思うです、何とゆーか、リアリティがありました」

デコッ娘言っには、この教室に最近になって幽霊が出た。というモノだった。

「幽霊…ザマスか？」

「ウチの教室に出るウワサは昔からあったんよ。ここ数年は全然なかったんやけど、最近になってまた出たんやて！！」

と、このかちゃんも幽霊の話を補足してくれる。

実際、その証拠写真と思われるモノが麻帆良スポーツの新聞に堂々と写っていた。

「こうなったら、除霊しかないよ！ ネギくん！！」

「だ、大丈夫かしら…？ 祟られたりとか……」

「案外怖がりさんだね、いいinchよ。大丈夫、大丈夫」

クラスではすっかり除霊ムードだ。

ネギくんは一人思案顔で悩んでおり、デコっ娘とこのかちゃんはそっちへ行ってしまう。

「結局、幽霊とはなんだザマス？」

そのせいで、俺の疑問に答えてくれる人はいなかった。

さて、というわけで深夜の中等部3 - A教室である。

クラスメイトの少女たちも銃とか装備している。

あげく“相坂さよ” 除霊討伐隊なんて名乗っておりすっかり除霊する気満々である。

俺はよく分からなかったので興味はなかったのだが、このかちゃんやデコっ娘に無理矢理連れてこられた。

差し入れの肉まんでも食べながら気長に見物でもしていよう。

ネギくんと朝倉の話では“相坂さよ”というのはこの教室に昔から通っていた霊で、名簿にも彼女の名前が載っているらしい。

そこから、まずは霊と交信できるという、のどか嬢がコンタクトをとっていた。

「相坂さん…あなたが出てきた目的はなんですかー？」

皆が固唾を呑んで見守る中、のどか嬢は“相坂さよ”に語り掛ける。

しかしその直後、目に見えるほどに顔が真っ青になった。

「悪霊です！ やっぱりこの人悪霊ですうーっ！！」

その言葉に生徒一同に動揺が走る。

「総員！ 戦闘配置ーっ！！」

「防御円陣！！」

生徒たちは怯え、固まるように集まる。

それを察知したように、今度はいきなり周囲の机やら椅子が、ひとりでに宙に浮きだした。

「ポルターガイストだーっ！！」

悲鳴と共に生徒たちはちりぢりに逃げ出す。

中にはマジ泣きで怖がっている者もいる。

そんな生徒たちを嘲笑うかのように窓に血で書かれた文字『ごかいデス』が浮かんでいたり、正に阿鼻叫喚とっていい惨状だ。

「泣き顔いただき、っと……」

その中、ひたすら少女たちの泣き顔やら逃げ惑う姿を写真に撮っていた俺こと桂介だが…。

そんな俺にも悪霊とやらは牙を剥いた。

いきなり意識を持って行かれそうになったのである。

「う、ごうごかい……ごかいデス……く、クキヤキヤキヤッ！
！」

幸いそれほど強制力がある訳ではないので対抗はできるのだが、口やら身体の一部が勝手に動かされてしまう。

そこで、無理矢理対抗しようとしたら最後に変な言葉が出てしまった。

「お兄いーーッ！？」

「桂介さんが乗っ取られたですーッ！……！」

そんな俺の状態にいち早く気づいてくれたこのかちゃんやデコっ娘だが、その一言で俺に向けて3-A科学班超一味が開発した除霊銃が向けられる。

「アカン！　ウチらも取り殺されるーーーー！？」

「撃てーーーーー撃ちまくれーーーーっ！..」

除霊銃の先から一直線に俺へとビームが奔る。

「クキヤ？」

そして俺は意識を失ったのだった。

数分後。

次に目が覚めると刹那が超ミニスカートで、色黒美人の太ももが御馳走だった。

「お兄い！」

「あ、桂介さん！　気がつきましたか？」

傍には膝枕でフニフニのこのかちゃんに、おデコがライトに反射し

て眩しいデコっ娘がいた。

「…ここが、俺の目指した理想郷か」

悲惨な目にあつたが、割かし役得だった。

「今日のしずなさん」

さて、我らのアイドルことしずなさんは、桂介がイイ笑顔を浮かべている頃、ノートパソコンの画面いっぱいにスケジュールを書き込んでいた。

それは数日後に迫った文化祭の予定表である。

「一日目に誘おうにも、職員の見回りやら設備の確認があるし……。
二日目は夜に進行状況の見直し……。三日目は――」

しかしながら、彼女も麻帆良の教師であるため文化祭当日は分刻みでかなりスケジュールが埋まってしまうのだった。

その為、どこか空いている場所はないか？ と、帰ってからずっとパソコンの画面と、にらめっこしているのである。

「もぉ〜。どうしたらいいのよ〜〜〜!？」

予定が空いてなければ桂介を誘う事が出来ない。

それは彼女にとって死活問題であった。

気持ちばかりが焦る。

彼女が焦るのは理由があった。

「せっかく交換日記で『ぜひ、一緒に回りましょうね』って約束したのに!!! このままじゃ、他の女に桂介さんを取られてしまうわ」

人気者（しずなさん視点の発言）の桂介の事だ。

早めに約束を取り付けねば、彼を狙ったその他の女が彼に言い寄らないとも言えない。

いや、むしろ絶対来るだろう。

「……もう教師やめようかしら」

虚ろな目でそんな事を言い出す彼女を止める人間が、残念ながらこの場にはいなかった。

「ハッ！！　ダメよ！　桂介さんが女教師萌えだったら、取り返しのつかない事になってしまうわ！！」

最近思考がぶっ飛んでいるような彼女だが、愛は盲目なのである。

そう、愛で目云々より先に思考が飛んでいるだけである。

……これも一つの愛の形であった。

第二十九話

幽霊ってのはオバケの事なんだな（違います）…。

初めて知った

お久しぶりです。いつも以上にカオスな文でお送りします、作者です。

色々と文を見直そうとしてたら、結局いつも通りでいつも以上にカオスになってしまいました。

また後日見直して訂正するでしょうが、更新に間が空いているので投稿だけしておこうと情けない作者なんです。

色々とコメして頂いたりしてるのに、一向に良い方向に動けない自分。自分の力量が情けないですね…。
なんか本当、色々ゴメンなさいです。

第三十話 茶々丸さんって目からビーム出せるんだな……カッコイイぜ

我が家の天使こと茶々丸さん。

家事全般を司る女神的な立ち位置の彼女がいなければ基本、食事は店屋物になる。

俺自身も料理は出来るのだが、ちくわ料理しか作れないのでエヴァに不評だ。

その為、やはり茶々丸さんがいなければ困るというわけだ。

そんな茶々丸さんだが、学祭準備中は“超包子”というお店で手伝いをしているので、朝早くから家を出ている。

それでは朝食はどうするんだろう？ と最初は思ったのだが、エヴァと一緒に俺達も超包子へと出向き、そこで朝食を頂くのだ。

エヴァが絶賛するだけあり、超包子は手ごろな値段で美味しい中華を頂けるお店だ。

屋台なのでそこまで大がかりなモノは頼めないが、それでも点心などを中心に色々な種類がある。

店が、学祭準備中の名物と呼ばれているのも頷けるモノだった。

「なあなあエヴァ……」

「ふー。ふーん？ どうした？」

鮭のお粥を食べるエヴァ。

熱い熱いと言って、ふーふーしてる姿はなかなか愛らしい。

「チャイナドレスの茶々丸さんをガン見してるあの団体潰してくるわ」

「オマエは写真も撮っていただろうに。…店に迷惑の掛からない場所で行えよ」

その日、真帆良の路地裏で数十人ほどの重症者がでた。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第三十話　茶々丸さんって目からビーム出せるんだな……カッコイイぜ

最近の学園は、当然といえば当然だが学園祭の話題で持ち切りだ。

やれ、恋が成就する。

やれ、世界樹には魔力がある。

やれ告白すると成功する。などその話はどれもこれも信憑性のない迷信が大半だが…。

思春期真つただ中の彼女たちには、この手の恋愛事は注目の的だった。

皆が皆、誰に告白するのかと、からかい合っている子たちもいた。

正直、噂は当てにならないが告白すると必ず成功するというのなら、やってみるのも面白いかもしれん。

そんな事を考えながら学園の道を歩いていると、近くで爆発があった。

『アラート！！ アラート！！ 緊急事態発生！！ 試作機実験隊が――』

どうやら、何かしら事件が起こったようだ。

野次馬根性で向かってみると、そこにはネギくんと刹那にアスナんとメガネがいた。

せつかなので、俺の特技の一つ。“<蝶ネクライなんか知らないんです>（ただの声真似）”でこのかちゃんのフリを試みる。

あまりの巧さにみんな驚いていた。

「おゝい、ネギくくくん。せつちゃくくん。アスナくくく」

「あ、桂介さん」

「桂介さん！ お嬢様のマネしないでくださいっ！！」

「というか、今、声激似だったんだけど…」

「あ、さつき茶々丸のフォルダにいた人だ」

ん？ フォルダ？

なんの事だ？

俺の特技はともかく、爆発の事情を聞いてみると茶々丸さんが関係している、というのだ。

どうやら茶々丸さんが目からビームでロケットパンチのハカセがやられたらしい。

意味が分かん。

「よく分かんが、茶々丸さんが困っているんだな。どうすればいい？」

茶々丸さんが困っているとすれば、放っておく訳にはいかない。

俺は判断を当事者と思われるメガネ少女こと、ハカセというあだ名の女の子に聞く事にした。

「はい。茶々丸の右胸を押してください」

「押して——つまり、触っていいのか!？」

茶々丸さんの胸に、合法的に触れるだ!？

そんな事したら、俺の理性とか身体が色々と18歳未満には見せられない事になるぞ？

「……スイマセン。もうちょっと考えさせてもらえますか？」

何か知らんが、拒否された。

おっと、鼻血が垂れてきた。ティッシュ、ティッシュ……。

刹那とアスナんがこちらをジト目で見てくるが気にしません。

「やっぱりネギ先生にお願いしてもいいですか？」

「ええっ！？　ボクですか？」

ネギくんが困惑するが、ネギくんが触ったら俺はネギくんの命の保証をしないぞ。

「ネギくん」

「なんですか？」

「茶々丸さんの胸に触ったら、キサマの。。。を
するから」
して□□

「ヒッ！？　ごめんなさい！　絶対しません！！」

さて、邪魔モノ黙らせたので俺は走って茶々丸さんへと向かわなければ。

「うおおおおおっ！！ 茶々丸さんの胸は俺が貰ったーーーーっ！！！」

「まったく…帰りが遅いので様子を見に来てみれば……」

「スミマセン。マスター」

「くっそ！ エヴァめ……。もう少しだったのに……」

結局、駆けつけたエヴァが茶々丸さんを止めたので茶々丸さんの胸に触れる事は出来なかった。

俺は『茶々丸さ〜ん』と、声を掛けながら胸に触ろうとしたのだが、声を掛ける度に目が合った茶々丸さんから出る謎のレーザーが、直撃して焼かれたので掠^{かす}る事もできなかった。

おかげで服も身体もボロボロだ。

「最初このバカが、“茶々丸に襲いかかる。↓レーザーに焼かれる。↓復活。↓また襲っては焼かれる”を延々と繰り返ししている姿を見た時はタチの悪いゾンビ映画か何かと思ったぞ。だいたい、何故そこまで茶々丸に固執していたのだ？」

「失礼な。俺はただ…」

「ただ…なんだ？」

「茶々丸さんの胸が触りたかったただけだ!!」

「……そのまま死んでおけばよかったのにな」

そんなゴミを見るような目で見なくてもいいのに……。

「あの、桂介さん……その…ゴメンなさい」

「ん？ なにが？」

「その…たくさん攻撃をしてしまっ…服が……」

彼女が言うように、俺の姿はレーザーに晒され過ぎて上半身は裸。下半身も申し訳程度の布が巻かれているだけである。

虚空から服を出そうとしたのだが、入っていたのは透明のレインコートだけだった。

何も着ていないよりマシかと思ったのだが、後から来たタカミチ達教師陣に別件で連行されかけたので、ネギくんからスーツの上着を借りて事なきを得たのだ。

体格が違い過ぎるので、ネギくんのスーツが破れそうだが……。

ま、家までなら何とかなるだろう。

「大丈夫だよ。それよりも」

「……」

「茶々丸さんが無事でよかった」

「桂介さん……」

うん。まあ、茶々丸さんの暴走？状態も治ったようだし、大丈夫ではないが大丈夫という事にしておこう。

問題は、一張羅が無くなったので明日着る服をどうするかだが……。

ま、エヴァのでも借りればなんとかなるだろ

翌日

「おい！ やめろ！！ 私の服を着るなっ！！！！ 変態か貴様ッ！
？」

「大丈夫大丈夫。 着ればなんとか…」

ビリッ

「「あ………」」

壁にめり込むほどのパンチが入った。

「今日のハカセ」

「いやゝゴメンネ、茶々丸。昨日はちょっとやりすぎちゃったよ」

「い、いえ。私の方こそ工学部棟に多大な損害を……………」

最近、動力部が痛むという不可思議な現象が出るといって茶々丸を昨日メンテナンスに呼んだのだが、大変なことになった。

まさか茶々丸が暴走するなんてね。

それに、茶々丸があの子の男の人の事を考えて“恋”のような感情を目覚めさせたかもしれないなんて…今でもちよつと信じられない。

それでも生みの親でもある私としては、この“恋”がどんな形になるにせよ、愛しいこの娘を応援したいと思っているのも確かだった。

「でも……………安心してねゝ茶々丸。あの男の子のことは私だけの秘密にしとくから」

「あ…ハイ。ハカセ……………」

あの胸に対する執念にはさすがに引いたが……。まあ…悪い人ではない……。よね？

「むむつ。そうだ茶々丸！！ 昨日のおわびじゃないけど、今度はちゃんとオシャレとか出来るように改善してあげるよ」

「オシャレ……ですか？」

「うん。放熱対策の改善とかならすぐできるから大丈夫」

「はい……ありがとうございます」

「間接も隠せるようにして——」

「ありがとうございます……」

「人肌そつくりの人口スキンも作ってあげるね。あとは——」

「ありがとうございます……」

あはは。

茶々丸自身はあんまり乗り気ではなさそうだけど……。

どうせならあの男の人がメロメロになるくらいに、色々してあげたものだ。

今度、超さんとも相談してみようかな。

「あとは……そうだね。えっちにやこともできるようにしてあげようか？」

「是非お願いします」

「へ？ あの…兵装とか減っちゃうけど……」

「大丈夫です」

「えと、あの……（半分冗談だったんだけど）……」

「優先度最大でお願いします」

どうしよう……。

余計な事、言っちゃったかな？

第三十話 茶々丸さんって目からビーム出せるんだな……カッコイイぜ（後書き）

何かグダグダ考えるのはやっぱりいけませんね。

最近は色々いらぬ事まで書いては消してを繰り返しております。

読みにくくならないように軽く書くこうとして必要な文まで相変わらず消しているような気がする作者です。

最近は本をまったく読まなくなりましたね。また色々と呼んで表現方法とかキャラクター描写とか勉強したいですね。

……。

読むだけで終わりそうですが……。

第三十一話

怖いモノ見たさで見えてしまっただけで後悔する。分かっているけど止

真帆良祭まで7日をきったある日。

学内では今日も、学祭の準備に明け暮れる学生たちが大勢賑わっていた。

そんな中、俺は今日もクラスの準備に駆り出されている。

進行状況が思った以上に進んでいないので、このままでは学祭初日までには、とてもではないが終わらないだろう。

これは、明日の休日も返上して準備をしなければいけないな、と思っていたのだが――

このかちゃんの誘いによって、その予定は先送りになった。

「お兄いー。明日デートしよー」

「おお！ このかにデートに誘われた。これは遂に俺もリア充の仲間入りか！？」

「せっちゃんも一緒やえー」

「…………デート？」

「うん。デートやー」

よく分からないが、今どきの少年少女たちでは、2対1とかもおかしくはないのだろうか？

ネギま！　　〽外側に立つモノ〽

第三十一話　　怖いモノ見たさで見ってしまった後で後悔する。分かっているけど止められないのが人間なんですよ

『こちらは真帆良祭実行委員会です。真帆良祭まであと、6日をきりました。安全第一！　事故、ケガのないよう準備に励み、今年の学園祭も死者0で成功させましょう——』

“真帆良祭実行委員会”と、大きく書かれた空に浮かぶ巨大な飛行船から、アナウンスが流れる。

死者0は当然のハズなのに、出るかもしれない、と匂わせるこのアナウンスは何気に怖いモノがあるな…。

さて、本日も天気の良い日に恵まれました。

デートらしいデートを経験した事もない自分こと、桂介さんなんです…。

なんか…今回も結局デートっぽい事は出来なさそうです。

「うーん…さすがオジ様好きなアスナやな――」

「……………」

このかと一緒に電柱に隠れながら、ネギくん（成長期で急激に成長したらしい）とアスナんの二人のイチャついてる場面を覗いていきます。

「あんなカッコええネギ君横にいて、ピクリともせーへんなんて。ウチやったらメロメロになってまうかもー」

「おっ、お嬢様!？」

「くくく（そっかあ？ 結構動揺してるように見えたけど）」

あと傍らには、このかの発言に驚く刹那と、ほくそ笑んでいるオコシヨもいる。

刹那はともかく、なんでこのオコジヨも一緒にいるんだろう……。

「姉さんカードを——」

「はいな。カモ君」

一人と一匹は楽しそうにしているが、状況の分からない俺は一人蚊帳の外だ。

仕方ないので、刹那に事情を聞く事にした。

「なあ刹那」

「はい？」

「何で俺たちは、こんな所でネギくんたちを覗いているんだ？」

「えっと…実は、ですね——」

かくかくしかじか。（事情を説明中）

なるほどアスナがタカミチ相手にねえ……。

俺としては別にアスナさんが、誰と付き合おうともまったく興味ないので心底どうでもいいんだよねあ……。

「はあ……。せっかく刹那ともデートできるつつから楽しみにしてたのにな……」

「へ？ わ、わたし相手で、ですか!？」

このかと白ネズミは、ノリノリで覗いているし――

ネギくんは何故かアスナんに殴られているし――

どうしようかな……？

「あ、あの？」

「ん？ どうかした刹那？」

「け、桂介さんは、私なんかが相手でも楽しみにしてくれたのですか？」

「？ よく分からんが刹那の事は好きだし、当然楽しみにしてたぞ？」

「す、好き!？ そ、そんな……こと……」

あれ？ 刹那が顔だけにとどまらず耳まで真っ赤になってるんだけど、大丈夫か？

「おいおい刹那。大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ？」

心配になってオデコ触ったり、頬をつまんだりしてみる。

触ったら火傷するかわかせるくらい真っ赤なので本気で心配になってくる。

……頬がプニプニしてて柔らかい。

「ひゃ、ひゃい！？ そんなウチ、まだ……こ、心の準備が……。それにウチには、このちゃんが……。あ、でも別に桂介さんが嫌いな訳じゃなくて……。むしろ好きですし……。って、そういう意味ではなくてですね！？ あ、でもそういう可能性もなきにしもあらずというか――」

ものっそい早口でマシンガントークを連発する刹那。

こんな面白い刹那を見たのは初めてだ。

あ……目がグルグル回りだした。

「お嬢様かて、桂介さんの事を少なからず想っていると思いますし……。むしろウチは、お嬢様と二人一緒の方が……。あれ？ いや、それはちよつと色々おかしい……。あ、や、えつと……。そう！ それにウチとしましても桂介さんの事は知らない方が多いですから、最初やはり友達くらいから始めるのがいいかと思う訳で——

—————きゅ—————」

湯気まで噴きだし——あ、倒れた。

「ちょ、おい！ 刹那？ せつつな〜ちゃ〜ん？」

「う〜ん……」

……。

仕方ない、刹那を担いでこのか達に付いていくか……。

その後、ネギくんとアスナんは、何だかんだ言いながらも良い雰囲気です。デートを楽しんでいた。

ゲームをしてはお互いで勝敗を競ったり、屋台でリンゴ飴やらお面を見ては笑いあっている。

俺達も、ただ見てるだけでは何なので、たこ焼きやら、飲み物やら飲み食いしながら、見守っていた。

「ほら、このか。飲み物」

「ありがとー。あ、ホラホラお兄い。見てみ。アスナも子供やなー。メッチャ楽しそーにしてるえ」

「そうだな。普通にデート楽しんでるし…結構お似合いじゃないか？ あの二人」

俺としてはネギくんたちみたいに遊びたいのが本音だが、このか自身はけっこう楽しんでるみたいなので、俺も結局最後まで付き合う事にした。

「うーん……」

刹那もこのまま放っておけないので終始背中に担ぎっぱなしだ。

「おとと、いけねえ。これじゃ予行演習にならねえじゃねえか」

デートの目的を忘れていた事に気付いたオコジヨが、ネギくんは何事を伝える。

携帯も何も持っていないが、小型のトランシーバーでも付けているのかね？

疑問には思ったが、特に追求はしないでいると、何時の間にか向こうでは、ネギくんが金魚すくいをしているアスナを背後から抱きしめている形をとっていた。

「ちょ、ちよつと何すんのよ——」

「あの、落ち着いて、これも予行演習の一部だそうです——」

「むほほっ。いい感じだな。よし兄貴、次は右手を姐さんの腰に回して——」

照れる二人を見ながら、更に過激な要求していくオコジヨ。

すると、腰に手を回そうとして、ネギくんの右手が偶然アスナの胸を掴んでしまった。

「きゃあっ——!!」

「わわ、スイマセ——」

慌てる二人を見ながら、ロクな事にならないだろうな、と俺はオコジヨから距離をとる事にした。

案の定、調子に乗ったオコジヨは更に要求をエスカレートさせていく。

結果的に、アスナさんがネギくんに馬乗りになってパンツを見せる事となっていた。

……正直、何でこうなったのか、見ていたのにまったく理解できなかった。

「何すんのよばかー！ツ！！」

アスナの鉄拳を受けて、ネギくんが頭を軸にコマのように回転しながら迫ってくる。

当然、その延長上にいた俺達もアスナさんとネギくんに見つかり、オコジヨはアスナさんにボコボコにされるのだった。

さすがにネギくんたちを尾けていた事はバレて怒られたが、オコジヨに全責任を押しつけたので、俺達は仕切り直して3人でデートをする事にした。

ボロ雑巾になったオコジヨを放置して、とりあえず俺たちは移動していた。

ちようと刹那が目を覚めたのだが、まだ若干フラついている様子なので何処かで一休みをしようという提案から休める場所を探していたのだ。

「結局見つかってしまったんですね」

「まあ、タイミング的にも丁度いいだろ。後は二人で頑張るだろうし」

「あはは。まあ流石にウチもやり過ぎたわー。アスナには帰ってから改めて謝らなアカンなー」

3人で今日の事を話しながら、このかお勧めのカフェへと向かう。

そこは最近話題になっている世界樹前にあるオシャレで美味しいと評判の場所らしい。

「ここやえー。最近話題になっている世界樹前オシャレなカフェや」

このかの案内で話題のカフェへと到着する。

見た目もきれいで、確かに雰囲気の良い店だった。

これで食事も美味しいというのだから話題に上がるのも分かるというものだ。

「アレ？ あそこにいるの、ネギくんたちや」

このかの指さした方向を見ると、確かに前方でネギくんとアスナンの後ろ姿が見えた。

どうやら、別れたつもりで偶然同じ場所に向かっていたらしい。

「まさか同じ場所に向かっていたとはな…」

「そうですね。どうしましょうか——あれ？ 何か様子がおかしくありません？」

さすがにこのタイミングで二人に会うのは気まずいので、場所を変えようとしたが、様子がおかしいのが気になり、結局向かう事にした。

すると、いきなりアスナが背後を向き、一直線に走りだす。

「え！？ アスナさん！？」

ネギくんも状況についていけず、置いてけぼりにされるが、すぐさまアスナを追って走りだす。

「あ、アスナーー！」

「アスナさん！？」

このかと刹那もアスナを心配して追いかけて行っただ。

俺も追いかけるべきが悩んだが、それよりも、アスナが何を見たのかが気になった。

やめておけばいいのに、俺は怖いモノみたさでその光景を覗いてしまった。

後で後悔するとも知らずに――。

「ん？ タカミチと――しずな、さん？」

そこには、仲睦まじく談笑する二人の姿があった。

「今日のこのかちゃん」

「なんやーよう分からんけどー」

「——うまくいったみたいですね」

状況がいまいち分からないまま、カフェで様子がおかしかったアスナを追いかけたのだが、

目の前、世界樹広場の前で話し合うネギくんとアスナの様子を見て、大丈夫そうだと安堵する。

薬の効果がきれて、子供に戻ったネギくんに、吹っ切れた様子で話すアスナを後にして、せっちゃんとカフェへ戻る。

お兄いが着いてきてなかったのだが、カフェにまだいるだろうか？

「しかし、結局何があったのでしょうか？」

「うーん…お兄いが調べてくれると助かるんやけど……」

せつちゃんと来た道を引き返す。その途中で、さっき寄った神社の屋台が見えた。

自然、今日の出来事が思い出されて、お兄いに対して少し罪悪感を感じた。

結局、今日はデートでお兄いを誘ったのに、ウチはアスナやネギくんに構ってばかりで、お兄いには退屈だったのではないだろうか？

「せつちゃん……」

「はい？」

「せつちゃんは、お兄いの事どう思う？」

「どうって……えっと、それは……」

「ウチは、お兄いの事好きやえー」

「……………」

「優しいし、面白い人やー。なにより、お兄いといえると楽しいしな
ー」

「…お嬢様」

「えへへ…。改めて言うと、照れくさいなー。まだ恋とか、そういつた感情かどうかは自身ないんやけどなー」

「それは…」

「だからもつと桂介さんの事が分かるようになりたいわー。せつちゃんはどうかなー？」

「わ、私は……………私も少なくとも、嫌いではありません」

赤くなりながらそう言っせつちゃんが可愛くて、ウチは自然とせつちゃんの手を繋いでいた。

「…お嬢様？」

「えへへー。言い難い事聞いてゴメンなー。でもせつちゃんも桂介さんの事が好きって聞けてよかったわー」

「え、あ、いや……………私は別に好きとまでは……………」

「学祭も、桂介さん誘って3人で一緒に周ろうなー」

「あ、……………ハイ。お嬢様」

今度こそ、お兄いとせっちゃん、ウチの3人で一緒に楽しめるようにデートをしよう。

そしてこの気持ち、アスナが高畑先生に感じている感情と同じなのか、確かめよう。

夕暮れに染まる道を二人で歩きながら、ウチはそんな事を考えていた。

「あれー？　なんか人だかりが出来てるー」

「ハイ。何の集まりでしょうね？」

カフェに着くと、カフェの前で人が集まっていた。

そこには「お客さん！　お客さーん！！　大丈夫ですかー！！？」と叫んでいる店員さんと、

店員さんに肩を揺すられながらも、ぐったりと虚ろな目で真っ白になった――

—— 桂介さんがいた。

「お兄いッ!？」

「桂介さんッ!？」

お兄いに近づいてみるものの、色素が全て落ちたように真っ白になつて目も虚ろ。

呆けたように口も開きっぱなしで、まるで抜け殻のようだった。

アスナといい、お兄いといい、このカフェにいったい何があつたのか？

終始訳のわからないまま、抜け殻のお兄いと、謎だけが残つたのだつた。

第三十一話

怖いモノ見たさで見えてしまって後で後悔する。分かっているも止

12月になりましたね。風邪を引かないように皆さん気をつけて下さいね。作者です。

さてさて、学祭を誰と過ごそうかで悩んでいます。登場人物の多いキャラたち……というか、作者の好きなキャラがどうせ皆出てくるでしょう。

ペースは相も変わらず遅いままグダグダと続きます。

ではでは次回で、また会いましょう。

第三十二話

落ちては登って落ちては登って、人は成長を繰り返してくんだぜ

学園祭までついに3日をきった。

迫る学園祭向けて、準備も最後の追い込みへと迫っているクラスもあれば、未だ準備が終わらずに泣きをみているクラスもある。

中等部3 - A。ネギくんのクラスは残念ながら後者の方だったが…。

「ダメだー！ ヤバイよ、間に合わないよーっ！！」

クラスの女生徒は、大半が目回しながら遅々としか進まない準備に泣きをみせていた。

「まったく…。やってられんな」

「あ、マスター」

そんな右往左往しているクラスの様子を横目に、エヴァンジェリンはため息をついてエスケープをし始める。

面倒な学園祭の準備作業を手伝わされる前に、逃げる事にしたのだ。

「おっと…?」

そこで教室から出ようとして、何かが足に引っ掛かった。

それは、白い人間だった。

頭のとっぺんから足の先まで、真っ白になった人間の抜け殻。

いつも我が家で見ている男の顔。

そう、それは穂守桂介の抜け殻だった。

「…2・3日前からずっとこの調子だな」

「ハイ。一体なにがあったのでしょうか？」

ある日を境に前触れもなく、いきなり死んだように無気力になったのだ。

何か痛烈なショックでも受けたのか？ と最初こそ心配にもなったが、一日中死んだ抜け殻のような状態でいてはこっちの気も滅入るというモノだ。

いい加減なんとかしたいが、殴っても、凍らせても何の反応もない。

今では、すっかり茶々丸に介護される人形といった感じだ。

「あ、そろそろお昼ご飯ですね。……さあ、桂介さん。ご飯の時間ですよ」

「……」

「ハイ、あーん……」

「……あー」

「ああ、こぼれていますよ。お口を拭きますね」

「……先割れスプーンで食べさせて貰っている大の男というのは、かなりシニールだな」

「さて、食事が済みましたので、今こそトイレに——」

「待て待て、そのバカロボット！ 頭から煙を出しながらトイレに連れて行くこうとするんじゃない」

「……ハア、ハア——？ マスター、何か問題がありましたか？」

「…オマエが息を荒げている事自体、異常な問題なんだが……」

最近の茶々丸はネジが十本ほど外れたくらい、ぶっ飛んでいた。

ネギま！　　〱外側に立つモノ〱

第三十二話　落ちては登って落ちては登って、人は成長を繰り返してくんだぜ

「……………はあ」

桂介は、エヴァに連れられて屋上へと連れてこられた。

梅雨も終わって過ごしやすくなってきたこの季節に吹く風は、とても気持ちがいい。

ここからなら、学園の様子が軽く一望できる。

学園内は、数日後に控えた学園祭の影響で、何処も彼処も騒がしい様子だ。

…リア充は滅べばいいのに。

動くのが億劫で、立っているのも面倒くさい。

そう思ったら横になるしかない。

「はあ……」

ため息を一つ吐いて、屋上の隅でゴロリと横になる。

茶々丸さんは、俺の側に座り。

エヴァは少し離れた所に立っていた。

二人に心配をかける気はなかったが、同時にそれも、どうでもいいかと感じてもいた。

「まったく……。どうせオマエの事だ。ロクでもない事で悩んでいるんだろう?」

エヴァがこつちを見ずに言う。

事情を知らないとは言え、勝手に決め付けられるのは心外だ。

「……うるへー」

「ふん、オマエは能天気にくせに、喜怒哀楽が激しい。すぐにヘソを曲げるし……まるでガキだな」

コイツはケンカを売っているんだろうか?

「あんな――」

「だからな…オマエがそんな調子では、私まで調子が狂う」

「――うん？」

エヴァは顔を真っ赤にしながら、こちらに近づいてくる。

小さい身体のエヴァだが、寝転がっている俺から見れば、大きく感じる。

それは何処となく、怒っているようで…。

何処となく、仕方ない奴、と微笑んでいるような、そんな不思議な迫力があつた。

「いいか、一度しか言わんぞ！ …さ、ささ…さつさと元気になれっ！ “兄”がそんな様子では、妹としては落ち着かん…だろうがっ」

エヴァは指を突き付けながら、それだけを言い放つとプイッと、そっぽを向いてしまう。

それは何処か、気まぐれで気高い猫のようだった。

「エヴァ……」

「ふん……」

声を掛けるものの、エヴァは知った事かといわんばかりに鼻を鳴らすだけ。

こんな所も猫っぽい。

これ以上何か言っても、何の反応も返ってこないと感じた俺は、立ち上がり、エヴァの側まで行く。

そしてエヴァを抱えて屋上の隅で胡坐をかく。

エヴァを背後から抱き締めるようにして座り。エヴァの頭の上に顎を乗せ、同じ方向を見ている状態だ。

視線こそ合わないものの、同じ方向を同じような高さで見ているので、同じ風景が見えた。

「……あんな、エヴァ」

「……」

「……ありがとな」

ポツリと、呟くような声でお礼の言葉を述べる。

照れくささで、小さい声になってしまったが、この距離なら問題なくエヴァにも聞こえたはずだ。

「……ん」

案の上。聞こえた様子のエヴァが、少しだけ反応を返してくれた。

それだけの他愛もないやり取り。

だけどそれが、とても心地よかった。

エヴァと会話をして幾分か気分が上がった俺はその後、一心不乱に準備を手伝う事にした。

カラ元気程度の元気が出せるようになったのだから、マシになったであろう。

教室にいと、このかちゃんや刹那が心配して声を掛けてくれた。

「お兄いー、元気出たん？」

「大丈夫ですか？」

「ありがとな、二人とも。大丈夫いつもの桂介さんですたい」

何気ない気遣いだったが、2人の優しさが嬉しかった。

苦笑しながら元気だとアピールする。

二人はそんな俺の様子に、ホッとしたように安堵すると、二人で話だす。

「よかったー。せつかくの学園祭なのに、桂介さんがあんな調子じや誘いにくいもんない」

「はい。これで気兼ねなく誘えますね」

「何の話だ？」

何やら、二人で照れくさそうに笑いあうと、二人で微笑みながら尋ねてきた。

「桂介さんって、学祭の時はどうするんー？」

「ん？ んー…まあ、ブラブラと学祭を見て回るつもりだけど…」

「それはよかった。では、お嬢様…」

「うん。ね、ね、桂介さん。よかったらウチらと一緒に学祭回らんかなー？」

「ウチら？ という事は刹那とも？」

「は、ハイ。私とお嬢様、あと桂介さんの三人で、その…で、でで…“でーと”を…」

でーと？

……これはデートという事だよな？

でも三人で出かけるという事は、またネギくんたちでも尾^つけるのだから？

「あはは、前回のデートのやり直しもしたかったしなー。今度はホシマのデートやえ」

表情に出ていたのだろうか？

このかは真っ赤になって、そう否定した。

刹那も自分から、デートなどと言った…。

これは、

つまり、

……今度こそ期待できるという事なのでは？

「あはは…ど、どうかな？」

「どう…でしょうか？」

二人して不安そうに、こちらを窺ってくる。

二人の普段見れない、不安そうなモジモジとした仕草は胸にくるモノがあった。

「あ、はい…。大変よろしいのではないのでしょうか？」

やべ、緊張してて変な言葉が出てしまった。

しかしこのか達は、そんなのは何処吹く風、と喜んでくれた。

「ホンマ！？ やった！ 約束、約束したえ？」

「嬉しいです。約束ですよ桂介さん」

こうして俺の学祭に一つの予定が埋まったのだった。

「今日のしずなさん」

「マズイ…マズイです。どうしましょう、どうしましょう？ もう、学祭まで時間がないなんて……」

学祭まで数日をきっていたが、事ここに至って、しずなさんは目的の彼である桂介さんを未だ、学祭に誘う事が出来ないでいた。

「うう……。なんとか最終日に少しでも時間を空ける事が出来ても、桂介さんがいなければ意味がないのに」

どうしても、桂介の前に出て「一緒に学園祭を回りませんか？」の一言が言えないのだった。

泣きながら、頭を抱えるしずなさん。

どうしてこうなったのか？

ここ数日を振り返ってみる。

彼女が、学祭準備中のここ数日間をずっと無駄にしていたのか？と問われれば、それは否だ。

学祭の最終日を開けてもらう為に、教師間の見回りなどの時間調整をしたり――

桂介の好みや嗜好を聞き出す為に、祝日を高畑先生と過ごしたり――

新しい、オニユウの下着（黒の紐でレース仕様。ちょっと……いや、かなり冒険した）を買ったり――

桂介との学祭デートを妄想したり――

……とにかく忙しかったのだ。

「私の意気地なし〜（泣）」

布団を被って丸くなるしずなさん。

しかし、泣けども、丸くならうとも、誰も助けてはくれない。

お腹が空いてきたので、晩御飯の準備をしようとして、ベッドから抜け出てくると、ベッドの横が視界に映る。

正確には机の上にある一冊のノートが目に入った。

それは、彼との日々を綴った大切な宝物。

二人で行っている、“交換日記”に使っているノートだったのだ

「そうよ！ 日記に書いて誘えばいいじゃない！〜」

天才的な閃きに感じた。

早速、学園祭の事について書き込む。

あーでもない。

こーでもない。

延々と文を考えるだけで、数時間を要するしずなさん。

彼に少しでも、良い目で見られるようにと試行錯誤を繰り返す。

やがて、日付が変わりそうになった頃。

彼女は遂にペンを置いた。

「出来た……」

書いては消してを繰り返した為に、ページが若干ヨレてしまっているが、今は書き終えた達成感でいっぱいだった。

「これで…、これで私と桂介さんは……」

彼女の脳裏では、

←
学祭でデート。

←
世界樹前で告白。

←
遂に結ばれる二人。

←
教会で皆に祝福される結婚式。

←
白い家で幸せな家庭を築いていく二人。

←
傍らには、二人の愛の結晶が……。

と、トントンの拍子で物語が展開していた。

「えへへ。私、しあわせですう〜」

机で安らかな顔で寝ている傍ら当の交換日記には、一文字も筆が進んでいない。

彼女が、ソレが夢オチだった、と気づかないまま。

夜は更けていくのだった。

第三十二話

落ちては登って落ちては登って、人は成長を繰り返してくんだぜ

お久しぶりです、作者登場。

えゝ…不定期更新なのは今さらですが、今月はホラ、ね。年末だしね…。

…。

スイマセン。連載はやめませんが出すのに時間かかると思います。どうしようもない作者ですが、長い目で見てやってくださいね。

第三十三話

“おにぎり” っ て塩だけでも十分旨いよな？

学園祭まで、あと2日――

ネギくんのクラス。3 - A にて

「え〜ん。終わらないよ〜」

深夜の真帆良学園の中等部。

クラスの出し物であるお化け屋敷の準備が、相も変わらず終わらない3 - Aのクラス。

あげく、今日は泊まりがけで作業するクラスの姿があつた。

「アレ？ そっいえば、唯一の男手、もとい桂介さんは？」

ふとした朝倉の質問に答えたのは無機質な声。

僕らの天使茶々丸さんだつた。

「桂介さんなら……はあ、はあ………ここ……です」

無機質……な筈だが、所々で怪しい息をしている茶々丸の声だった。
声の方向を見ると、そこには茶々丸の膝枕で寝ている桂介の姿があった。

茶々丸は桂介の寝顔を、距離5？ほどの位置でマジマジと眺めていた。

「10時過ぎた頃にはもう、グッスリとお休みで——」

「子供か——ッ!!」

「バカ朝倉！ 声が大きいつて!？」

翌日——

学園祭まで、あと1日——

学園長室にて

ネギくんたちが広間で、世界樹の話を聞く数時間前。

学園長室には、二人の男の姿がいた。

一人は学園の教師である、タカミチ。

そしてもう一人は、学園の首領^ドこと学園長だった

「…それでは他の魔法先生&生徒たちを世界樹前の広場に集めてくれ。高畑くん」

「分かりました学園長。しかし、周期的には来年のはずなんですけどね…」

「そうじゃのう。異常気象の影響か。はたまた別の何かなのか…。まあ、深く考えても分からんわい。その辺りは後日調査するとして、問題は——」

「世界樹伝説にまつわる、告白の阻止。ですね」

二人して、頭を抱える問題。

それは学祭中に起こる、世界樹の魔力貯まりが原因だった。

「さすがに放っておく事もできんからのう…」

「告白が成功してしまう。普段ならば祝福されてもいいのですが、ね」

世界樹の魔力貯まりから起こる、告白の絶対成功。呪いといってもいい人の人生を縛ってしまう危険性のある異常事態。

正義の魔法使いである彼らは、この事態を重要視していた。

「うむ。強制力のないモノならば、当人同士の問題じゃ。なんの問題もないわい」

「一応、魔法使いだけでなく依頼という形で他の筋からも応援をとります」

「うむ。魔法使いである他の先生や生徒を信じないわけではないが、妥当な判断じゃろ」

そこで、この二人はこの事態を乗り切る為に、学園に所属する他の魔法先生や魔法生徒を総動員して事に当たるつもりでいた。

それ以外にも、魔法に関わりのある生徒たちも何人か手伝ってもらった。

しかし、彼らからしても判断に付きにくい人物が一人いた。

「ところで、桂介くんをどうするかのう」

「ええ…。彼も魔法について少なからず関わっている人間なのですが――」

そう、彼こと穂守桂介である。

エヴァンジェリンという魔法界でもビツクネームの彼女の下で暮らしている彼だ。

魔法という現象に関わってきたのも一度や二度ではないのだが…。

「魔法を何故か一向に信じていませんからねえ」

「ワシなんか一度、初級の火を灯す呪文で殺されかけたぞ」

そう、彼は魔法という事をこれっぽちも信じていなかった。

おかげで、彼は魔法に関わっていながら、いまだに一般人（特例）として扱われているのである。

「世界樹の事を伝えるべきかのう？」

「伝えたら伝えたで、面白半分に試そうとする気がするのですが…」

「……………（木乃香にやられたら困るのう）」

「……………（面白半分でエヴァにでも試そうだなあ）」

「「黙っておこうかのう（おきましよう）」」

かくして、桂介抜き（放置ともいう）で世界樹伝説を阻止する計画が進められていた。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第三十三話　　“おにぎり”って塩だけでも十分旨いよな？

「はく面倒だな…」

ぐちぐちと文句を言いながら歩く人間がひとり。

穂守桂介その人である。

彼は今図書館島へと向かっていた。

目的は借りていた本の返却である。

マンガやら小説やら図鑑やらエロ本やら、様々な本を小脇に抱えた袋に入れていた。

本を読む事が少なからず嫌いではない彼にとって、本の種類を問わずに借りる事はよくあった。

「お姉さん。返却お願いしまゝす」

「ハイハイ（いつもこんな大量に何処から見つけてくるのかしら？）」

いつも通りに返却を済ませ、下にいるロープの変態（紳士）さんに挨拶でもしておこうと地下へと向かう。

その途中で桂介は空腹感に襲われた。

だが、生憎とここ図書館島の地下に食事処がある訳がなかった。

上に戻るか、下の変態ロープ男の家で漁るか悩んでいる所で、知り合いと出会った。

「あれ？ 桂介さん」

「んお？ デコッ娘か？」

見ると、それは探検装備に身を包んだデコッ娘こと、片瀬夕映だった。

「…何でここにいるのかとか、何でそんな装備でここまで来れるのか、とか色々聞きたい点はあるのですが——」

「それよりも何か食い物持ってない？」

「人の話は最後まで聞いてください。…まあいいです。私もそろそろ休憩がてら、食事にしようと思っていました。桂介さんも食べますか？」

「おお。さすがだ夕映っち。愛してる！！」

「愛！？——ば、馬鹿な事言ってるんじゃないですう！！」

起こるデコッ娘もとい、夕映っちと少し歩いて休めそうな所へ向かう。

幸い、少し進んだ所に程良く開けた場所に出た。

そこに、夕映つちが準備していたビニールシートを広げ、彼女お手製のおにぎり弁当を頂く。

「おおー!!」

「おにぎりしかないですけど、どうぞです」

見た目は不ぞろいだが、白米と黒い海苔のおにぎりがとても美味しそうに見えた。

さっそく一つ貰い、食べてみる。

中身はない、ただの塩おにぎりだ。

「ど、どうですか?」

「うまああああいつ!」

腹が減っていた事もあって、ただのおにぎりとはいえ、とても美味しく感じる。

味噌汁が欲しくなってきた辺り、大分この世界に染まってきた自覚が出てくる。

「うまい、うまい——」

「ああ、そんなにガツつかなくても多めに作ってあるですから――」

「むぐっ!？」

「…お約束みたいに喉に詰まらせましたね」

夕映っちから渡されたのは彼女の好きな不思議ドリンク。

今回は“何処ぞの学園都市で売っているかもしれないきなこ練乳”だった。

…とりあえず、おにぎりには合わなかった。

「ふいゝ食った食った。ごっそうさん」

「…遭難した時の為に持ってた非常食まで全部食べるとはいけませんでした」

お腹も満たされ、気分的にも満たされた俺と夕映っちは二人でそのままに戻る事とした。

夕映っちも装備が心許なくなつたとの事だ。

「しかし、学祭前で忙しいのになんで夕映っちはこんなトコにいたんだ？」

「学祭前だからです。学祭が始まってからは忙しくなりますから息抜きに来ただけです」

「ふん。そういや、夕映っちもどっか部活とか入っていたんだっけ？」

「え？ ええ。図書館探検部や児童文学研究会。他にも哲学研なんかにも参加していますけど…」

「…それ全部出るのか？」

「？ 可笑しな事を聞きますね。当然部の一員として全て参加します。当然でしょう」

このチビッ娘は見た目に反してバイタリティの塊な気がする。

「そ、そか…もし良かったら一緒に何処か回ろうと思ったけど忙しそうだな…」

「へ？」

「夕映っちも友達だしな、一緒に回りたかったんだが——」

このデコッ娘は物知りだし、色々と話していて面白い。

それに友達として一緒に回ってみてもいいなと思って誘ってみたのだが、どうやら難しそうである。

「ちょ、ちょちょちょっと待つです。別に、ひ、暇がない訳ではないです」

俺の思惑とは違い、夕映っちは顔を真っ赤にしながら否定した。

「ん？ そうなんか？」

「ハイです！ だから、別に桂介さんが誘ってくださるなら、予定を空けておく事もやぶさかではない訳でして…」

「そか。なら一緒に学祭回ろうぜ」

「は、ハイです…」

どうやら、問題なく回る事ができそうだ。

物知り夕映っちと一緒にこのか達とデートする前の下見をしておくのも悪くはない。

それに、この娘と一緒になら少なくとも退屈とは縁がなくなるだろう。

こうして、俺の予定がまた一つ埋まったのだった。

帰宅後、俺は着物姿の茶々丸さんに遭遇した。

「あれ？ 茶々丸さん。なんで着物着てるの？」

「あ、桂介さん。おかえりなさい。コレは茶道部の衣装なんです」

そういつて少し恥ずかしそうに着物を見せてくれた。

どうやら茶道部で着る着物を選んでいたようだ。他にも様々な柄の着物があった。

「この着物を着ていこうと思うのですが、どうでしょう？ 可笑しくはないですか？」

「全然！ 超似合ってる！ 髪型も可愛い！！ 帯引っ張りたい！！」

実際、着物姿の茶々丸さんも可愛かった。

普段とは違う後ろで束ねた髪型のせいか、雰囲気も少し違うように感じる。

ようするに超可愛いのである。

「よかった。あの、桂介さんがお望みならば、帯を引いて頂いても構いませんよ」

「マジ!? 一度やってみたかったんだよね」

茶々丸さんの許しが出たので、早速実践しようと帯の先を手取る。

茶々丸さんには、両手を上げてもらい回る準備は万端である。

「それじゃ、いくよ」

「はい。何時でも構いません」

「コホン。えっと——よいではないか、よいではないか——」

「あーれーお代官さま。お許しを——」

少し感情が乗っていない茶々丸さんのセリフだが、帯がずれていくにつれ、茶々丸さんがつけている着物もずれていく。

チラチラと覗く太ももの裾や、胸元がエロちつくで否応なしに興奮する。

「うへへ。よいではないか」

「あゝれ」

つつい調子に乗って勢いをつけて回してしまうが、茶々丸さんのバランス感覚は見事なモノで、その回転っぷりは女子フィギュアオリンピック選手顔負けだった。

「何をやってるんだ貴様らは……」

「ケケケ。馬鹿ガ居ルゼ」

いつの間にか、それを見ていたエヴァとチャチャゼロさまに呆れられた。

「これで、ラストーーツ!!」

「きゃっ」

帯の最後まで引つ張ると、クルクルと回っていた茶々丸さんは、そのまま床にшина垂れるように倒れた。

ギリギリまで捲くられた裾からのチラリズムから、俺の理性はもう残っていません。

「そ、それじゃこのまま先まで…」

「させるか馬鹿」

更に襲いかかるうにも、エヴァの拳が今日も轟いた。

当然、その先をする事は出来ずに、俺はそのまま晩御飯まで壁に埋まったまま過ごす事となった。

く今日のしずなさんく

真帆良祭前日となったしずなさんは、もうなりふり構っていられない事に気付いた。

（もうこうなったら直接桂介さんに誘いをかけるしかないわっ！！）

萌える——失礼。燃える瞳でネギくんのクラスである3 - Aの教室を睨むしずなさん。

今日の彼女は一味違う迫力があつた。

何処が違ふのかと聞かれれば、今日の勝負下着は透ける感じのエロっつい下着だった。

「（今の私に怖いモノ何かないもん！ 絶対に桂介さんを誘って見せるわ！！）」

廊下で拳を握るしずなさん。

彼女を知る人間が見れば、いつもと違う彼女の様子に誰もが道を開けるだろう。

凛々しいしずなさんも大変魅力的である。

「（いざ！）失礼します」

「あれ？ しずな先生。どうかしましたか？」

彼女を出迎えたのはネギくんだった。

他にも生徒が多数いたが、今は出し物の準備で忙しいらしく挨拶をした後、皆各自の準備へと戻っていく。

自然、ネギくんが対応する事となった。

「あ、ネギ先生。少し聞きたい事があるのですが…」

「はい。なんでしょうか？」

「桂介さんは何処にいるか御存じではありませんか？」

「えっと…たしか、桂介さんなら今日は図書館島に本を返しに行くと言っていたような——」

「図書館島ですね。私は急用を思い出したのでこれで失礼します」

言うが早いのか、しずなさんは最後までネギくんの言葉に耳を聞く事なくその場からいなくなる。

「でも、後で手伝いに戻ってきてくれるはずですが——ってアレ？」

しずな先生？」

「ちはゝ。手伝いに来たよ——って、ネギくんどうした？ いきなり人が消えたみたいな顔してるぜ」

タイミング悪く桂介が教室に入ってくる。

彼はネギくんの不自然な様子不思議な様子だった。

「あ、桂介さん。さっきまでここに……」

「むー？ この愛おしいミントの香りは……しずなさんの匂い！！
キサマ、さっきまで此処にしずなさんがいただろ！？ 答えろ！！」

「むぐえっ！！ く、苦しいです……桂介さん……」

残り香で分かるはずはないのだが、桂介は此処にしずなさんがいたと確信した様子でネギくんに過剰なまでに詰め寄る。

首を絞められた桂介に、ネギくんは当然答える事はできない。

しかし、それに気付かず桂介は更にネギくんの首を絞め続ける。

「さっさと答えねば、貴様の髪がこのバリカンで凄い事になる」

「ぶくぶく……」

虚空から何故か出てきたバリカンが凄いい音を立てている。

その様子に、さすがに教室にいた面々が止めようと動き出した。

「なにしてんのよっ!! アンタは!!!!」

というより、アスナが止めた。

その勢いで桂介は、窓を突き破り外へと飛んでいき、ネギくんは泡を吹いて倒れる。

「まったく…この忙しい時に遊んでんじゃないわよ!!」

このかに看病されて戻ってきた桂介は、結局何も聞き出せずに作業に従事するしかなかった。

一方。

桂介を追って学園をさまよい続けたしずなさんだが――

「うえ~~~~ん…刀子~~~~」

「うあ!?! ちょ、ちょっとしずな。今何時だと思ってるの!?!」

遂に桂介を見つける事叶わずに、友人である刀子に泣きついたのだが…。

深夜に突然訪問された刀子としては堪ったモノではなかったという。

第三十三話

“おにぎり” っ て塩だけでも十分旨いよな？（後書き）

えっと…。お久しぶりです。覚えていますか？ 作者です。

大分間が空いてしまい大変申し訳ありませんでした。

なんとか去年中に学祭前まで終わらせようとしたのですが、結局ズルズルと遊んだりMHP3してたり、やる。ブログ見てたりしてる内にこんなになってしまいました。

そのせいか、夕映っちの口調が翠。石みたいになったりしてしまったりと、筆が進まない進まない（笑）。

…。

スイマセン。本気で反省しています。

今回は来週中に出せるよう努力します。

…うん。嘘にならないよう頑張りますので、もう少しお付き合いくださいませ。

第三十四話 前夜祭と焼き鳥

麻帆良学園中等部の校舎から一人の男性が出てくる。

仮装にしてはぶっ飛んだ格好。

麻帆良の中等部の制服を着用している姿は、とても見ていられたモノではない。

元々、女顔という訳でもないし、歳も学生と言う程は若くない。

そんな男が制服姿で歩く姿は通報されてもなんら可笑しくはないのだが……。

学園祭というお祭り騒ぎのおかげか、不信に思われても通報はされなかった。

さて、そんな彼こと桂介だが、視線は定まらず歩く姿もフラフラ。制服など何処もヨレヨレで、見苦しい格好が更に見苦しくなっていた。

それは、彼がクラスの出し物の準備（無理矢理起こされた後、無理矢理手伝わされた）という名の強制労働を延々と手伝ったからだっ

た。

「アカン……。眠過ぎてフラフラする……」

一睡もしていないため足元が覚束ずにフラフラしてしまうものの、家へと向けてなんとか歩き続けている状態だった。

そんな彼の後方。

何かが、こちらへと迫ってきた。

それは、金属に何かぶつかったかのような鈍い音だった。

ガインッ！！

音の方向を見ると、道の横にあったガードレールがひしゃげている。

音は続けてあちこちで同じように響く。

音を追って見てみると、それは道の所々で断続的に起こり、まるで移動しているようだった。

「な、なんだ？」

その音に、ビビりながら音の方向を見ているが、段々と音は離れてく。

眠気で下がり始めた瞼では捉えることが出来ずに結局そのまま見失ってしまう。

しかし、その見ていた方向から何かがヒラヒラと舞ってくるではないか。

自然とそれをキャッチすると、それはフード突きのコートのようなものだ。

「誰のだ？」

周囲を見渡すが、コートの持ち主はいないようだ。

「どうするよコレ……ん？………かすかに少女の甘い香りがする……」

大方、この学生やら教師やらが身につけていたコートだろう。

ひとしきり匂いを堪能しながら、桂介は帰路へと着いた。

そのコートの製作者が天才、超鈴音である事も知らずに――

ネギま！　く外側に立つモノく

第三十四話　前夜祭と焼き鳥

真帆良祭前日の夜。

世界樹の周辺で前夜祭が行われていた。

桂介も、ひと眠りした後前夜祭へと顔を出していた。

「いらつしゃい、そこのお兄さん。焼き鳥はどうですか？」
「焼き鳥？」

ジュウジュウと音をたててお肉とタレの良い匂いをただよわせている屋台だ。

しかし匂いがきついのだろうか？

女の子ばかりのこの一帯では、あまり繁盛していないようだ。

「んじゃ——えっと……つくね、に胸肉。ばんじり、つてのと、なんこつ？とすなぎも。あと、ねぎま、とかいうどっかの子供みたいな名前の、それぞれ10本ずつおくれ」

「ありがとうございま〜っす。ちょっと待ってて下さいね〜」

焼き鳥の出店で適当に買いこんで適当な場所でお腹を膨らます。

花火も見ながら、焼き鳥を堪能する。

小さな肉を串で刺して焼いただけの料理なのに、どれも美味しい。

一口噛むだけで肉汁が溢れるモノもあれば、癖がなくさっぱりしたモノ。コリコリとした歯触りとお肉のを楽しめるモノまで様々な美味しさに頬が自然と緩む。

ねぎまとか、ネギいらなくね？と思わないでもないが、ネギくんをばっちにするのも可哀相なので全部たいらげた。

「むちゃくちゃ美味しい。こんな贅沢していいのかね〜？」

出来たての焼き鳥に舌鼓を打っていると、人混みの中で愛しい女性の姿を見た。

しずなさんだ。

その後ろ姿に声を掛けようと自然に足が向かう。

あの日、カフェでタカミチと二人でいる姿を目撃してから碌に会話をしていない。

なんとなく気まずい事もあって、声が掛けられなかったのだ。

だが、学祭の本番も明日なのだ。

桂介としてはなんとしても、しずなさんと一緒に学祭を回りたかった。

意を決して近づこうとするが、ふと動いた時に感じた自分の口臭が気になった。

「しず——（待て、待て。焼き鳥の匂いをプンプンさせてしずなさんと話すのか？ ソレはちよっとマズイ——）」

しかし、出かかった桂介の声を聞き逃すしずなさんではなかった。

「今、桂介さんの声が……」

キョロキョロと周囲を見渡すしずなさん。

しかし、桂介からしたら、これは困った事態だった。

「あ、桂介さん」

「……ッ！！（こんな匂いをさせてたらしずなさんに嫌われる！！）」

「

そう思った桂介は、しずなさんと目が会うや否や、一目散に逃げ出した。

「えっ？……あ……………桂介さん——」

差し出そうとして、空中で止まったしずなさんの手と、悲しそうなその声が耳に残った。

エヴァが自分の家に帰ってくると、部屋の明かりはまだ点いていない。

まだ誰も帰っていないのだろう。

そう思っていた。

しかし、電気を点けると、隅で一人体育座りをしている男がいた。しかも嗚咽を流しながらだ。

「ひっく……………ぐず……………」

「……また何かやったのか？……このバカは……………」

呆れるように呟きながらも、桂介に事情を聞こうと近づくエヴァ。

「おゝい。いい歳した男がみつともなく泣くな。気持ち悪い……………」

辛辣だが、その声音は心配したモノだ。

なんだかんだでこの男に甘くなっているエヴァだった。

「エヴァ……………」

「おい待て止めるッ！！ 鼻水がつく！！」

しかし、桂介が顔をグシャグシャにしながらエヴァに抱きつく。

おかげでエヴァの服は涙と鼻水で悲惨な事になっていた。

「エ…………ヴァ…………（泣）」

「分かった！ 分かったから離れろ！！ 頼むから離れてくれ…………」

それから数十分後。

「——という訳でな、嫌われちゃったかもしれないのだ」

事情を話す桂介。

幾分か落ち着いていたようだ。

しずなさんに嫌われたかも、と落ち込みこそしていたが幾分かマシになっていた。

「ふん……。別に嫌われようがどうでもいいだろうが……」

しかし、エヴァは桂介とは逆に苛立ちを露にしていた。

「ええっ！？　ちょ、それはないだろ！？」

「ふん！！　他の女の事なんか知るかバカ……」

それだけ言うと、エヴァはさっさと部屋に退散していった。

後に残されたのは桂介だけである。

「うう……。エヴァが冷たい……」

学際を目前に控えながら、一人泣く桂介だった。

「今日のしずなさん」

「うう……えつぐ……」

「しずな……いくらなんでも飲みすぎよ？」

しずなは現在、刀子の家で飲んだくれていた。

理由は勿論、前夜祭で桂介に逃げられたのが原因だった。

「だって……だってえ……ゴクゴク……桂介さんがあ……んぐんぐ……」

「ああ、ホラ。飲むのか泣くのかどっちにきなさいよ……」

しずなは終始この調子だ。

いきなり酒を持って来て一人で勝手に泣きながら飲み続けているのである。

前夜祭も終わり明日から麻帆良祭も本番だというのに、教師である自分らが初日から酔いつぶれる訳にもいかない。

それはしずなにも分かっているはずなのだが……。

今のしずなには何を言っても無駄な気がした。

「そんなに悲しければ他の男の人に乗り換えたら？」

「桂介さん以上の人なんて何処にもいないわあ……」

「えつと……ホラ、あなた高畑先生と仲良かったじゃない？ あの
人なんて——」

「ヒゲに興味なんかないわあ……」

「……ならいつそ、私が桂介くんとくつつく、というのは――」

「歯を食いしばりなさい」

「本^{マジ}気にならないでよ……」

結局しずなが酔いつぶれるまで、刀子は延々と付き合っ羽目合っの
だった

第三十四話 前夜祭と焼き鳥（後書き）

お久しぶりです。作者です。まだ生きています。

心配してくださった方。こんな拙い作品を待っていてくれた読者様。本当にありがとうございます。

少し作品を改変してから再度出していこうと思います。バレンタインの時に出した話も後日……かどうかは分かりませんが後で再投稿します。

第三十五話 茶々丸さんとデートとか幸せすぎて生きるのが辛い

『只今より第76回。真帆良祭を開催します!!』

真帆良祭の開始を告げるアナウンスが飛行船より流れると、仮装した学生たちによるパレードが始まる。

学園都市が合同で行うこの祭りはその華やかさといい豪華さといい、学生が主導で行われるお祭りとはとても思えないほどの出来栄だった。

来場する一般の入場者たちも、皆が皆笑顔でお祭りを楽しんでいる。そんな空気の中、一人浮かない顔で歩いている場違いな男が一人。

いつもの通り、それは桂介だった。

「元気を出してください。せっかく学園祭が始まったのですから」

「うう……茶々丸さん。ありがとう」

傍らには茶々丸が心配そうに付き添っている。

桂介は、学園祭が始まってからもまだ前夜祭でのしずなの一件を引きずっていた。

それを見かねた茶々丸は、桂介を励まそうと外へと連れ出したのだ。
った。

「うん。茶々丸さんのおかげで元気でたよ。ありがとう」

「いえ、私はなにも……」

「お礼と言ってはなんだけど、今から一緒に学祭を回らないかな？
色々奢るよ」

おわびとお礼の意味もあつたが、桂介としてはいつもいつも世話を
してくれる茶々丸さんへのお礼としての意味もあつたし、それを抜
きにしても茶々丸さんと一緒に学園祭を回リたかったというのもあ
る。

茶々丸としても、このまま桂介を一人にするつもりはなかったし、
あわよくば学園祭で、この動力炉からあふれだす桂介への十二力、
を理解させたかった。

「……私とでもよろしいのですか？」

「勿論。茶々丸さんと学祭回リたかつたし」

「嬉しいです。桂介さん」

茶々丸さんも快く承諾してくれたので、二人で色々な出し物を見ていくのだった。

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第三十五話　茶々丸さんとデートとか幸せすぎて生きるのが辛い

まずは、3 - Aホラーハウスへ行ってみた。

クラスの手伝いもしたのだ。どんな仕上がりになったのか興味があったからだ。

「せっかくだし、クラスのほう見に行こうか」

「はい。行ってみましょう」

「な、なかなか本格的な作りだな……。手伝ったはずなのにかなり怖いぜ」

「あ、お疲れ様ですアキラさん。ご案内の方お願いします」

「はい。桂介さんに茶々丸さん。こちらにどうぞ」

「え、あの茶々丸さん？ 恐怖度とかいうのが星三つって最高度出してるんだけど……」

数分後。

「わーーーーー！！ おばけだーーーーッ！！！」

「あ！ 桂介さん走っては危ないですよ！」

「ギャーーーーー！！ 何かに躓いたと思ったら爺だーーーーッ！！！」

「怯えている桂介さん……可愛いです」

「うわーーーーー！！ ネギくんがパンツ一丁だーーーーッ！！！」

「通報しました」

酷い目にあつた。

もうおばけ屋敷はいいや……。

次は貸し衣装屋だ。

何故か茶々丸さんがすごく行きたがったので、寄ってみた。

「ここは衣装の貸し出しとかしてるんだな」

「そうですね。あ、桂介さん。この執事服を着てもらえますか？」

「ん？ コレ？ なんか恥ずかしいな」

「すごくお似合いです。次はコチラの半ズボンにランドセルなんかを——」

「さ、さすがにそれは——」

「ダメ…でしょうか……？」

「う……。——着てみます」

「とても愛らしいです。そのまま目づかいで“お姉ちゃん”と呼んでもらえますか？」

「えっと——ちゃ、茶々丸お姉たん。…やべ、噛んじった」

「——ッ！！！！…な、なんて高レベルな破壊力。桂介さん。最高です」

「ちゃ、茶々丸さん！？ 頭から何か黒い煙出てるんだけど…」

「すみませんマスター……。もし私が動かなくなったらネコのエサを——」

「ちょ！？ ここでその台詞はおかしいって！！ 茶々丸さん！！！！」

何枚か写真撮られた。

「いやあ。遊んだ遊んだ」

「はい。色々とあつてとても驚きました」

学祭を一通り回った俺達は、世界樹前の広場近くのカフェで少し休憩を取っていた。

延々と数時間も出店巡りをしていたが、茶々丸さんもそれなりに楽しんでくれたと思う。

「ありがとうございます。桂介さん」

「いやいや。お礼を言うのはこっちだよ茶々丸さん。いつも茶々丸さんには良くして貰ってるからね、少しでも恩が返せたらよかった」

茶々丸さんが喜んでくれたのなら何も言う事はない。

色々と恥ずかしい目にあつた甲斐があるというモノだ。

「いえ、私は……それほどの事をしている訳では……」

「茶々丸さん。茶々丸さんにとっては、それほどって思っている事でも、俺にとっては大事な……とても感謝してることなんだ。だから茶々丸さんはもっと誇ってていいんだぜ？」

「え？」

「茶々丸さんは、俺やエヴァをいつも助けてくれる。誰に言われたとかじゃなくてね。それは茶々丸さんの誇っていい茶々丸さんの良さなんだと思う」

「私の良さ、ですか？」

「そう。それが俺は嬉しいんだ。だからそんな茶々丸さんに恩返しをしたい。茶々丸さんに喜んでもらいたい、ってそう思う。……迷惑だったかな？」

「……いえ。嬉しいです、桂介さん。ありがとうございます」

誰かに言われたからではなく、自分で決めた事。

この動力炉からあふれ出るモノが何なのかは分からないが、これは誇っていい私自身から出来たモノなのだろう。

茶々丸はソレを大切にしようと思った。

「いえいえ、こちらこそ。茶々丸さんが一緒に最高に楽しかったよ」

「桂介さん……」

「茶々丸さん……」

見つめ合う二人。

オシャレなカフェテラスの夜空に咲く大小様々な花火。

ムードのあるバイオリンの音色は嫌が応にも二人の距離を縮ませる。

学祭という浮かれたテンションとはいえ、ムード満点の空間に、茶々丸の顔がまつげの本数まで見えるほどに近づいて――

ターーンッ！！

響いた銃声の音が終わりを告げた。

目が覚めると、そこは保健室だった。

保健室内は真っ暗で、もう既にかなりの時間が経っているのが分かった。

案の定、時計を見ると午後8時。

寝た時の事があやふやで、何でこんな所にいるのか分からない。

それでも、今日一日を振り返ると、段々と直前に茶々丸さんと一緒にいた事が思い出される。

しかし、ここには茶々丸さんの姿が見えない。

こんな時間からでは口々に回り直す事も出来ないだろう。

茶々丸さんと良い感じの雰囲気になって、ドキドキしながら茶々丸さんの瞳をずっと見ていたはずだが……。

まさか緊張して途中で気絶でもしてしまったのだろうか？

もし途中で緊張に耐えられずに倒れたのだとしたら……女の子とのキス目前に気絶してしまう……それは酷くみっともない。

20数年生きてきた中でトップ10入りに入る事間違いないの赤っ恥である。

茶々丸さんも呆れてしまっただろう。

もし、次に茶々丸に会った時に――

「桂介さんがこんなに情けない人だったなんて……。私、情けない人のお世話なんかしたくありません……」

とか言われたら、俺は2秒で死ねる自信がある。

「……もう、死んで土に還りたい」

結局しくしくと泣きながら保健室でそのまま眠る桂介だった。

「今日のしずなさん」

真帆良祭が始まれば、学園はいつも以上に騒がしくなる。

騒がしいのも問題だが、ただ単に騒がしいだけならば、まだいい。

だが、問題というのは得てして予想外な事も発生する。

人が増えれば、当然トラブルも多種多様。様々な形で発生するのだ。

特に学園祭という行事は学生が主になって運営するモノだ。

自然と学生だけでは対処できない問題も発生してくる。

それを解決するのも教師の務めなのだ。

「——だと言うのに……少しはしっかりしてください。源先生」

「あ~~~~う~~~~」

刀子に促されながら見回りをするしずな先生。

教師達は学生たちの出店を見回り、問題がないか、来場者とのいざこざはないか、様々な問題に対処する為に見回りをするのだ。

しかし、教師の一人でもあるしずな先生は前夜祭での桂介に逃げられた事が尾を引きずっていた。

訳も分からずいきなり逃げられたのだ。

理由が分からないからどうしようもないのだが、それがしずな先生の落ち込みに拍車をかけた。

ようするにどうしようもないので、落ち込むしかなかったのである。

「あ……小さな桂介さんだあ。おっきな杖持ってるー」

「あれはネギ先生です」

「あ、あそこにもダンディな桂介さんが――」

「あれは高畑先生です」

「半ズボンにランドセル姿の桂介さん……はあはあ――」

「桂介さんがそんな格好している訳――き、きつと見間違いね。うん」

貸し衣装屋で何か見えた気がしたが気のせいだと思う事にした。

「はあ……。いい加減に少しは立ち直ってください。仕事中にまでプライベートを持ち込むのはどうかと思うわよ?」

少しキツイ言い方になってしまふ刀子先生。

彼女自身、昨夜遅くまでヤケ酒に付き合わされたのを根に持っているのだった。

「うう……刀子の意地悪」

「先生をつけてください。まったく……こんなみっともない姿、生徒に見せられないわ」

ため息をつきながらも結局最後までしずな先生をフォローする刀子先生だった。

第三十五話 茶々丸さんとデートとか幸せすぎて生きるのが辛い（後書き）

なんだかんだでダラダラと続きます。

誤字を修正しました。ご報告頂き感謝です。

第三十六話

俺の姉がこんなに可愛いわけが……いや普通に可愛かったわ

何かが身体中を這いずっている。

それは生温かくて、妙に柔らかい。

視界が閉じている今の状態では、ソレが得体のしれないモノにしか思えないから気味が悪い。

手の指を舐めるようにしゃぶられ、腹から胸を舐るように舐めまわされる。

そして、やがては首を通して顔にまで登ってくる。

そこまで来てから俺は気づいた。

目が開けないのではない。

目を開きたくないのだ。

その気味の悪いモノを直視したくないから。

しかし、ソレが頬を伝って、口へと近づいた時――

——ついには、耐えられずに無理矢理目を見開き、叫び声を上げながら立ち上がったいた。

「うわあああッ!!」

「きゃんっ!?!」

そこは自分の部屋だ。

ただ、そこにいつもとは違う女性の悲鳴があった。

見てみると、その女性は頭から床へと落ちていた。

どうやら、俺が寝ていたベッドから下の床へ、落ちたようだ。

顔から着地という悲惨な状態で。

「うう………いたい」

目に涙を浮かべ、鼻を真っ赤にしながらて起き上がってきたのは、しずなさんだった。

「……しずなさん?」

「うう……酷いよ桂くん。せっかく心優しいお姉ちゃんが起こしに来てあげたのに……」

「お姉ちゃん……？——あゝなんか分かった。コレ夢だわ」

今日の俺は、弟のようです。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第三十六話　　俺の姉がこんなに可愛いわけが……いや普通に可愛いかったわ

寝起きで動かない頭でも、彼女が床に顔を向けて落ちていたのは、俺のベッドの上にいたからだという事くらいは分かる。

跳ね起きた衝撃で落としてしまったのは悪かったが、それならばまず俺のベッドに乗らなければよかったのでは？と思う。

「それで、なんで俺のベッドに乗ってたのよ？ 夢見が悪くてつい跳ね起きたのは悪いとも思うけど……」

「ベッドに乗ってたのは、寝顔の可愛い桂くんを味見する為に乗っただけよ。それよりも夢見が悪かったって大丈夫なの！？」

心配そうに俺の様子を窺ってくる所は嬉しいのだけど、この人は夢だと何故かはっちゃけているからなあ…。

“味見”とか日常的には台所以外で聞くことは、ほとんどない筈の単語出てきたし――

「……前半部に気になる単語が出てきたんだけど――」

「それよりも夢見が悪かったって大丈夫なの！？」

「……いや、だから――」

「それよりも夢見が悪かったって大丈夫なの！？」

「（……話が進まない）……だいじょうぶだよ。もう起きたから」

学校の先生であるしずなさんは、出かける直前まではワイシャツ姿だ。

心配だと上半身を前に乗りだしてくるポーズだと、自然と視界に入るお。っぱいが目の毒である。

話をいい加減切り上げるつもりで、俺は立ちあがる。

「そう？　悪夢ばかり見るようなら行ってね。いつでも添い寝するから」

そんな事されたら、それこそ悪夢とは別に眠れなくなってしまう。

「大丈夫、大丈夫だから！！　ちよつと寝汗かいて気持ち悪い、って程度だしシャワーだけ浴びてくるよ」

そうだ。さつさとシャワーを浴びよう。

身体中が寝ている間に汗をかいたせいで、まるで犬に全身舐められたかのようにベトベトだ。

シャワーを浴びれば、この鬱陶しい気分も解消できる事だろう。

「うん、分かった。それじゃ行きましようか」

「へ？」

「早くしないと学校遅刻しちゃうしね。大丈夫。お姉ちゃんが隅々

まで綺麗に洗ってあげるから」

「いや、一人で浴びれる——」

「うふふ、この時の為にお風呂用マットを買っておいて正解だったわ」さ、洗いっこしましょうね」

「いや、ちょ、待って……。ソレは色々とかかし……。あ、駄目！！ズボン脱がさないで……。アー————ッ！！」

数分後

「まったく……お姉ちゃんはお断りも隙もないわあ」

「むう……このかちゃんのいけずう……」

場所は変わって場所は一階。

リビングまで降りてきた俺達は、このかちゃんが作ってくれた朝食を食べていた。

ちなみに先ほどの一件は、このかちゃんが止めてくれた。

しずなさんが俺のパンツに手を掛けていた所で、ドアを蹴破って乱入して止めてくれたのだ。

彼女に止められなければ年上のお姉さんに弄ばれる事が快感になる所だった。

あの時のしずなさん、息を荒げててちょっと怖かったな。

「——お兄い、お兄い。…聞いとる？」

「ん？　どうかした？」

「もう、話聞いてへん。今日のお味噌汁どつって話や。お味噌変えたから、いつもと違うと思うんやけど…」

「あ……ああ、だいじょうぶ。美味しいよ」

不安そうに聞いてくるから何事かと思った。

いつもの味を知らないのだから……まあ美味しいのだから問題はないだろう。

「…ホンマ？」

しかし、俺の言葉にまだ心配そうな顔をしている。

なら多少大げさにでも、言って伝えたほうがいいかもしれないな。

「ああ。いつも飲んでいたいくらいで――」

「もう、お兄いってば仕方ないなあ。そんならこの婚約届けに判を押してくれば……」

今度は満面の笑みで喜んでくれた。

しかし、そんな喜びながら婚約届け出されても、さすがに判を押すのはいくらなんでもやり過ぎだと思う。

「いや、俺達兄弟なんじゃ……」

「ウチは一向に構わんで」

「私だって桂くんのお嫁さんなら一向に構わないわ!!」

対抗されても困るんだけど……。

つか、ツツコミがいちいち追いつかない。

いや、ソレ以前にツツコミすらさせてもらえない。

「ほらほら、桂くんの大好きなオッパイですよ〜?」

「ああ、お姉えずるい〜!! ウチにはまだそこまで大きくないから対抗でけへんのにい!!」

「ふふん。伊達に年月は重ねてないわよ!! お姉さんのすっごいテクでメロメロにしてあげられるんだから!!」

「ふーん、だつ。お姉えとは違ってこっちはピチピチやもん。まだ初心^{うぶ}な初物なんやからお兄い色に染まれるんやもん!!」

「わ、私だつてピチピチだもん!!」

「うつそやー! 伊達に歳は重ねてないんやろ! 色々汚れてるはずや!!」

「違うもん!! まだ誰にも触られた事のないピンクだもん!! 処女賭けたつていいわ!!」

「うわー! お姉えのエロスー!!」

「うえー! このかちゃんの変態ー!!」

「……ごちそうさま」

二人が延々と争っている間に朝食は食べ終わってしまった。

「おはようです」

「あれ？ デコッ娘。いつからいたんだ？」

いつの間にか傍らに、ちよこんと座っている幼馴染みこと、夕映の姿があった。

相変わらずの無表情で俺のお茶を勝手に飲んでいる。

「ついさっきです。呼び鈴を押したのですが、反応がなかったので勝手に上がらせてもらいました」

「そか。悪かったな。こっちがうるさくて聞こえなかったよ」

「なんとなく見れば分かりました。あ、そういえば今日はバレンタインなのでチョコを持ってきました」

「お、サンキュー」

夕映が渡してくれたのはオーソドックスなハート型の箱だ。

中を見ると、チョコもハート型である。

純粹な好意が見えて照れくさいが、とても嬉しい。

夕映も照れているのか顔が真っ赤だ。

「か、感謝するです。ホワイトデーのお礼に期待しています。具体的には来月に出る新しい本で構わないですよ」

「ちゃっかりしてんなあ……。まあ、お礼はちゃんと返すけど」

「はい。貴方の律儀な所は素直に好感が持てますよ」

そっぴや、今日はバレンタインだった。

せっかく貰ったんだし、後で爺さんに見せびらかして自慢してやる
うっとう……。うっとう……。

「あー！ー！！ 夕映ちゃんズルイツー！！」

「ズルイ、と言われましても——」

「お姉ちゃんだってちゃんと作ってあるんだから！！ ホラ——！！」

我に返ったのか、しず姉えがこっちに詰め寄ってきた。

手にはボウルと料理用のハケを持っている。

中にはまだ液状のチョコレートが入っていた。

「……しずなさん。それまだ液状のチョコだよな？」

「ふっふっふ。そうよ、今からコレを私の身体中に塗るから余す事なく全部食べてね、桂くん」

そういうと、その場で服を脱ぎだした。

……そういえば、昔チョコを食べると鼻血が出ると聞いた事がある。

食べる前だが、確かに鼻血が出た。

「はい、お兄い。あんな変態は置いておいて、ウチ特製の（食べたら身体の奥から熱くなつて目の前にいる異性に野獣のごとく襲いかかる事間違いないし！）チョコどうぞ。食べる時は、うちの部屋で二人っきりで食べような」

このかちゃんのチョコからは、何か言い表せない危険な香りがするな……。

「……あんな得体のしれないモノではなく、私のチョコを先に食べるです」

「ホラホラ、お姉ちゃんのを先に食べましょう。むしろ桂くんなら中身を先に食べてくれても一向に構わないわ！」

「なあなあ、お兄い。チョコ食べなくてもええから早くベッドのある部屋行こうよ」

あはは。

色々オカシイはずなんだけど……。

まあ、夢だしな。

考えるだけ無駄なのだろう。

ならば、据え膳食わぬは男の恥だって爺さんも言ってたしな。

漢なら残さず全部平らげてみせるぜ！

それでは――

「待たせたな。今度こそ、いただき――」

「し……しまったーっ！？ 寝過ごしちゃったー……ッ！！？
どどどどうしよう――」

しかし、いざ食べようとしたら、目の前にいた、大・中・小の女体たちの姿は何処にもなく、

そこには、大騒ぎでドタバタと喧しく騒ぐネギくんの姿だけがあった。

……。

何を言っているのか分からないが、俺にもさっぱり分からねえ。

とりあえず、目の前にいるネギくんが全部悪いということだ。

「……」

「え？ あの桂介さん？ なんでここに？ ……え、なんで無言で武器なんか――」

「ネギくん」

「は、はい……」

「シネ」

「ギャーーーーッ！！！！ 刹那さん助けてーーーー！！！！」

「ちょ、ちょっと桂介さん！ ネギ先生に何しているんですか！？」

ちよつとやそつと謝ったくらいじゃ許さねえぜ？

「今日のしずなさん」

「——ッ!？」

「な、なに!？ どうしたのよ、しずな……」

昼食をとある生徒のやっている喫茶店で二人で食べていたしずな先生と刀子先生。

すると、いきなりしずな先生が立ちあがった。

唐突に、何かとてつもない事実気付いたかのような反応だ。

「今——」

「うん」

「私……とても惜しい所までいった気がするわ……」

「……は?。」

「そして無償にネギくんに殺意を覚えたわ」

「いきなりね」

「だからネギくんの給与査定についてちょっと学園長と話してくる」

「へ？」

「大丈夫！ 学園長にはNOと言わせる間もなく瞬殺（話し合い）にしてみせるわ」

「いやいや、え？ ちょっとしずな！！」

言うが早いか、しずな先生は本当に学園長室の方へと走って行ってしまった。

身体能力はもとい、動体視力にも一般人に遅れをとるはずはない、と自負している刀子先生が見失ってしまうほどの速さだった。

「ちょっと、ちょっと〜！ いきなりどうしたのよーーーーッ
！……」

その後、刀子は学園長室で学園長に襲いかかるしずな先生を必死で止め、事情を聞き出すと、しずな先生は「カツとなつてやった。今は若干反省している」と述べたとか述べなかったとか――。

第三十六話

俺の姉がこんなに可愛いわけが……いや普通に可愛いかったわ

この話は、2月頃に出した話を訂正して再投稿してます。おおまかな流れは変わっていないので、次の展開を待っていた読者さんはゴメンなさい。次はまた学祭の続きですので少し待ってて下さいね。

第三十七話

タイムマシン。

……ア、アレだろ？デパートで閉店近くになると

「なるほど……。のどかちゃんとの約束をすっぱかして寝ていたと
……」

「はい……」

すっかり日も暮れた夜の保健室で、俺はネギくんが騒ぎたてていた理由を聞いた。

それによると、ネギくんが本屋ののどかちゃんとのデートをすっぱ、ぽ、ぽん。とすっぱかしたのだ。

これは、「ごめんな最終兵器。女々々」などと言って誤魔化せるレベルじゃねえな。

ご愁傷様である。

「うう……」

「それで、のどかちゃんとは何時に待ち合わせしてたんだ？」

「今日の午後四時に……」

「えーっ！っ！っ！」

刹那が驚くのも無理はない。

これはいくらなんでも間に合わない……既に大幅に遅れてるわけだからな。

しかもあの娘だったら約束の時間から四時間経った今でも待っている可能性も否めない。

……うわぁ。

「と、とりあえず急いで行って謝れネギくん!!」

「も、申し訳ありません全て私の責任です!!」

「し、しかしこれはマズイぜ! 予定ギリギリなのに丸々一日寝て過ごしちまって……!!」

とにかくネギくんをのどかちゃんの下へ向かわせようとする。

すると、カチリッ、という音と共に世界が回転するかのような妙な錯覚に陥る。

「——……?」

すると、外ではお天道様が登っていた。

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第三十七話　タイムマシン。……ア、アレだろ？デパートで閉店
近くなると安くなるヤツ

『只今より第76回。真帆良祭を開催します！！』

真帆良祭の開始を告げるアナウンスが飛行船より流れると、仮装した学生たちによるパレードが始まった。

学園都市が合同で行うこの祭りはその華やかさといい豪華さといい、
学生が主導で行われるお祭りとはとても思えないほどの出来栄で
……。

……。

……あれ？

「ええーっ。只今より開催って!？」

「これは一体…!？」

「えっと……つまり、どういつ事だっばよ？」

「こりゃあまさか……」

混乱する俺達を別に獣が何事かを呟く。

「とりあえずどっかで落ち着こつや」

急に偉そうだが、俺達は言われるままにその場を後にした。

場所を変え、適当な店に入る。

「兄貴。アレ出してみろや」

席に着くなり、獣はネギくんから何かをねだる。

それは、懐中時計だった。

「うーむ……やっぱこいつが怪しいな」

獣は、何事か思い当たる事があるようだ。

刹那も獣の言葉に神妙な顔で頷いている。

「これが原因で『戻った』と考えるしかねえ——」

「う……『戻った』……。やはりそうですか——」

「おそらくこれが噂に聞く『アレ』の実物だぜ——」

「『アレ』ですか……。し、しかし信じられません——」

刹那と獣にはある程度、事情が分かっているみたいだ。

……。

け、決して俺がバカだから分かっていない、とか、そういう訳じゃないぞ？

「むー。ちょっと二人とも何ですか『アレ』とか『戻った』とか、わかるように言ってくださいーいー!!」

「そうだ、そうだー。分かるように言えー！ あ、ウエイトレスのお姉さん。この“天使ちゃんや腐れ神父も大好きな、超絶激辛危険な麻婆豆腐”一つください」

よし、俺だけが話に付いていけない訳ではないぞ。

初めてネギくんが心強いと感じたぜ。

「キャ!？」

頼もしいネギくんだが、いきなり立ち上がったので、近くにいた少女とぶつかってしまう。

「あ、すいません。いきなり立っちゃって……」

「いえー…あれ？ ネ、ネギ先生ー？」

それは、のどかちゃんだった。

……。

……。

.....。

……この麻婆豆腐。信じられないくらい辛い。

俺が麻婆豆腐と格闘を終える頃には、一連の話は終わりネギくんが嬉しそうに先ほど出していた、例の『アレ』こと、懐中時計を手に小躍りしていた。

麻婆豆腐に夢中でまったく聞いていなかったぜ。

とりあえず、刹那に事情を聞くとしようか。

「刹那、刹那」

「はい。なんですか？」

「つまりアレは何だったん？」

「……今までの話を聞いていなかったんですか？」

若干冷たい目で見られたが、気を取り直して刹那は一連の事をかいつまんで話してくれた。

それによると、あの懐中時計はタイムマシンらしい。

「そうか、アレが……」

「はい。まさか東西を問わずに不可能といわれたアレが本当に存在するなんて……」

「そ…そんなにスゴイのか？ アレ……？」

「え…？ スゴイじゃないですか、タイムマシンですよ？」

どうやらタイムマシンはとてもスゴイモノらしい。

……。

いや、それくらいは分かりますよ？

ただ、どうスゴイのか分からない訳で……。

「刹那、それでタイムマシンとはなんだ？」

「……」

刹那に、とてもバカを見るような目で見られた。

「今日のキティちゃん」

妙な魔力を感じて近づいてみると、ぼーやの姿が見えた。

何やら手に持ちながらクルクルと馬鹿みたいに小躍りしている。

新しい骨董魔法具アンティークか何かか？

とりあえず声を掛けてみるか……。

「何をくるくるハシャいでるんだ、ぼーや？」

「わひゃあ!？」

思った以上に驚かれたな。

あからさまに怪しい。

「あ、師匠マスターも仮装ですか？ お人形みたいで可愛いですね」

「ガキの世辞などいらん」

む、さらりと世辞を言われた。

こういう部分が小僧のくせに英国紳士らしく小憎らしい。

確かに、自分でも出来たコーディネーネイトだと自負している。

当然、褒められれば嬉しいのだが……ぼーやにそれを素直に言うのは癪だ。

「エヴァ……その格好……」

声に振り返ると、そこには桂介がいた。

何やら尋常ではない様子でフルフルと小刻みに震えている。

そして、度肝を抜かれたと言わんばかりの驚いた表情をしている。

……これはアレか？

私の可愛さに見とれている……とか？

「はは……。まさかな——」

「うひゃあぁ〜。エヴァ超可愛いぞ〜」

「——ひゃっ!？」

どうやらその通りだったらしい。

一瞬で私の背後に回り込まれたと思ったら、気がつけば抱きあげられていた。

私が一瞬見失うほどの見事な瞬動だった。

「ちょ、いつの間に!?!? おい馬鹿やめろっ! 頬を擦り付けるなっ!!--スリスリするなっ!!--」

「さすが俺の妹だ! 何着てても似合うぜ!!--」

うう……。

イカン、不覚にも頬が熱い……。

「いいから、離せ!! このバカ、アホ〜!!!--」

「あ、ちなみにチャチャゼロ様も可愛いぞ」

「……ツイデ、ミタイニ言ワレテモナア」

べ、別にこんなバカに褒められても、まったく、これっばちも嬉しくなんかないんだ!!

そう、嬉しくなんか、絶対にない!!

絶対そうなんだ!!!!

「分かったから離してくれ~~~~~ッ!!」

第三十七話 タイムマシン。……ア、アレだろ？デパートで閉店近くになると

今回はちと短いです。

作者自身はタイムマシンの事は知ってますよ？ 最近未来ガ。エツト研究所の風景をアニメで見ましたからね。

ホラ、アレです。バナナでゼリーが、だが男だ。なんですよ（意味不明）。

第三十八話 迷子センターとかの預かり所ってまだあるのだろうか？

エヴァを思う存分弄っていたが、ふとした拍子に逃げられた。

フワフワの髪をロール状にして、勘違いしたお嬢様像とかしてみたかったのにな。

「うう……。桂介さん助かりました」

「旦那ナイスだ。これをエヴァンジェリンに渡したらどうなるか分からないからな」

何故かネギくんと獣に感謝された。

ネギくんはともかく、獣に感謝されてもなあ。

「さて、これからどうしましょう？」

「うーん……。でも、これで時間に余裕ができたし、僕ちよつとゆつくり学祭を見て回りたいかなー」

「いいんじゃないか？ そのタイムマシンとかいうのがあれば、何度でもやり直せるんだろ？」

ネギくんが随分と嬉しそうに呟くので肯定しておいた。

きっとスケジュールとか関係なく自由に遊びまわりたいんだろうな。

気持ちは分かるぜ。

俺も遊びまわりたいからな。

しかし、刹那とその他は反対のようだ。

「危険ですっ！ まだコレが使えるかどうか分からないのですよ」

「そうだが、旦那。まずはコイツの開発者に話を聞いた方がいい」

「開発者？」

「ええ。“超 鈴音”。彼女から詳しい話を聞きましょう」

と言う訳で、超を探す事になったのでした。

ネギま！ 〵外側に立つモノ〵

第三十八話 迷子センターとかの預かり所ってまだあるのだろうか？

改めまして、超の探索である。

取りあえず、さっきまでの俺たち――

つまり、過去に当たる今現在。別の場所にいるだろう俺たちに遭遇しない為にも、仮装をする事になった。

ちょうど近くにあった貸し衣装屋に入る。

そういや、本日二度目だな。

貸し衣装屋なので結構色々の種類がある。

肉襦袢にくじゅばんとかあったので、着てみたかったが皆に反対された。身体だけ筋肉質でキモいと言われると結構凹む。

仕方ないので、適当に学ランでも着ておく。

背中に龍と虎の絵が書いてあるのが派手で、ちょっと恥ずかしい。

ちなみに、ネギくと刹那はウサギの姿だ。

ネギくんはどうでもいいが、刹那の格好がともイイ。マーベラスだっ……！

下半身など、毛皮の下着みたいで、なかなか大胆な格好である。

ヘソ出しは言うに及ばず、お尻のラインなんか最高である。

「あの……桂介さん。そ、そんなに見ないでください」

ガン見してたら、照れられた。

可愛いので、とりあえず写真撮つといた。

「こんな姿、撮らないでください……！」

「刹那」

「……なんですか？」

「学園祭はどうだ？　楽しいか？」

「え？　それは……当然楽しいですが――」

「そう。学生として、忘れてはならない大切な思い出の一つになるだろう」

「えっと……そう、でしょうね」

「つまり刹那のその格好も、刹那にとって大切な瞬間の思い出。それを写真に収めるのは当然だろう」

「う……。そう思ってくれるのは嬉しいですが……」

「俺だって刹那のそんな可愛い格好は当然好きだ。つつい写真に残したくなるのだ」

「か、かわいい…ですか？」

「うむ。とても、大変、素晴らしく良いモノだ。ついでに、コレとコレも着てみてくれ」

「は、はい……」

刹那のコスプレ大会始まるよ〜。

「超さん、いませんね……」

「そうですね〜。むむっ？ あのアトラクション怪しくないですかっ!？」

「むっ。そうだな特にあの受付の娘のスカートの中なんて怪しすぎる……ぜひ確認をば——」

「オイコラ兄貴&旦那」

刹那のコスプレ大会は、まあ結果的に言えば刹那が途中で正気に戻ったので、中止となった。

……残念だ。

……とても残念である。

くっ……もう少しで刹那のレオタードやブルマ姿が見えたというのに。

……まあいい。それは次の機会に狙うとしよう。

今は刹那のウサギさん姿で満足しようではないか。

さて、気を取り直して今度こそ超の搜索である。

といっても、ネギくんが目に入った楽しそうなアトラクションに片っ端から入るので遅々として進んでいない。

仕方ない。

ここは秘策を使っしかないだろう。

「仕方ない。ここは俺が何とかしよう」

「旦那、何か手があるのか？」

「任せる。取っておきの策だ」

「取っておきつて、いつの間に………？」

「いいからいいから。とりあえずネギくん連れて、あの飛行船にでも乗っててくれや」

指で示した先には、飛行船が飛び立とうと準備をしていた。

どうやら、遊覧飛行が楽しめるようだ。

ネギくんなんか今にも乗りたそうにこちらを見てる。

「ネギくん。刹那の言うこと聞いていい子にしてるよ」

「はーい」

「なんか緊張感がねえなあ………」

「今日の天才火星人」

ふむ。ネギ坊主とせつなサンは飛行船に乗ったネ。

ならワタシも乗るとしようか。

そろそろカシオペアについて教えないといけないからネ。

『えゝ……迷子のご案内をお知らせします』

飛行船に乗ると同時にアナウンスが入る。

学園祭には人が大勢いるので、この手の連絡は特に珍しくはないネ。

きつと小等部の子供が親とはぐれたのだろう。

気にしないでおこうと思ったら、そのアナウンスは私にとって関わりのあるモノだったヨ

『在校生。中等部3 - A所属の“超 鈴音”ちゃん。お連れさまがお待ちです。至急——』

「……ハイ？」

お、思わず声が出てしまったヨ。

い、一体誰がこんなアナウンスを――

「あれ？ 超さんの名前？？」

「まさか……」

「これが桂介さんの言っていた秘策……でしょうか？」

お連れさま、というのは身に覚えがないので、誰の仕業か分からなかったが、ネギ坊主たちの会話で合点がいったヨ。

これはあの男の仕業に違いないネ。

『え？ もう一度ですか？ へ？ 来るまでガンガン伝える？ さすがに中等部にまでなってる娘の名前を連呼するのは可哀想じゃ……って、わね。マイク入ってるんでした！？ ええっと……コホン。大変失礼しました。えゝ、再度迷子のご連絡をお伝えします。在校生。中等部3-A所属の“超 鈴音”ちゃん。お連れさまが――

――』

……まさか、私がこの飛行船を降りるまで、このアナウンスは続くの力ナ？

そ、それはさすがに勘弁願いたいヨ。

「超さん……可哀想ですね」

「旦那もえげつない作戦するなあ……」

「これは……さすがに恥ずかしいですね……」

ああ、ネギ坊主たちに同情されてる！？

うう……これじゃ、出るに出られないヨ……。

『あゝまだるっこしいな。代わって代わって——』

『ちよっ！？ ダメですって、勝手に入ってこないで——』

『お、このマイクだな。あゝ、あゝ。本日は晴天ナリ。エヴァは幼女ナリ、っと。あゝ超。超鈴音？ 聞こえてるか？ さつさとネギくん先生の所まで行かないと、1。歳で迷子案内される恥ずかしい娘として学園中に知れ渡るぞ。分かったらさつさと出てこい』

「もう手遅れじゃない力……ッ!!」

「あ、超さん見つけ」

酷過ぎるアナウンスについついツッコミを入れてしまったネ。

おかげで最悪の形でネギ坊主に見つかってしまったヨ。

「うう……。こんなはずじゃなかったネ……」

「えっと……元気だしてください」

ネギ坊主の言葉がとても嬉しかたヨ。

第三十八話

迷子センターとかの預かり所ってまだあるのだろうか？

（後書

あゝしずなさん出てこないとテンション上がらないですわ。

今回も刹那のウサギさんがなかったら、モチベーション的な意味でマズかったわぁ……。

第三十九話

出会う奴出会う奴全員の名前を覚えている奴なんて漫画の登場

迷子センターから追い出されたので、ネギくん達と合流しようと飛行場辺りまで移動する。

すると、途中でバイト仲間に出会った。

「あら？ 桂介さん？」

「あ、本当だ。奇遇ですね。こんにちは桂介さん」

バトン持った美人（笑）さんとホウキ持った可愛い娘だ。

たしか名前は――

「おお。えっと……久しぶりだなあー（棒）」

ヤバイ。

また名前が出てこない。

タカハタ……はタカミチの名字だったよな。えっと……。

と、とにかく誤魔化してさっさと別れてしまおう。

「懐かしいな。大きくなって、一段と可愛くなったぞ？」

「……久しぶりにあった親戚のオジサンが何かですか？」

「……名前覚えてないんですね」

やっべ。即効バレた。

ネギま！　　＼外側に立つモノ＼

第三十九話　　出会う奴出会う奴全員の名前を覚えている奴なんて
漫画の登場人物くらいだと思う

「——だから覚えてるって、メイちゃんと、お姉様ちゃんだろ？」

「それは先ほどメイが喋っていた私の呼び方ですっ！！ やっぱ私の名前覚えていませんわねっ!？」

「お、お姉さま。落ち着いて……」

ヤバいな。

会話の流れを引きのばして、彼女たちの名前を聞き出そうとしたら、メイちゃんは金髪の方を敬称で呼んでいたようだ。

さすがに、“お姉様”というあだ名ではなかったか。

「まったく……。素直に覚えていないなら、そうおっしゃってくださいね、怒りなどしませんのに——」

「あ、そう？ ワリい。全然覚えてないわ。名前なんだっけ？」

「誠意どころか、謝る気すらありませんわねっ!!!？」

謝ったのだが、謝り方が悪かったようだ。

……なんか、前にも似たような事があったなあ。

「……もういいですわ。名乗りますから、今度こそハッキリと覚えていてくださいね？」

「任せる。（キリッ）」

「その顔で台無しですよ。桂介さん」

メイちゃんに顔の駄目だしされちった。

「私は、高音・D・グッドマン。聖ウルスラ女子高等学校2年の生徒ですわ」

「あ、私は女子中等部の佐倉 愛衣です」

そうそう、そういえばそんな名前だったな。

夜のお仕事でたまに一緒になるけど、あんまり会話とかしたことがなかったんだよね。

「それで、桂介さんも警備の途中ですか？」

「警備？」

「アレ？ 聞いてませんか？ 世界樹前で告白をするカップルの阻止をして周るという——」

「なに！？ つまりリア充を片っ端から潰すのか！？」

リア充を潰して周る。

学校公認でそんな事をしていいなんて……。

爺め……こんな面白い事をやってるのに黙っていたとは……。

「リア充って……まあ、結果的にそうなるのでしようが……」

「阻止するのは世界樹の魔力が届く範囲だけですよ。それ以外は――」

「分かってる。任せろ。とにかく、キャキャウフフしてるバカップルを力づくで邪魔すればいいんだろ？」

「違いますっ！！ もう話をキチンと聞いてくださいっ！！……だいたい貴方はですね――」

おっと、この娘の話は長いからな。

正座しながらスカートの中を覗くのも一興だが、今はリア充狩りが先決だ。

「分かっているのですか？ つまり私たちのようなマギステル・マギを目指す人間にとって――」

「お姉様」

「何ですか？ この際だから桂介さんにはしっかりと話をさせて

」

「もう、桂介さん向こうに走って行ってしまいましたよ」

「へ…？」

「はっはっは——。——狩り行こうぜ——」

「ま、待ちなさい桂介さんっ！！ まだお話は済んでませんのよっ

！——！」

「あ…。ま、待ってください！ お姉様——！？ 桂介さ——ん
！！？」

とりあえず、片っ端から幸せそうな連中に影からこっさりパイ生地を投げつける事にした。

しかし肝心のパイがないし、食べ物は粗末にしてはいけない、と茶々丸さんに言われているので、どうしようかと考えていると、途中でネギくんを発見する。

今日はネギくんと遭遇率が異常に高い気もするが、まあ気のせいだろう。

その後の超の事でも聞こうと近づくが、その傍らには他にも誰かいた。

刹那かな？　と思っただがよく見ると違う。

それはのどかの嬢ちゃんだった。

「あれ？　ネギくんにのどかの嬢ちゃ——」

「邪魔したら駄目です」

「ッ！！？」

膝カッコンされ、思いのほかビビった。

いきなりやられると心臓に悪い。

文句を言っただけで振り返ると、そこにいたのは夕映ちゃんだった。

「いきなり何をしゃがる！？　今ので俺の寿命が縮んだらどう責任とってくれるんだ！！」

「そんな事で寿命は縮みません。それに、二人のジャマをしようとした桂介さんがいけないのですよ」

そう言いながら夕映ちゃんは、ネギくんとどこかちゃんを指さす。

二人仲良く歩く姿はまるで……

「まるでカップルだな」

「はい。のどかには幸せになってほしいです……なぜパイ生地を片手に持つてるんですか？」

「え？ 幸せそうだからパイ生地ぶつけてやるうかと——」

「怒りますよ？」

怒られるのはイヤなのでパイ生地はしまおう。

「まったく……。それでは私は行きますが、くれぐれもおかしなマネはしないようにしてくださいね」

「ん？ 夕映ちゃんは今からどこか行くのか？」

「いえ……今からは自由時間なので一人で学祭のジュース巡りでもしようかと……」

「お、じゃあ暇だな。前約束したし、一緒に学祭周ろうぜ」

せっかく約束したけど、何時に行くか？とかまったく話していなかったからな。

タイミングよかったぜ。

「え？ あ…や、その……でも、今は私一人しかいないですし……」

「ん？ 別に二人でもいいじゃない」

しかし、夕映ちゃんは何故か乗り気ではないようだ。

真っ赤になって困ったようにアタフタしてる。

「ですが、それだと私と二人っきりで……その、ですね……まるでデートといえますか……」

「おう。夕映ちゃんとデートだな」

「いいのですか！？ いや、えと、そういうのは準備とか段階とか……」

「ん……夕映ちゃんは俺と二人だけだと嫌か？」

「いえ、そのような事は決してないですが……その……」

あゝよかった。

「桂介さんと一緒なんて、反吐がでます。半径10m以内に近寄らないでください」とか言われたら、心折れてたわ。

「じゃあ、いいじゃない。さ、行こうぜ」

「話を聞いてください。ですから――」

まだグダグダと喋りそうなので多少強引だが、手をひいて無理矢理連れだす事にしたのだった。

○月×日。晴れ。

最近、桂介さんとすれ違っただけな気がします。

桂介さんと会えない日は、なんだかいつもよりも物足りない気分です。

前夜祭でお会いした時は、何故かとても……その……忙しそうで、あまりお話が出来なくて残念です。

……。

……。

その、私にとって桂介さんは、誰よりもその……違うといいますが……特別なんです。

えっと……つまり、学園祭という特別な日には、特別な人と一緒にいたいといえますか——

私も仕事が忙しくてなかなか会いに行ける時間がなくて——

でも、桂介さんが望んでくれるならいつでもお時間を作りますし——

——
世界樹の前でぜひ、桂介さんに聞いてほしい話も、あって——

だから、ぜひ学園祭の間、何処かでお会いできたらと思います。

……えっと、ゴメンなさい。

よく分からないこと書いてますよね。

日記に書いても仕方ないとは思いますが、今度会った時にきちんとお話ししますね。

学園祭中に会えるように、絶対ぜったいに会いに行きますので待っていてください。

絶対ですよ？

しずな

第三十九話

出会う奴出会う奴全員の名前を覚えている奴なんて漫画の登場人

ちよつと中途半端ですが、次回に続くので問題ない……はず。
はあ…。

しずなさん出てこないとテンション上がらないな。

誤字修正しました。

第四十話 我慢した後の解放感は異常（前書き）

いつも以上に卑猥な表現が多いです。ご注意ください

第四十話 我慢した後の解放感は異常

夕映と一緒に学祭を見ること数時間。

最初こそ楽しく和気あいあいと楽しんでいた。

今は世界樹前の広場近くのベンチで、適当な売店で買った異色な色のジュースを色々飲み比べしていた。

……。

…この“ゲルバナ味のジュース”。味がないな…。

まあ、それはともかく、当然ジュースも飲み過ぎれば生理現象がやってくるわけで……。

「あうあうあうあ……（飲み過ぎた。ものっそいトイレ行きたい…
…）」

そう、夕映のジュース飲み巡りをしていたその影響だろう。

気がつけば、もの凄くトイレに行きたくなっていた。

「えっと……。だ、大丈夫ですか？ 顔が赤かったり、青かったり、白かったり、あぐく紫色になってるんですが——」

「だ、大丈夫だ……（もういつそデコッ娘に飲んでもら——アカン。なんか変な方向に思考が……）」

嗜好——じゃなくて、思考がぶっ飛んでヤバい方向になっている。そんなぐらい切羽詰まってるのだ。

このままでは、どんなHENTAI行為をするか分かったモノではない。

「夕映ッ——！」

「は、はい！？（き、急にマジメな顔になったです。それに、夕映って呼び捨てで……）」

ガシッ（肩を掴み）&ズイッ（引き寄せる）。

「夕映……俺……（やばいやばいやばい）」

「け、桂介さん……（顔が近い。う……そんな真剣な顔で見つめられると、ドキドキして……）」

ちなみに、ここは学祭での有名な告白場所である世界樹前の広場だ。
残念ながら、この近くにはお手洗い場がない。

しかしここで「ちょっとトイレに行ってくる」と言うのは、いくら知り合いの夕映っちでも、女の子相手に面と向かって言うのは気恥ずかしい。

ここは、そこはかともなくもさり気なくこの場を離れて何食わぬ顔で合流したいのだが…。

「俺、もう我慢できそうにないんだ（膀胱的な意味で）」

「我慢できないですかっ！？（未成年者お断りの意味で）」

アカン。

ストレートすぎた。夕映っち引いてるし、顔真っ赤やん。

というか、そんな事言ってる間も惜しい。

「だ、ダメですっ！！ まだ私たちには早すぎます。せ、せめても
う少し我慢を…」

「我慢など出来ようはずがないっ！！」

実際、先ほどから我慢しっぱなしなのだ。

ここは多少強引でも、夕映っちの気を逸らすなりして速やかに厠に向かわなければ――

――股間が破裂するっ！！！！（決して比喻表現ではない）

「夕映。何も言わずに目を閉じてくれないか？」

「えー???? め、めめ目を閉じた私に、一体何をするつもりですか！！????」

「いいから、ほら早く」

「あ……っ……」

真っ赤になっているが、夕映っちも我慢しているのか？

いや、だが今は気にしている場合ではない。

「そう、そのままジッとして……」

「や、やさしく……」

「ん？」

「やさしく……してください……」

プルプルと震えながら、夕映は真っ赤な顔で目をつむった。
そんな彼女に、俺は精一杯の優しさで応えるのだった。

「ああ、いくよ……——ハア——ッ……!!」

ズビシッ!!（首に手とうが入る音）

「はうつ!!!？」

バタッ。

夕映っちは倒れた。

「さて、トイレトイレ……」

とりあえず、夕映っちはベンチに寝かせておいた。

ネギま！　　く外側に立つモノく

第四十話　　我慢した後の解放感とは異常

トイレが見当たらないので、適当な店で借りる事にした。

その圧倒的な解放感に酔いしれていると、天井から物音がする。

タンツ！

ビシッ！！

バシンツ！！！！

あまりの快感に天井を仰いでいたので殊更ビックリした。

「な、なんぞ？」

けっこう大きな音だった事もあり、気になった。

俺は、階段を上り音の正体を確認しに行く。

そこは広いオープンテラスのような場所だった。

そこで見たのは、裸の高音とメイちゃんだった。

「……これは、けしからんな」

「へ？ け、桂介さんっ！??」

「イヤッ！！ 見ないでくださーい」

彼女らの奥でネギくんとかいた気がするが、そんなモノは後回しだ。

今はせつかくの裸体を堪能しようではないか。

「ふむふむ、メイちゃんは肌が綺麗だな。高音も裸に靴と靴下だけは残すとは……分かってるじゃないか」

「だ、だから見ないでくださいよっ！」

「桂介さんっ！！ バカな事を言っていないで、アレを止めてくださいっ！！」

そう言つて奥の方を指さす高音。

そちらには、ネギとアスナンの二人がいつものようにじゃれ合っていた。

「ネギくんのアスナんじゃないか。あの二人は仲が良いな」

「そういう事ではないんです！」

「ネギ先生が世界樹の影響でおかしくなっているんです。桂介さん、ネギ先生を止めて下さい！！」

メイちゃんが言うので、今度は注意深く見てみる。
ん？

あのネギくんの頭にかかっているのは……

「よし、ネギくんは俺が止めよう」

「桂介さん……」

「お願いします。ですが、気を付けてください。あの子、恐ろしく強いですよ」

「任せろ。ネギくん！ その黒いブラをよく見せるんだ！！」

「ちょ、私の下着をどうするつもりですかっ!？」

まずはその黒いブラついて話を聞く事。

それが重要だ。

まあ、ブラ云々は置いておいて、ネギくんと向き合う。

こうして対面すると、確かにいつものネギくんには見えなかった。

「さて、とりあえず止まれ。ネギくん」

「桂介さん——」

とりあえず、アスナン達の前に立つ。

ハリセン持つてるアスナンの方が俺より強そうだが、高音とメイちゃんに止めてほしいと言われたからな。

形だけでも止めるとしよう。

しかし、ネギくんは言葉どうりにその場で停止した。

「あれ？案外素直だな。…まあ、いいや。では、ゆっくりと手を頭の上に上げて——」

「それでは、桂介さんがボクとキスしましょうか？」

ネギくんを拘束しようとする、予想外すぎる告白を聞いてしまった。

いくらなんでも、子供云々以前に同性とキスする気は更々ない。

そう思っていたのだが……。

「……はい？何を言って……ん？なんだ？世界樹が光って——
——ぎゃああああああああッ！？」

ネギくんの言葉に反応するかのように、世界樹が発光し、その光が俺目がけて降り注ぐ。

「おおおおおおおおおおおっ！？」

「桂介さんっ！？」

反射的に腕で防御の姿勢をとってしまふ。

しかし、叫んでみたものの、降り注ぐ光には俺自身に何の効果もない。

そう。

ネギくんがやたら愛おしく感じる事以外は。

「……………」

「桂介……さん？」

何故だ。

かつてこんなに胸が高鳴った事があっただろうか？

この胸のときめき……まさしく“愛”だろ。常識的に考えて。

「ネギくん……」

「桂介さん……」

俺は、ネギくんをそつと抱き寄せて……

「ダメですーー」

しかし、のどちゃんに止められた。

そして、今度はアスナと二人でネギくんを奪い合う。

「そ、そうよ。男同士で何考えてるのよ!! やるならせめて女の子にしないよ!!」

「そ、そうです。私が…私がネギ先生にキスしま…いえ、されます
——っ!!」

「分かりました。それではのどちゃんとキスで——」

「ダメよ私が——」

「では、アスナさんで——」

「いいえ、私が——」

「では、のど——」

「だからアタシが——」

「アス——」

ふむ、二人がネギちゃんとキスをするようだ。

しかし、では俺は誰とキスしたらいいんだろうか？

「ネギ先生！！ 桂介さん！ しっかりしてくださいっ！！」

「だ、大丈夫ですか？」

あ、そういえばこの娘たちがいたな。

く今日のメイちゃんく

「ふふっ……アスナさん……ん」

「やめ、ネギやめて！？ ちょ……アーーーーッ！！」

「あわわわ……」

目の前では、ネギ先生とその生徒だろう。

濃厚なキスシーンが行われている。

「ど、どうでしょう!? お姉さま」

高音・D・グッドマンのパートナーでもある私、佐倉 愛衣は、熱くなる頬を顔を手で隠しながら、お姉様に助けを求めた。

先輩であり、自分にとって尊敬に値するこの人はいつだって、真っ先に私を引っ張ってくれた。

そう、お姉様ならなんとかいい考えを出してくれるはず。

「あれ? お姉さま???」

しかし、さっきまで隣にいた彼女の姿が見当たらない。

キョロキョロと周囲を見回すと、隅の方。壁にもたれるように抱きすくめられる高音の姿があった。

「ん……ああ、はあ……あ……」

「普段の凛々しさは何処にいったのかな? 普段は強情な高音も、身体は正直なんだな」

正確に言えば、桂介に抱きしめられていた。

彼は、高音に耳元で囁きながら、優しい手つきで高音を愛撫している。

高音自身も、呆けたように顔を真っ赤にしてその場に崩れ落ちた。

まるで、腰が砕けてしまったかのようなうだ。

「け、桂介さんっ!!?」

「ん? ああ、メイちゃんか…。そうだな。メイちゃんもおいで一緒に可愛がってあげるよ」

それは、普段おちゃらけてこそいるが、何処か憎めないあの人はなかった。

「な、なな何を言っ…そ、それより! お姉さまに何をしたんですか!」

「ふふふ…」

何処か怖いその表情を見せる桂介さん。

断言します。その時私は、決してまばたきをしませんでした。

でも、突然。本当に突然、彼はその場から消えたのです。

「メーイ〜ちゃん」

そして、私の名前を呼びながら肩を後ろから掴む誰かの声。

反射的に後ろに振り返ろうとした私ですが、勢いがつき過ぎて、体を崩してしまう。

あ、転んじやう。と思った私は自然に身構えてしまいが、衝撃はいつまで待ってもこなかった。

「……??」

恐る恐る、確認しようと目を開けると桂介さんの顔が文字通り目の前にあった。

どうやら、彼に抱かれる形で助けてもらったようだ。

彼の腕に抱きしめられてしまい、思考が落ち着く間もなく、思考がぐるぐると高速回転でテンパってしまう。

「あわ、あわわわわ…」

「それじゃ、大人のキスからいこうか」

拝啓、お父さんお母さん。

私は、今日。尊敬するお姉さまと一緒に大人の階段を昇るようです。

第四十話 我慢した後の解放感は異常（後書き）

うん…メイちゃんとか脱げ女はスルーするはずだったが……どうしてこうなった？

第四十一話 売り言葉に買い言葉。その場の勢いつてあるよなあ

すっかり日も沈んで暗くなると、学園中にある照明にも灯が燈るのだが、学生中ではそれだけではなく花火も上がる。

おかげで、暗くなってもその喧騒は一向に収まる気配がなかった。

その華やかさに皆が皆、笑顔で花火を見あげていた。

しかし、とある屋上の片隅。

二人の男と男の子は、学祭とは正反対の沈んだ顔で一緒になって頭を垂れていた。

「うう……。ぼ……僕はなんてことを……」

「……………なんてこった」

原因は世界樹の異常発光。それに伴って表れる膨大な魔力による魔力の影響のせいだった。

「っていつか、兄貴はともかくなんで旦那まで凹んでるんですかい？ 少なからず可愛い娘たちだったじゃないですか。羨ましいってもんですぜ」

カモは呆れたように呟く。

兄貴ことネギは教師という肩書きがあるし、いくら知人とはいえ生徒相手にキスをしたのだ。

生来の生真面目さもあって、かなり凹んでいるようだ。

しかし、旦那こと桂介はまた事情が違う。

彼の普段からの飄々ぶりを見ると、事故……かどうかは分からないが、綺麗な女性や可愛い女の子とキスなど喜びの種でしかないだろうに。

そう思ったのだが、彼の落ち込みっぷりはネギに負けずとも劣らずといった感じだ。

もしかして、根は本命一筋の純情ボーイだったのだろうか？

「うう……………ファーストキス…だったのに……………」

「…旦那は思ったよりもピュアなんすね」

……………別の意味で純情だったようだった。

「うう……………被害者は私たちですのに……………」

「うう……もうお嫁にいけないです……」

桂介のあまりの凹みっぷりに、どちらが被害者か分からないほどだった。

ネギま！　く外側に立つモノく

第四十一話　売り言葉に買い言葉。その場の勢いつてあるよなあ

ネギくんや高音たちと別れると、俺は夕映を迎えに行った。

高音とメイちゃんは、何か言いたそうだったが、目が合うと真っ赤になって逸らされるので、結局そのまま別れた。

まだ心の傷は大きいが、落ち込んでばかりもいられない。

自分が精神的に弱いという自身と自覚はあるが、いつまでも弱いままの俺ではないのだ。

……。

…………… つぐす。

…さて、それよりも夕映っちである。

とりあえず、寝かせておいたベンチに行くと、誰かと一緒にいるようだ。

見ると、それはネギくんと……もう一人誰だ？

「あれ？ ネギくん……」

「あ、桂介さん。しばらくぶりですね」

さっき会ったばかりなんだが、なんでまたここにいるんだ？

「あはは。桂介さんボクは今日、3回目なんです」

顔に出ていたようだ。疑問に答えてくれた今のネギくんは、真帆良

祭一日目を3回繰り返してきたという事だろう。

「んで…夕映っちはともかく、そっちのちっこいのは誰ぞ？」

「ちっこいって…オレの事が…っ！…！？」

いきなり叫び出すとか喧しい子供だな。

「前に会ったやん！　コタローや！　犬神コタロー…！！」

「ああ。…ワリ。ぜんっぜん覚えてないわ」

「ぐう…正直に言われるとか普通に傷つくわ……」

まあ、男の子とか興味ないんで仕方ないさ。

さてさて、そんな訳で仲直りも含めて四人で食事と相成った。

途中で夕映っちをすっぱかした罰と、コタロー君を忘れてた罰で俺が奢るハメになったけどな…。

「スイマセン。ボクの方まで出してもらっちゃって」

「いいよ。気にすんな。ネギくんにはよく飯奢ってもらってるし、たまにはな……」

まあ、一度どこるか給料日になるとちよくちよく奢ってもらっている。

ネギくんも変に気前がいいから、たまには返さなければちょっと良心がチクチクする。

そのまま何の気なしにネギくんたちと同行する。

どうやらネギちゃんとコタロー君はこれから格闘大会に出場するらしい。

「なんなら、兄ちゃんも出たらどうや？ 強いんやろ？」

「めんどいからパス」

大会自体もかなりシヨボいらしく、たとえ優勝しても10万円程度の賞金しか出ないのだ。

巨大な真帆良学園では、100万、200万円の大会など特別に珍しくもない。

どうせなら、そっちの方に参加した方がお得である。

「ちえつ、兄ちゃんが出てくれるなら大会もオモロくなったやろうに……」

残念がるコタロー君とは別にネギくんは若干安堵しているようだ。

まあ、エヴァに頼まれてネギくんに指導という名のイジメをしているから、俺とは闘いたくないんだろっな。

「アハハ……残念だったね小太郎くん——って、あれ？ 会場の変更だつて」

「あれ？ 本当です。しかもこの場所は龍宮神社ですね」

気を取り直して会場に向かうと、そこには張り紙で、会場の変更。と書かれていた。

バスで移動し、龍宮神社まで来ると、ガヤガヤと大勢の人間が集まっている。

どうやら、ここにいる人が全員、格闘大会の出場者らしい。

「オイオイ、ホンマにここか？」

「とてもショボイ大会には見えませんけど……」

「ですね……」

「なんか、スゲー図体のヤツいるな……」

様子がおかしいと、思っていると親切な格闘家が教えてくれた。

何でも、真帆良中の格闘大会を纏めて総合格闘大会として開催する事になったらしいのだ。

しかも優勝賞金が驚きの1000万円。

巨大な真帆良の学祭中でもこれほどの大きな大会は他にはないくらいだ。

実際、参加者の多くがこの事態を喜ぶ声がほとんどである。

「おっしゃ！ 俄然やる気出てきたわ」

「よっしゃー！ いけー兄貴ー優勝だー！（\$）（p）
\$）/ジュルリ」

「カモくん。賞金が欲しいだけでしょ？」

ネギくんたちも突然の大会の変更に驚きこそすれ、かなりノリ気のようなのだ。

「あ、ネギ。なにしてんのよこんな所で」

声につられて見ると、そこにはアスナと愉快なこのかと刹那がいた。
連れ立って会場へと向かう。

「ネギくんも大会に出るん？」

「はい。小太郎くんと一緒に出るつもりです」

「桂介さんも出場するのですか？」

「賞金が魅力的だから考え中……」

賞金は魅力的だが、これほどの大きな大会なら倍率も相当高いモノとなるだろう。

俺自身は会場へ向かいながらもいまだに迷っていた。

「——私はここに最盛期の“まほら武道会”を復活させるネ。
飛び道具及び刃物の使用禁止！！……そして——」

主催者の超の話を右から左へ聞きながら、会場の選手たちを見回す。

なんだかんだで、学生のお祭りだ。

それほどに強いヤツがいるわけ……………なんか、達人クラスがゴロゴロいるんだけど？

うーん……………負けるとも思わないけど。俺、素手の闘いはケンカしかした事ないんだよねえ……………。

「む、キサマもいたのか」

「あれ？ エヴァ」

どうしようか考えていると、聞き覚えのある声の下から。

ゴスロリータな妹のエヴァだった。

「どしたエヴァ？ 子供は帰って寝る時間だぞ？」

「ふん。キサマこそココで何をしている？ まさかキサマも武道大会に出るつもりなのか？」

「も？ まさかとは思うが、エヴァ。この大会に出る気なんじゃ？」

「だったらどうした？」

えー？ エヴァは強いけどまだガキだぞ？

さすがに兄としては、可愛い妹に殴り合いの大会に出すのは気が進まない。

「やめとけやめとけ。下手に怪我でもしたらどうするんだよ」

「ムッ……この程度の雑魚ザコどもに負ける私ではないわ。いいからキサマこそ怪我しない内に帰れ」

ムッ？

親切心で言っただけなのに、そういう言い方はカチンと来るぞ。

「えー？ エヴァみたいなチンチクリンのお子様が勝てるとは思えないけどなあ？」

「…ムカツ。はんつ。そういうキサマこそ泣いて恥かく前にすっこんでいたらどうだ？ 私と当たっても手加減などしてやらんぞ」

ほほう。言いますねエヴァさん。

ちょっと、思い知った方が妹の為になる気がしてきたぜ。

「ほ、ほほう。面白いこと言っな。ならどっちが上か決着をつけてやろうかあ？」

「いいだろう。タダでやるのも面白くない。負けた方が勝った方に絶対服従でどうだ？」

「そうだな。それくらいじゃないと張り合いがないぜ。なんならハ
ンデでもつけてやろうか？」

「ふ、ふふふ…面白い。せいぜい、いきがっていられるのも今の内
だ。思い知らせてやろうじゃないか」

こうして俺も、まほら武道会に参加することになったのだった。

く今日のオコジヨく

「んで、結局嬢ちゃんは兄貴と旦那のどっちがいいんだ？」

「べ、べべべべべべべつに桂介さんの事なんてこれっぽっちも
好きでもなんでもないですよ！？」

カモが夕映と一緒に事の成り行きを見守っていたのだが、突如気に

なっていた事を夕映に尋ねた。

ぶっちゃけ、夕映の嬢ちゃんの好きな人物である。

人の好意を図ることのできるオコジヨ妖精ではあったが、夕映の嬢ちゃんは特に兄貴ことネギと、旦那こと桂介の間でゆらゆらと揺れていたのだ。

ここ最近はずっと旦那の方へと傾いていたので、ここらで確認の意味も含めて本人に直接尋ねる事にしたのだが……。

「（…いや、コレもう決定だわ）…あゝいいや。もう分かったから……」

「分かったって何がですか！？ 私は至って真面目に話して……」

テンパる夕映に、どうやって仮契約をさせようか。と考えるオコジヨだった。

くついでに高音く

「ふ、ふふふ。武道大会。ちょうどいいですわ」

パトロールの傍ら、早くも大きな話題となっている武道大会について知った、高音・D・グッドマンは、自らも大会に出場する事を決めていた。

後輩でありパートナーでもあるメイと一緒に大会の手続きを済ませ、来たる対穂守桂介戦へ向けて一人闘志を燃やす。

桂介と何度か仕事で組んだ事がある高音には、桂介が優に大会出場を決めるほどの実力があるのは目に見えていた。

そして、自分がそこまで彼に追いつけるほどの実力がないことも。

しかし、これは武道大会。

戦闘では及ばないにしても、大会というルールの上なら、桂介に一矢報いる事が出来ると高音は睨んでいた。

「ああ、目に浮かびますわ…。やるな高音。まさかここまで追い詰められるとは思わなかったぜ」ふふん。私とてマギステル・マギを目指す身。これくらい当然ですわ。「そうだな。頑張った高音にはご褒美をあげないとな」そんな、ご褒美なんて…「ふふ、ならこの間のキスの続きをしようじゃないか」あつ…ダメ。そんな…ここでは皆が見ていますわ。「見せつけてやればいいさ」そんな…それは、だめ…——な…んてことになったりして／／／

「お姉さまが……壊れた……（でも、あの時の桂介さんかあ……
……ドキドキ……／＼／＼）」

とばっちりを受けたメイはそんな高音の様子に一人ため息をつきつつも、何がしか期待するメイであった。

第四十一話 売り言葉に買い言葉。その場の勢いつてあるよなあ（後書き）

今回は難産でした。決してサボってたわけではないですよ？（汗）

まあ、ネタが浮かばない日もありますよ。

……これだけ間が空いたら良い訳にもなりやしません。

第四十二話 エヴァに札束でソフトSM……最高じゃないかッ！！

『まほら武道会』予選会は20名グループ一組のバトルロイヤル形式！！
AからHまでの各組より2名ずつが選出！！ 合計16名が明日
の本線に出場となります！！！！』

さて、武道会の予選である。

俺はエヴァやネギくん達と外れてG組グループだ。

他の組では結構知り合いがいるが、この組には顔見知りはいないようだ。

……もしかして、ぼっち？

そ、それよりも武道会だ！！

きっかけはエヴァとのいざこざからだが、出るからには優勝を目指そうではないか。

なんせ、優勝賞金一千万円だ。

美味しいモノを食っても良し！ ゲームを買い漁るも良し！

よりどりみどりである。

しかし、俺は優勝賞金を使ってある事をしようと考えていた。

優勝賞金である一千万円。

その中の札束、百万円分を持って、ひたすらエヴァの頬をぺちぺち叩いてやるつもりだ。

プライドの高いエヴァのことだ。勝者のする事に口を挟まないだろう。

あのエヴァが屈辱に震えながら、されるがままにぺちぺちされている事を想像するだけで笑いが止まらんぜ。

「……………くつくつく……………やっべーっ！ 興奮してきたー
ーッ！ー！）」

ざわ…ざわ…。

ざわざわ……。

「おいおい、あの男。笑っていやがる」

「ああ、よほど自身があるみたいだな」

「しかし、なんて不気味に笑うんだ」

「ああ、まるで勝つのが当然と言わんばかりだ。…要注意だな」

ん？

気がついたら、かなり注目されている。

イカンイカン。武道会の予選はバトルロイヤルだ。

あまり目立たないようにして、楽に本選に出場したいから気をつけねば。

理想を言えば、予選は隠れてやり過ごして残った奴だけ叩く。

とても効率的で賢い戦い方だぜ。

「ふ…完璧な作戦……」

「^{グループ}「……ッ！！（よし、まずはアイツから先に倒そう！！）（×
G組全員）」」

『^{グループ}それでは、G組も人数が集まりました。第6試合となります。試合開始！！』

「^{グループ}「おっしやあああああつ！！！！ 先手必勝ッ！！！！！！」（
× G組全員）」」

あれ？

なんか、皆さん。まとめて俺の方に向かってきてない???」

「死にさせー……ッ!!!!!!」(×グループG組全員)」

四方八方から迫りくるのを一人一人捌くにも、限界がある。

つか、20人全員が波のように襲ってくるのでまるで肉の壁である。

20人もの男、男、男。男の塊。

反射的に回避行動をとっていた。

「おっしゃ!! 捕った……ん!?!」

先頭にいた男が、俺を掴まえようと手を伸ばす。

しかし、そこにいた俺の身体は、まるで陽炎のようにその場から消える。

「そんな馬鹿な……——ぐえあっ!!??」

勢いのついた身体は止まり切れずに、変な態勢で前につんのめりそうになる先頭の男。

そこに、状況が分からず後ろからどんどんと続く男の波が彼を押す。

「待て待て！！　これでは外に出てしま——」

気合いと根性で止まろうとする先頭の男。

可哀想なので、後ろに回り込んで、男の集団に向かって声をかけてやる。

「それ——！！　どんどん進め——！！！！　最後まで押し出せ——！！！！！！」

「やめやめやめやめてえええええええええッ！！！！」

結局堪え切れず、荒波と化した男たちによつて、先頭の名もなき彼を含むその多くがそのまま舞台から退場していくのだった。

ネギま！　　外側に立つモノ

第四十二話　エヴァに札束でソフトSM……最高じゃないかッ！

ふう…。

まさかいきなり全員に狙われるとは思わなかった。

あの後、集団の後ろにいた男たちも、その勢いのまま後ろから場外へ落としてやった。

もはや武道でもなんでもない戦闘しかしていないが………まあ、勝てばいいでしょう。

さて、他よりも幾分以上に早く終わったので、他の組はまだ予選が続いている。

せっかくだし、選手候補の連中を見ておこう。

『おーっと、これは強烈！　D組の辻剣道部部長の木刀による一撃だーっ！！　しかし、中武研の菲部長フエイによる一撃で木刀折られたー！ーッ！ー！ー！』

……木刀を素手で折る女の子…って、ウチのクラスメイトやん。

ネギくんの憲法の師匠。くーふえいちゃんだ。

あの娘も出んのか…ん？ くーふえいちゃんの後ろにいる巫女さんで色黒のナイスプロポーションの美人さんも同じクラスの娘だ。

「どんだけ達人多いねん。ウチのクラス…」

最近の女の子は強い、という事だろうか？

ワー！　ワーー！！

所変わって、歓声のする方へ。

そこでは子供が舞台上で大暴れだった。

よく見なくてもネギくんである。

「ネギくーん、頑張れよー」

「八極拳八大招式……絶招通天——あ、桂介さん。ありがとうござ
——あ」

俺の声に気を取られたネギくんの拳が、大男の鳩尾にイイ感じに拳が入ってしまったようだ。

ふつとばされた大男は、白目でビクンビクンと震えながら、口からブクブクと泡吹いてる。

「だ、大丈夫ですか——！！؟؟？」

……見なかった事にしよう。

E組にはコタローくんがいた。

他にも同じクラスの糸目の姉ちゃんこと長瀬さんもいる。

「うおりゃー！ 五つ身分身——！」

「おお。では1こちらは2人でござる」

しかもなんか増えてた。

…。

なんだろうね、コレ。

C組では刹那とツインテールがいた。

スカートがヒラヒラしていて、とてもイイ。

「刹那————!!」

「あ、桂介さん……（応援に来てくれたのかな……）」

「パ・ン・ツ見えてる————!!」

「大声でなに叫んでいるんですか————!!??」

カメラがないのが残念だ。

刹那たちの隣の舞台ではタカミチやエヴァがいた。

タカミチは一般人には見えない拳を笑顔でボコスカ入れている。

タカミチは教員に見えてグラップラーだったようだ。

「タカミチーもうちつと手加減してやれー」

「おや、桂介くん。はは。まあボクにも負けられない勝負なんだよ」

そついや、ネギくんとなんか勝負したいんだっけか…。

でも、俺と先に当たる可能性もあるんだよねあ。

ん……まあ、先に誰かと当たるだろ。

「ん？　なんだ、キサマか。そつちはどうした？　もう負けて終わったのか？」

エヴァの憎まれ口も相変わらずである。

「勝ったってーの！　エヴァこそさっさと諦めてやられちまえ」

「ふん。この程度の奴らにやられる訳がなかるう」

そう言うが、実際闘っているのはタカミチだけである。

「くっ…高畑にはかなわねえか……」

しかし、タカミチにやられながらも起き上がるヤツがいた。

ダメージこそ残っているが、タカミチに勝てないとふんだのだろう。

矛先をタカミチからエヴァへと変える。

「悪いな、嬢ちゃん。君を場外に出して勝ちにさせてもら——」

「雑魚が気安く私に手を触れるな」

しかし、エヴァの肩に手の置いた瞬間、体術によって楽々と投げ飛ばされてしまった

しかも、エヴァが背中に指を当てるだけで、身体がマヒしたかのように男は動けなくなってしまう。

「動かぬほうがいいぞ」

「う、動けません……」

しゃがんだエヴァのスカートの中に顔を突っ込みながらもジタバタする男だが、エヴァに顔を太ももで押さえつけられ、どうしようも出来ないようだ。

バキッ！！！！

「おっと、この手すり腐っているのか？ 危ないなあ……」

その光景を見ていたら、何故か非常にイライラしてムカつとした。

そして、見ると掴んでいた手すりがいきなり音を立てて碎けていた。

手抜き工事でもしていたのだろうか？

まったく…ちょっと、力を入れるだけで壊れるとは……。

——結局、男はどうする事もできずにそのまま降参。

しばらくして、他の予選会場も次々に決着をむかえ、本選出場の15名が決まるのだった。

「今日は朝倉」

「朝倉サン。予選の結果出たかネ？」

朝倉が声に戻ると、そこにはクラスメイトの超がいた。

いや、今は武道会の主催者で自分にとっては武道会の上司に当たる人間だ。

彼女が確認に来たのは武道会の予選。

その結果である本選の出場者の確認であった。

「あゝその……結果は出たんだけど……ね」

流るように声を出す朝倉は、その結果に何かしら思うところがある

ようだ。

歯切れの悪いまま、結果の書かれた用紙を超へと渡す。

「なにかあったの——ム、コレは……」

予選の結果は、AからHまで。各組それぞれ二名ずつが予選の勝者として記入されているのだが…G組だけ人数が足りなかった。

「G組だけ一人なのよね。勝ち上がったの」

「穂守桂介……私アイツ嫌いネ……」

迷子の呼び出しという屈辱を受けた事は未来永劫忘れない。と超は未だ桂介に憎しみを抱いていた。

「しかし、どうしてこうなったヨ…サバイバルバトルとはいえ審判もいたネ。どうしてあの男だけが…」

「あ、見る？　一応さっきの予選の試合映像あるけど——」

そう言って、朝倉は先ほどの予選の映像をモニタールームの大画面に映す。

そこでは、桂介が所属していたG組の様子が映っていた。

『うおりゃああああああっ！！ オマエら纏めて押し出しちやるわーーーーっ！！！！』

画面では、桂介が20余名の男たちを纏めて場外へ押し出す様子が映っていた。

どこから出るのか馬鹿みたいな力技で、無理矢理場外へと落ちていく選手たち。

予選では大人数でのバトルワイヤル形式だったので、場外での決着もカウントではなく、出た時点で失格となっているのであるが……。それが裏目に出たようだ。

「どうしよつか……桂介さんだけシードにでもする？」

一応ルールとはいえ、結果的に勝ち上がったのは桂介だ。

ならば、実質的に足りない人数分。一人不戦勝になってもいいのだが、それはあくまで主催者へ委ねられる。

ただの司会で進行役の朝倉に、試合自体の取り決めやらに突っ込むのは分不相応である。

ただ、意見を聞くらいなら許されるだろう。

そう朝倉は思ってた聞いたのだが――

「あつはっは……それだけはさせないヨ。シードさせるにしたって桂介サン以外にするネ」

笑っているが、本気で嫌そうに超は答えた。

普段から笑顔であまり性根を出さない超にしては、この反応は珍しいモノだった。

「いた仕方がないネ。こんな事もあるつかと作っておいた工学部の科学の結晶！ 田中の出番ネ！！」

そう言って手をかざすと、どこからともなく大男が現れる。

一体どこにいたのだろうか？

「ふっふっふっふ。女子の皆さんには悪いが、田中のこのビームで真っ裸にして恥かかせてやるヨツ！」

「あゝ……それじゃ、足りない所にその、田中さん入れとくね」

こうして、超の指示で、15名だった本選出場者は当初の予定どおり16名となったのであった。

第四十二話 エヴァに札束でソフトSM……最高じゃないかッ!!（後書き）

42話をお届けします。

コタローくんの仮装（犬耳）がいつまで経っても付いているのはなんでなん？と思ってたら、そーいやコイツそーいう種族だったな…と最近気づいた作者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482m/>

ネギま！ ～外側に立つモノ～

2011年9月8日01時30分発行